

【あかほん】 【濱中】 氏家ト全総合 22 時間目 【妹】

1 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2006/12/25(月) 12:20:00 ID:RVta+LJK
まったりいきましょう

次スレ建てルールや、過去スレ情報は >>2-5 あたり

2 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2006/12/25(月) 12:22:43 ID:RVta+LJK
前スレ

【あかほん】 【濱中】 氏家ト全総合 21 時間目 【妹】

<http://sakura03.bbspink.com/test/read.cgi/eroparo/1158053539/>

過去スレ

【あかほん】 【濱中】 氏家ト全総合 20 時間目 【妹】

<http://sakura03.bbspink.com/test/read.cgi/eroparo/1153304002/>

【あかほん】 【濱中】 氏家ト全総合 19 時間目 【妹】

<http://sakura03.bbspink.com/test/read.cgi/eroparo/1150028186/>

【濱中アイ】 氏家ト全総合 18 時間目 【妹は思春期】

<http://sakura03.bbspink.com/test/read.cgi/eroparo/1145727127/>

【濱中アイ】 氏家ト全総合 17 時間目 【妹は思春期】

<http://sakura03.bbspink.com/test/read.cgi/eroparo/1142255932/>

【濱中アイ】 氏家ト全総合 16 時間目 【妹は思春期】

<http://sakura03.bbspink.com/test/read.cgi/eroparo/1139468699/>

【濱中アイ】 氏家ト全総合 15 時間目 【妹は思春期】

<http://sakura03.bbspink.com/test/read.cgi/eroparo/1137258988/>

【濱中アイ】 氏家ト全総合 14 時間目 【妹は思春期】

<http://sakura03.bbspink.com/test/read.cgi/eroparo/1135925974/>

【濱中アイ】 氏家ト全総合 13 時間目 【妹は思春期】

<http://sakura03.bbspink.com/test/read.cgi/eroparo/1134125251/>

【濱中アイ】 氏家ト全総合 12 時間目 【妹は思春期】

<http://sakura03.bbspink.com/test/read.cgi/eroparo/1132404885/>

【濱中アイ】 氏家ト全総合 11 時間目 【妹は思春期】

<http://sakura03.bbspink.com/test/read.cgi/eroparo/1129514442/>

3 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2006/12/25(月) 12:23:25 ID:RVta+LJK

【濱中アイ】 氏家ト全総合 10 時間目 【妹は思春期】

<http://sakura03.bbspink.com/test/read.cgi/eroparo/1127110404/>

【濱中アイ】 氏家ト全総合 9 時間目 【妹は思春期】

<http://sakura03.bbspink.com/test/read.cgi/eroparo/1125079101/>

【妹】 氏家ト全総合 8 時間目 【濱中アイ】

<http://sakura03.bbspink.com/test/read.cgi/eroparo/1122381257/>

【濱中アイ】 氏家ト全総合 7 時間目 【妹は思春期】

<http://sakura03.bbspink.com/test/read.cgi/eroparo/1120910446/>

【濱中アイ】 氏家ト全総合 6 時間目 【思春期】

<http://sakura03.bbspink.com/test/read.cgi/eroparo/1118937114/>

【女子大生】 氏家ト全総合 5 時間目 【思春期】

<http://sakura03.bbspink.com/test/read.cgi/eroparo/1117279379/>

【家庭教師】 氏家ト全総合 4 時間目 【思春期】

<http://sakura03.bbspink.com/test/read.cgi/eroparo/1114597887/>

【カテキョ】 氏家ト全総合 3 時間目 【妹】

<http://sakura03.bbspink.com/test/read.cgi/eroparo/1109699736/>

【濱中】氏家ト全総合 2時間目【妹】

<http://sakura03.bbspink.com/test/read.cgi/eroparo/1106563195/>

家庭教師濱中アイ

<http://sakura03.bbspink.com/test/read.cgi/eroparo/1095652398/>

古田氏作のSS保管庫

<http://yellow.ribbon.to/~hamanaka>

4名前：名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日：2006/12/25(月) 12:23:56 ID:RVta+LJK

【お願い】

作品の投下は以下のようにしてくれると助かります。

- (1) . 投下します宣言
- (2) . 本編投下
- (3) . ここまでです宣言

また、作品のタイトルは上記の(1)、(3)のどちらでも良いのですが、
1行独占で書いてくれると助かります。本文に紛れると見落としてしまうことがあるので。

↓こんな感じ

タイトル：「?????」

名前欄はこれまで通り作家さんのコテでよいです。

5名前：名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日：2006/12/25(月) 12:24:29 ID:RVta+LJK

☆☆☆☆☆☆ 次スレへの引継ぎについて ☆☆☆☆☆☆

容量が450KBを超えたら残り容量に注意しながら投下しましょう。

480KBを超えたら次スレが立つまで投下は控えてください。

次スレが立ったら、古田氏の保管庫の更新が済むまで落さないようにマッタリ保守で。
更新が済んだら、一気に埋めるかDAT落ちまで放置しましょう。(ただし、埋めの段階
で
作品を投下すると保管庫に記録されないかもしれないので注意。)

6名前：名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日：2006/12/25(月) 15:00:16 ID:ewT3u7qJ

>>1 乙。

7名前：名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日：2006/12/25(月) 15:51:46 ID:s5e5Y9i5

>>1

乙

そしてリョーコ誕生日おめでとう

マナカも昨日だったっけか

8名前：名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日：2006/12/25(月) 19:21:07 ID:PRtACiiE

乙ばい！！乙ばい！！

9 名前： 518 ◆8/MtyDeTiY [sage] 投稿日： 2006/12/25(月) 20:58:14 ID:+LCXBt13
聖夜に一人ですが何か？

アイ×マサヒコっばい、クリスマスっばいやつ。
エロなし。

10 名前： 518 ◆8/MtyDeTiY [sage] 投稿日： 2006/12/25(月) 20:58:54 ID:+LCXBt13

以下、ある大学構内での4人の女子大生の会話。

「つがいが増える時期が来たわね」
「ちょっ……つがいて、もうちょつと言いが」
「つがいはつがいよ！ 生でヤッて出来ちゃった結婚でもなんでもすればいいのよ！」
「な、なんで今日はそんなにもアグレッシブなんですか？」
「…昨日振られたそうよ」
「あ～……それで」
「振られたんじゃないわ！ 振ってやったのよあんな男！ なにさ！
ケチだし！ 顔だつてそんなにだし！ あっちのほうは下手もいいとこだし」
「あっちって？」
「あちはあっちよ！」
「??」
「…『あ』を『え』に変えなさいな」
「あ。あは……あはははは！ そっかそっか、そーいうことか」
「ちくしょー！ こうなったらやけ食いよ！ やけ食いしてやるわ」
「私も付き合いますよ」
「…しょうがない子ね、まったく」
「よし、食べに行こう食べに行こう。割り勘で食べに行こう」
「……………」
「……………」
「……………」
「はれ？ みんなどうしたの？ 早く食べに行こうよ。割り勘で」
「「「あんた帰れ」」」

11 名前： 518 ◆8/MtyDeTiY [sage] 投稿日： 2006/12/25(月) 20:59:41 ID:+LCXBt13

「なんてこと言われちゃったよ～」
小久保家まで「うえ～ん」と泣きながらやってきたアイ。
応対に出たマサヒコにぐずりながら友人達からの仕打ちを話す。
「ね！ ね！！ せっかくのクリスマスに酷いと思わない！？」
「いえ、その人達の気持ちが痛いほど分かります」
「マサヒコ君まで……」
「だって先生ハンパ無く食べるじゃないですか。大学生の懐具合は知りませんが結構厳しいのでは？」
「う～……確かにこの時期もうアルバイトしてないから厳しいかもしれないけど」

不満げに頬を膨らませる。

「まあこれ以上玄関で長話するのもあれなんで、あがってください」

「あ、うん。お邪魔します」

とてつと家に上がりこみ、家の中の雰囲気は妙なことに気づく。

日曜日ならば父親だって家に居そうなのに、やけに閑散としている。

「ねえマサヒコ君、お父さんとお母さんは？」

「昨日から2泊の旅行に行ってます」

「そうなの!？」

「ええ。今年はイブが日曜じゃないですか。それで父さんが月曜にも休み取れたから、ちょうどいいって温泉に行ってるんですよ」

言いながらアイを自室でなく、キッチンに案内する。

「そうなんだ……あれ? でもじゃあ何でマサヒコ君はいかなかったの?」

「まあ、たまには夫婦でゆっくりしてもらおうかなあと、辞退しました」
コンロにヤカンを置き、火をつける。

「へ〜…えらいねえ」

いい子いい子とマサヒコの頭を撫でる。

するとマサヒコはなんとも居心地悪そうにする。

「——って言うのは建前でして。実際には家で一人でのんびりしたいってのが少々」

「まっ! せっかく頭撫でてあげたのに!」

ぷんぷんと怒り出す。

「で、残りがもっと現実的な問題で、二人分しか確保できなかったんですよ、宿が」

「へっ!？」

「時期が時期ですから。キャンセルが二人分あっただけでもラッキーだったんですよ」
沸いたヤカンからお湯をティーポットへ。

「まあそーいったわけで明日まで俺一人です」

「ふ〜ん……あ、でも、今日はミサキちゃん達とクリスマスパーティーとかするのかな?」

「ミサキは学校の友達とするって言ってましたよ。結構な金持ちがいるとか、アイドルがいるとか何とか」

「リンちゃん?」

「的山は家族でレストランだよ〜って、犬のハナコも大丈夫なところみたいですよ」

「……じゃあマサヒコ君、ホントに今日一人なの」

「まあ、そーなりますね」

ティーポットからカップに紅茶を注ぐ。

茶葉もよく広がっていたようで、ふわっといい香りが広がる。

「先生、砂糖は?」

「ん、このままでいいや」

アイは紅茶を一口。

「ねえ、マサヒコ君」

「なんですか?」

「友達いないの?」

「は?」

マサヒコの動きが止まる。

「だってクリスマスに一人だなんてそうとしか思えないよ!」

「いや、そーいうわけでは……この紅茶も知り合いからの土産ですし。
それなりの交友関係を構築してるとの自負はあるんですけど」

「でもクリスマスに一人なんでしょ？」

「そりゃそうですけど、先生人のこと言えないじゃないですか」

「はうう！」

痛いところを突かれて悶える。

12名前： 518 ◆8/MtyDeTiY [sage] 投稿日： 2006/12/25(月) 21:00:36 ID:+LCXBt13

「そ、そーいえばそうだった……でも、マサヒコ君ホントに——」

「心配無いですって」

まいったなあといった感じでマサヒコは笑みを浮かべる。

「23日が終業式で、その後クラスの連中とファミレス、カラオケと行ってきましたから。

クリスマスパーティーも兼ねて」

「あ、そうなんだ」

「また集まるってのも面倒でしたからまとめてやっちゃったんですよ。

だから安心してください。ちゃんと友達いますから。つか俺なんかの事そんなに心配してくれなくても」

「するよ！！」

急に大きな声を出したアイの様子に目をぱちくりさせる。

「だって、私は君の先生なんだよ？……って、そりゃまあ、もう契約も終わっちゃったけど」

後半、ゴニョゴニョとごまかす。

「でも！ 先生とかそーいう事抜きにしたって……その、心配だよ……」

「……」

「あ！ それと！ 自分のことを『なんか』とかいっちゃだめ！ 謙遜と卑下は違うんだからね」

びしっと指を突きつける。

「いい？ もう『俺なんか』なんて言っちゃだめだよ」

「……わかりました」

「うん、よろしい」

アイはにこっと笑みを浮かべる。

その様子にマサヒコも相好を崩す。

「あ、そうだ。先生イチゴ食べますか？ もらい物ですけど」

「食べる食べる！ イチゴ大好き！」

マサヒコが冷蔵庫からイチゴを取り出し机に置く。

「あ、コンデンスミルクとか——」

「ふえ？」

「いえ何でも無いです」

すでにロー杯にイチゴをほお張っているアイを見て途中で言うのをやめた。

「んぐんぐ……ところでマサヒコ君」

「なんすか？」

「お母さん居ないならご飯どうしてるの？」

「軍資金を貰ってますから大丈夫です」

そう言ってイチゴを一口に入れる。

甘味と、程よい酸味が口の中に広がる。

「やっぱり俺一人置いていくのが心苦しかったんですかね。結構な額を置いていってくれましたよ。

ケーキだって注文してくれたみたいで。今日配達してくれるらしいです」

「ケーキ……ん？ お母さんはクリスマスケーキを注文したんだよね？」

「そりゃそうですよ」

「……クリスマスケーキって、普通ホールだよな？」

「あ……」

アイの言葉の意味に気づく。

同時に、ピンポンとチャイムが鳴った。

13 名前： 518 ◆8/MtyDeTiY [sage] 投稿日： 2006/12/25(月) 21:01:31 ID:+LCXBt13

「完膚なきまでにホールケーキだ。こんな量の物一人で食べさせようってのか、母さんは」

「うわ～おいしそ～」

「しかもアイスケーキ。となると保存するなら冷凍庫。入るかな？」

「生クリームもたっぷりだ」

「あ、でも冷凍庫入るスペースありそうだなそうだな」

「……」

「じゃあ一切れだけ食べて残りは明日以降に……すいません、先生。ちょっとおふざけが過ぎました。

だからそんな台所の隅っこでいじけないでください。一緒に食べましょう」

「……それはマサヒコくんのなんだから、一人で食べたらいいじゃない」

いかん、拗ねた。

「さっきのは冗談ですから」

「……食べていいの？」

「もちろんです。ほら、イスに座って。溶けちゃうから食べましょう」

「うん♪」

マサヒコが取り分けてくれたアイスケーキを嬉しそうに口に運ぶ。

「あま～い♪つめた～い♪おいし～♪」

幸せそうな、満面の笑み。

マサヒコも一口食べる。

「ねっ！ ねっ！？ おいしいでしょマサヒコ君」

「そうですね」

すでに二つ目を食べ始めたアイに軽く頭を下げる。

「これも先生のおかげですね」

「ふえ？」

きょとんとした表情で、フォークを咥えたまま首をかしげる。

なんとも子供っぽい仕草だが、童顔のアイの外見とは妙にマッチしていて微笑ましい。

「私のおかげって……なんで？ 私なんにもしてないよ？」

「一人で食べるよりも二人で食べたほうがおいしいですから。

だから、先生のおかげです。まあ、なんて言うか……」

照れているのか、ちょっと頬を赤くするマサヒコ。

「正直、一人ってのはちょっと寂しかったところですから。

先生が来てくれて……その……嬉しかったです」

「そ、そっか。うん、そーいってもらえると私も嬉しいよ。あは、あはは」

照れを隠そうとパクパクとケーキを食べる。

「な、なんなら夕ご飯も一緒に食べてあげよっか？ な～んて、あはははは」
「いいんですか？」
「ふえ！？」
「さっきも言いましたけど、やっぱり一人より二人のほうがおいしいですからね。
先生さえよければぜひお願いしたいところです」
「えっと……でも、いいの？ 私で？ 今日はクリスマスだよ？ 一緒に居るのが私でいいの？」
「先生がいいです」
「はうう！」
撃沈。

14 名前： 518 ◆8/MtyDeTiY [sage] 投稿日： 2006/12/25(月) 21:03:19 ID:+LCXBt13

「う～さむ。さっさと夕飯の材料買って帰りましょうね」
表に出てすぐ、マサヒコは外気の冷たさに首を竦める。
「マサヒコ君は相変わらず寒がりだねえ」
ご機嫌な様子 of アイとは対照的だ。
マサヒコはさらに首を竦め、着込んだコートに鼻まで埋まる。
「今日は特にですよ。アイスケーキ食べた直後だし。先生は寒くないんですか？」
「私は大丈夫かな。それより……ねえ、マサヒコ君」
「なんすか？」
「手、つなごっか」
アイの言葉にきょとんとしたマサヒコだったが、
「ええ、いいですよ」
手袋をはずして、アイに差し出す。
アイはマサヒコの手をぎゅっと握り、マサヒコのポケットに突っ込む。
「先生……」
「えへへ」
「先生もアイスケーキの食べ過ぎで寒かったんですね」
「……は？」
「だって寒いから手を繋ぎたかったんでしょ？ あ、この手袋そっちの手に使っていいですよ」
「えっと……マサヒコ君」
「はい？」
「これは当然の行為だと思うの。一応謝っとくから。ごめんね」
「は？ あれ？ 先生、何で拳握ってるんですか？ って、うお！？」
「え～いっ！」
マサヒコの頭に乙女の『何か』が色々詰まった拳が振り下ろされた。
フラグクラッシャーマサヒコはどこまでも健在だ。

END

15 名前： 518 ◆8/MtyDeTiY [sage] 投稿日： 2006/12/25(月) 21:06:04 ID:+LCXBt13

追記

「ところで先生、日曜日だっなのに大学に行ってたんですか？」
「レポートの提出があったからね！　ほんとだよ！　うっかり行っちゃったわけじゃないのよ」
「……そうですか」

16 名前： 518 ◆8/MtyDeTiY [sage] 投稿日： 2006/12/25(月) 21:07:23 ID:+LCXBt13
終了。

誤字脱字表現間違いはなにとぞ見て見ぬフリを。
追記部分は今まさに気づきました。
相変わらずの推敲の甘さ。
だから今年も聖夜に一人なんだろう。
さようなら。
そしてまた来年。

17 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2006/12/25(月) 22:09:13 ID:9CPWBkaz
518 氏のアイ先生はやっぱ最高だな(*´Δ`)
G J です!!

18 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2006/12/25(月) 22:42:50 ID:NJE8igF9
乙&GJ であります！

19 名前： ピンキリ ◆UsBfe3iKus [sage] 投稿日： 2006/12/25(月) 23:43:56 ID:8SkbSVqB
職人の皆さん、古田氏、お疲れ様です。
濱中ネタです。

スルー対象ワードは「ミサキのエロ語り」「直接の本番なし」「酒」です。
題は「聖夜の告白」でお願いします。

20 名前： ピンキリ ◆UsBfe3iKus [sage] 投稿日： 2006/12/25(月) 23:45:13 ID:8SkbSVqB
12月24日、それはクリスマスイブ。

今年は丁度日曜日ということもあり、例年以上の賑わいを街では見せている。
高級レストランやホテルは全て予約でいっぱいだし、ケーキ屋さんもおもちゃ屋さんも大
繁盛だ。

さすがにこの日ばかりは世の中のお父さんもちょっと一杯ひっかけていこうなどとは思わ
ず、
定時で仕事を切り上げていそいそと帰路へとつくことになる。

さて、中村リョーコのマンションでも、ささやかながらではあるがクリスマスパーティ
が開かれようとしている。

お祭り好きイベント好きの彼女が、こんな絶好の機会をみすみす逃すような真似をするは
ずがない。

それに何より、明日は彼女の誕生日でもあるのだ。

「よっしゃ、メリー・クリトリ～ス！」

「しょっぱなからやめて下さい」

リョーコのマンションに集まったのは、部屋の主であるリョーコ以外では、
濱中アイ、天野ミサキ、的山リンコ、そして帰国中である若田部アヤナといった面子だ。
小久保マサヒコは家庭の事情で遅刻、豊田セイジは風邪をひいて欠席となっている。
親戚が家に来ていて身動きが取りにくいマサヒコはともかく、セイジの風邪は多分に偽り

のニオイがするが、
リョーコはあえてセイジを強引に引っ張ってくるようなことはしなかった。
本当に風邪ならうつされると困るわけだし、無理に呼んだとしてもアイやミサキたちが絡みにくかろうと思ったのだ。
おそらく、数日後にセイジはこっそりと絞られることだろう、いろいろな意味で。
「よし、まずは乾杯といきましょう」
リョーコはそう言うと、大きなシャンパンのボトルを取り出した。
さすがにここはホストクラブでもF1の表彰台でもないので、シャカシャカ振ってボンと開けるなどということはしない。
いや、と言うより出来ない。
何故なら、すでに栓が開いているからだ。
無類の酒好きのリョーコが、皆が集まる前に一人でちびちびと飲んじゃっていたのだ。
「え、でもノンアルコールじゃないんでしょ？」
「お姉様と濱中先生以外は未成年なんですけど」
ミサキとアヤナが優等生発言を飛ばすが、そんなものを聞き入れるリョーコではないわけ。
「なーに言ってるのよ、私はこの部屋の主、主の命令は絶対、よって日本の法律は無効、というわけで飲め」
「三段論法にすらなってますけど」
「うっさいわね、リンコを見なさいよ。準備万端じゃない」
リョーコの言う通り、リンコはニコニコ顔でグラスを両手で持ち、シャンパンが注がれるのを今か今かと待っていた。
もし彼女に尻尾がついていたとしたら、左右にパタパタと振られていたことであろう。
「ちょっと、リンちゃん」
「えへへ」
ミサキは咎めるような目つきをしたが、リンコはまったく意に解さない。
と言うより、全然気にしていない。
「いいんじゃないかなあ、だってクリスマスなんだし」
「そんなの理由にならないわ。濱中先生も何か言ってあげて下さい」
「本当はダメだけど、今日くらいならいいんじゃない？」
「ええ？」
アヤナの振りを、あっさり流してしまうアイ。
この辺りの鷹揚さはさすがとしか言いようがない。
「はいはい、年長者二人が許可したんだから問題なし！ ほりゃ、カンパーイ！」

こうして、クリスマスパーティが始まった。
波乱のクリスマスパーティが。

◆ ◆
21 名前： ピンキリ ◆UsBfe3iKus [sage] 投稿日： 2006/12/25(月) 23:46:23 ID:8SkbSVqB

「ところでミサキ、マサとはどこまで進んだ？」
リョーコがこの質問をしたのは、パーティが始まってから一時間程経った頃だった。
「……マサちゃんと、ですか」
「そうそう」
小久保マサヒコと天野ミサキがつきあっているということは、当然この場にいる皆が知っ

ている。

中学卒業を前後に、二人は幼馴染からも卒業し、晴れて恋人同士になったのだ。

「あー、私も知ってたーい」

リンコがシャンパンのグラスを片手にひょいと手を挙げる。

その頬はすでにアルコールのせいでリンゴのように真っ赤になっている。

いや、リンコだけではない。

リョーコを除く全員が顔を赤く染めている。

「……私も知りたいわね」

「私も」

リンコに同意を示すアヤナとアイだったが、これがもし素面なら、違った言葉を口にしたことだろう。

「ほーら、皆聞きたがってるわよ」

ニヤリ、と笑ってミサキを促すリョーコ。

「ふふふ、ほらほらほら」

実は、この流れは全てリョーコの策略である。

マサヒコが遅れてくると知った時から、仕掛けようと企んでいたのだ。

アルコールを利用してエロ方面にスムーズに話を持っていく、その技術に関してはリョーコは一級クラス。

それに突っ込みマスターのマサヒコがない以上、ミッションの難易度はさらに下がろうというものだ。

「わかりました、話してあげます」

正座になり、背筋をしゃんと伸ばすミサキだったが、目の方は完全に据わっている。

「じゃ、まずは初体験から話してくれるかしら？」

心の中でガッツポーズを取りながら、リョーコはミサキのコップに泡が出る琥珀色の液体を注ぎ込んだ。

それを、ミサキはコクコクと息継ぎもせず一気に飲みする。

「ふはあ……」

「いい飲みっぷりじゃない」

「……もう一杯いたらけますか」

「はいはい」

リョーコはミサキだけでなく、アイ、リンコ、アヤナのコップにもビールを注いで回った。

二十分程前にシャンパンのボトルが空になってから、リョーコはこうして皆にビールを飲ませていたのだ。

無論、彼女の策謀——マサヒコとの進展具合をミサキ自身に告白させる——を成功させるために。

「……マサちゃんに始めて抱かれたのは、暑い暑い真夏の日のことでした」

ミサキはついに語り始めた。

酒で滑らかになった舌を動かして。

22 名前： ピンキリ ◆UsBfe3iKus [sage] 投稿日： 2006/12/25(月) 23:47:35 ID:8SkbSVqB

……私は、この日ある予感がしていた。

今日は特別な日になる、と。

そして、実際その通りになった。

私は、マサちゃんに始めて抱かれたのだ。

窓の外ではミンミンとうるさいくらいにセミが鳴いている、とっても暑い夏の日のことだった。

その日、私とマサちゃんは、私の部屋で夏休みの課題と一緒に取り組んでいた。マサちゃんがわからないところを私に聞き、私がそれを教えるという形で進んでいった。

確かに私の通う聖光女学院は進学校だし、マサちゃんの英稜高校よりは『上級』と世間一般では認知されている。

でも、両校のレベルにジャガイモのヨウ素デンプン反応とディラック方程式ほどの開きがあるわけじゃない。

だいたい、同じ高校一年生なのだから。

午前中は現代文、昼食後は英語に取り組んだ。

そうそう、この日の昼食は私が作ったの。

インスタントラーメンなんかじゃなく、ちゃんとしたのを。

そう、スパゲッティを茹でて一緒に食べたんだ。

……ミートソースはパックのやつを使ったんだけどね。

英語も一段落ついて、私達はお茶にすることにした。

お母さんが買ってきたケーキと、紅茶で。

たわいもない話をしているうちに、私がどれくらい前からマサちゃんのことを好きだったかって話になった。

この話、実は告白の直後にもしたことがある。

つまり、この話をするのは二度目だった。

私は、小さい時からずっとマサちゃんが好きで、

幼稚園に通い始めた頃には、もう将来はマサちゃんのお嫁さんになるって決めてた。

マサちゃんとおままごとで遊んだりしてる最中に、何度か「いつかマサちゃんのお嫁さんになるんだ！」って言った覚えがある。

だけど、マサちゃんはそれを知らないって言うんだ。

それは俺じゃなくてお前のお父さんだったじゃないか、って。

……まあ、そんなことで口げんかなんかしらないんだけど、

あまりにマサちゃんが「俺じゃない、お前の父さんと結婚するって言ってた」って言い張るもんだから、ちょっと悔しくなっちゃった。

それで「ひどいよマサちゃん、私はずっと、ずっとマサちゃんのことを好きだったんだから……」って涙目で訴えてみたの。

そうしたら、マサちゃんが急に真剣な顔になって、「ごめんな」と言ってぎゅっと抱き締めてくれた。

そのまま二人で抱き合っているうちに、キスがしたくなって、私は目を閉じて……。

「……甘い甘い口づけを交わしました。ちょっと大胆な気持ちになった私はマサちゃんの膝の上にのり……」

ミサキの話は続く。

羞恥心の堤防は完全に決壊してしまったようで、紡ぐ言葉に躊躇いがない。

それどころか、若干の陶酔を感じているらしく、蕩けた瞳には薄い悦楽の膜がかかっているように見える。

「耳をマサちゃんの胸に押しつけました。ひっく。マサちゃんの心臓の音が私の身体に火を着けたかのように……」

記憶を言語に変換する能力は見事なものだが、

思考力そのものはアルコールのせいでもかなりコントロールが危なくなっている。
ドラマのナレーションのように重々しい喋り方をしたかと思うと、ノロケるような砕けた口調にもなったりする。

時々、舌が空回りするのか、発音があやしくなる時もある。

「マサちゃんの手が私の腰にまわされました。瞬間、私は思いました。ああ、勝負下着穿いてよかったと……」

最早、誰もミサキを止めようとしなない。

アイもアヤナもリンコも、食い入るような表情でミサキの話に聞き入っている。

一人、リョーコだけが余裕の表情で、皆のコップに酒を注いで回ったりしている。

「『ミサキ……』『マサちゃん……』ああ、ついにこの日が来たのれす。ひっく、私のハジメテを奉げる日が……」

ミサキの話は、続く。



23 名前： ピンキリ ◆UsBfe3iKus [sage] 投稿日： 2006/12/25(月) 23:49:22 ID:8SkbSVqB

さらに一時間が経った。

時計の針は午後八時を少し回ったところだ。

ここまで、ミサキはほぼノンストップでマサヒコとの情事の中身を喋り続けている。

初体験のこと、初めてマサヒコの部屋でセックスしたときのこと、

口でしてあげた時のこと、手でしてあげた時のこと、胸でしてあげたかったけど出来なくて悔しかったこと……。

交際を始めてまだ半年であり、セックスの絶対回数は少ないものの、

投稿系雑誌のページを軽く十枚は埋められるくらいの内容の濃さはあるだろうか。

初心者好きの人にはたまらないものがあることだろう。

「……うーん」

ビールを喉に流し込みながら、リョーコは眉根を寄せた。

酒を飲ませてガードを下げ、ミサキに色々告白させて楽しむという当初の目論見はほぼ成功している。

しかし、その内容があまりにもスイートであるがために、超ベタ純愛嗜好ではない彼女にとってみると、苛立ちも感じるのだ。

「……ういっく。こうして初ラブホテルも大満足できたのです」

アイたちはやはり、言葉を挟もうとはしない。

口を開くのは、酒を飲む時だけだ。

「さて、次で最後ですう。昨日の夜の話をしたいと思えます。ひっく」

リョーコは手酌でビールを飲みながら思った。

こうなったら、最後まで喋らせるしかないな、と。

……明日はクリスマスパーティがあって、二人きりになることは出来ない。

恋人同士でクリスマス・イブを過ごすというのにとっても憧れがあったので、ちょっと残念。

でも皆とワイワイ過ごすのもそれはそれで楽しいものだから、仕方ない。

だーけど、やっぱり『二人だけのクリスマス』を体感したかった私は、マサちゃんに電話をかけて呼び出した。

幸いと言っていいのか、家には私だけしかいない。

「マーサちゃん！」と言って、扉を開けたばかりの 마사ちゃんに私は飛びついた
背中に腕を回して、ぎゅっと抱き締めると、服越しに 마사ちゃんの体温がじんわりと伝
わってきて気持ちいい。

ずーっと感じていたい温もりってこういうのを言うのかもしれない。

マサちゃんはちょっとびっくりしたような表情になっていた。

まあ、確かにいきなりだったかなって思いはあるけど、誰も見てるわけじゃないからい
いかな、なんて。

うふふ、あの時の 마사ちゃんの顔ったら……。

「……」

リョーコはヒョイと立つと、キッチンへと向かった。まだ、とっておきの赤ワインが残っ
ている。

背後では、ミサキの独演会が途切れることなく続いている。

話の内容が少し誇張気味になってきているのを、彼女は薄々感じてはいたが、
敢えて口に出そうとは思っていない。

ここまで来たら、ミサキには好きに喋ってもらったほうがいい。

……マサちゃんは私を軽々と抱えると、私の部屋のベッドへと連れていった。

その逞しい腕の中で、これから起こることに私の胸は早鐘を打つかのように揺れていま
した。

私を、まるで壊れ物を扱うかのようにそっとベッドに降ろすマサちゃん。

こんなところにも、彼の愛を感じて、もう、何て言うか凄く幸せでした。

「ミサキ……」「マサちゃん……」

まずスタートは口づけから。常識よね。

そしてマサちゃんは私の上着のボタンに指をかけると、ひとつずつ外していったの。

ボタンが外れていく度に、心も一緒に露わになっていくようで、すごい解放感。

「あっ……」と思わず私は低く声をあげてしまった。

マサちゃんの繊細な指が、私のスカートの中に潜り込んできたから。

指先が、トントン、トントンと私の一番敏感な部分を何度もノックしてきて、

お腹の奥から熱い、とっても熱い何かがじわっと湧き出してくるような……。

24 名前： ピンキリ ◆UsBfe3iKus [sage] 投稿日： 2006/12/25(月) 23:50:42 ID:8SkbSVqB

ぐぐぐ、とアイ、アヤナ、リンコの三人は身を乗り出した。

昨日という最新の話のせいか、内容がとても生々しく思えたのだ。

コロコロ変わる口調が逆に、彼女らの興味を引き立たせてもいる。

「……ふーん」

無論、経験豊富なリョーコは前のめりになぞならなかった。

セイジやその他の男との過去を語れと言われたら、もっともっと凄まじい話が彼女には出
来る。

身を乗り出すどころか、引いてしまうような話が。

……私とマサちゃんは完全に生まれたままの姿になった。

マサちゃんが私の全身に、キスの雨を降らしてくる。
そのひとつひとつが、肌を通り越して脳の奥までズキュンズキュンと響いてきて、それだけでイってしまいそうになっちゃった。
マサちゃんは腕を動かして、私の脚を大きく開かせた。
もちろん、拒むことなんてしない。
そしてマサちゃんは、私の秘部に顔を近づけたかと思うと、熱いお湯を冷ますかのようにふうふうと吹いてきた。
自分でも、陰毛が揺れるのがわかった。
次の瞬間、私は全身を強張らせた。
マサちゃんがかぶりついてきたのだ。
ぢゅるぢゅる、とっってもいやらしい音が部屋に響く。
もう、物凄く気持ちいい。これ以上気持ちのいいことなんてザラに無いと思えるくらい。

舌だけでなく、指でもたっぷりと責められて私はベッドの上でくねくねとのたうった。

新調したばかりのシーツが、私のいやらしいお露とマサちゃんの唾液、そして二人の汗で汚れていく。
あそこだけじゃない、胸も、脇も、背中も、首筋も……マサちゃんの攻撃は留まることを知らない。
別の場所を責める度に、私の精神は陥落して、快樂の海に堕ちて行く……。

何か下手なエロ小説みたいになってきたな、とリョーコは思った。
だがやはり、それを音声にするつもりはない。
彼女がやったことと言えば、自分と、そしてミサキのグラスにワインを注いだことぐらいだ。

……マサちゃんは私をゴロリと私をうつ伏せにすると、耳に顔を近づけてきて、「いくよ」って小さく囁いた。無論、嫌も否もない。私はこくりと頷いた。
マサちゃんは私の腰を掴むと、持ち上げた。
私は、お尻をマサちゃんに突き出すような格好になった。
とっっても恥ずかしいけど、でも、とっっても気持ちいい。
身体の奥の奥まで覗かれたような気分で。
この格好、つまりバックだけど、本当はあまり好きじゃない。
何故なら、マサちゃんの顔が見れないから。
後ろからよりは、前から向き合って繋がるほうがいい。
キスも出来るしね……。

リョーコはすっかりふにゃふにゃになってしまったフライドポテトを摘み上げると、ポイツと口に中へと放り込んだ。
ミサキの話は、経験と知識がごっちゃになってしまっているようだった。
もしかすると、聖光の友達から聞いた体験話も混じっているかもしれない。
リョーコ自身、女子高のそういった方面の会話のエゲツナサは身をもって知っている。
もっとも、彼女の場合は聞き手ではなく発信源であったが。

25 名前： ピンキリ ◆UsBfe3iKus [sage] 投稿日： 2006/12/25(月) 23:52:15 ID:8SkbSVqB

……マサちゃんは休もうとしなかった。

ひたすら、ただひたすらに私の身体を蹂躪していく。

パン、パンと身体がぶつかりあう音が部屋中に響く。

私の喘ぎ声がかき消されてしまうくらいに。

「ミサキ、どこに出してほしい？」とマサちゃんが聞いてきた。

私は喉の奥から、搾り出すように「中にちょうだい……」と答えた。

大胆なことを言ったな、と後から思ったけど、実はこの時、マサちゃんはゴムをつけてたの。

だから中には出せないんだよね。

マサちゃんは当然、ゴムをつけてるのがわかってるから、私の要求には応えてくれなかった。

「かけるよ……」とだけ呟いて、今まで以上の勢いで腰を突きこんできた。

私はもう、何も考えられなかった。

考えられるはずがない。

あの快樂の渦の中で、まともな思考力を保つことなんて出来ない。

やがて、山の頂が来た。

私は全身に、静電気が走るのを覚えた。

それがどれくらいキモチイイかって、言葉で表現するのは不可能だと思う。

そして次に、氷漬けにされたかのように、すうっと身体が冷えていくのがわかった。

私は、闇に放り出された。

私は目覚めた。

どれくらい気を失っていたかわからないけど、長くても多分一分くらいだと思う。

私は何時の間にか仰向けにされていた。

顎と頬、乳房の上辺りに、熱湯をかけられたみたいな熱さを感じた。

その部分を、力の入らない腕を何とか動かして、指で辿ってみた。

ネバツとした何かが、指に絡みついた。

それを、天井の蛍光灯にかざしてみた。

白い液体がこびりついた指の間から、ぼんやりとだけど、マサちゃんが優しい微笑みをしているのがわかった……。

「……で、私とマサちゃんは身体を清めるために一緒にシャワーを浴びたの」

ふは、と熱い息を吐いて、ミサキは舌をとめた。

手にしたグラスに口を近づけ、中に満たされている赤い液体を喉に流し込む。

「ふいい……、はい、おしまいれす」

たっぷり一時間半、ミサキの独演会は終わった。

26 名前： ピンキリ ◆UsBfe3iKus [sage] 投稿日： 2006/12/25(月) 23:53:53 ID:8SkbSVqB

「……天野さん」

「ふう？」

ミサキの話が終わってから、しばらくは誰も口を開かなかった。

その中で、最初に口火を切ったのは若田部アヤナだった。

「天野さんは、しあわせ？」

アヤナの頭が前後左右にフラフラと揺れている。

リョーコとアイを除いた未成年組では、一番アルコールを摂取しているのが彼女だ。

「もちろん、あやや、もちろん」

ミサキは即答した。

「そう……じゃあ、小久保君をちょうらい」

「はあ？」

突然のアヤナの言葉に、ミサキは「何を言いやがる」といった感じで背筋を伸ばした。黙って聞いていたリョーコも、さすがにこのアヤナの台詞には驚いた。

「だーめ、マサちゃんは私のなの。ひっく」

「ずるいわ天野さん、天野さんだけしあわせなんてずるい」

「ずるくないよう。だってマサちゃんは私の彼氏なんだもん」

「だから、小久保君を私の彼氏にちょうらい」

「にゃ、にゃにおう」

鼻先をぶつけんばかりの距離で、正対するミサキとアヤナ。どこか、虎対竜を思わせる構図である。

リョーコは、ビリビリとポテトチップスの袋を開け、中から一枚取り出して口に運んだ。

ミサキとアヤナは、袋を破る音に反応せず、視線を送ろうともしなかった。

「だって天野さんは小久保君を十分に堪能したでしょ」

「堪能、ってそんな話がおかしいじゃない、理由が変じゃない」

「私も小久保君を堪能したいの、ひっく」

「ダメェ、ダメダメ、ダメー！ マサちゃんは私のなんらから！」

「ちょうだい！ ちょうだい！ ちょうらいちょうらいちょうらい！」

ポリポリとポテトチップスをかじりながら、リョーコは思った。アルコールによって精神の堤防が崩れたのは、どうもミサキだけではなかったようだ、と。

前々から、アヤナは時折マサヒコを意識するような言動をしていたが、やはりというか何というか、心の底では好意を持っていたらしい。本人が気づいていたかどうかはともかくとして、だが。それが、アルコールとミサキの大胆告白によって、心の奥底から浮上してきたのだろう。

「マサちゃんは絶対、ぜーったいあげなーい！」

「天野さんのケチ！ ずるい！」

「えへへ、ねえ二人とも～」

と、虎と竜の間にウサギが割って入ってきた。

的山リンコというウサギが。

「えへへ、この三人の中で、一番小久保君と一緒にいる時間が長いのは誰でしょ～」

「そんなの決まってるじゃないリンちゃん、私に決まっへる、ひっく」

「ぶっぶー、答は私、的山リンコで一すう。だって、同じ学校で同じクラスだもん。ひっく」

リンコの顔はミサキとアヤナに比べても、かなり赤い。

どうも、リンコはあまりお酒に強くないらしい。

「えへへー、だからミサキちゃん、小久保君は私にちょーらい」

「なん、な、な」

「ダメェ！ 小久保君は私が貰ってアメリカに持って帰るう！ ひっく」

ミサキのトークショーから一転、虎対竜対ウサギのトリプルスレットマッチの場と化すリョーコの部屋。

リング、もとい部屋の主のリョーコとしては、いささかの計算違いを認めざるを得ないかつ

た。

ミサキにマサヒコとの進展具合を喋らせて、それを楽しむつもりでいたところが、随分とアルコールという薬が効きすぎたようで、アヤナとリンコにまで心の奥底を開帳させてしまった。

「えへへー、小久保君がクリトリスプレゼントだあ〜」

「ぜーったいダメーッ！ マサちゃんは、マサちゃんは私のなんらからーっ！」

「天野さんがくれないって言うんなら、奪ってやるう！」

27 名前： ピンキリ ◆UsBfe3iKus [sage] 投稿日： 2006/12/25(月) 23:55:05 ID:8SkbSVqB

「やれやれ、こりゃまいったわ」

ぎゃあぎゃあと激論を戦わせる三人をグラス越しに覗いて、リョーコはふうと息をついた。

とにかく、このままでは收拾がつきそうにない。

「いずれ酔いと疲れでやめるだろうけど、その前にどうにかして止めないと取っ組み合いになるかもしれないわね」

リョーコは三人から視線を外し、まずテレビの上の時計に、そして次に玄関の方へと顔を向けた。

八時四十五分、そろそろ、それを止め得る男がやってくる頃合だ。

いや、あの男なら、このタイミングを外すはずがない。

本人が望むと望まざるとに関わらず。

……そうリョーコが考えた瞬間、玄関のチャイムが鳴った。

「遅れてすいません、従妹が放してくれなかったもので……」

チャイムの音、一秒、ドアがガチャリと開く音、一秒、そして言い訳の言葉。

「さすが、期待通り」

リョーコは口の中で小さく呟く。

そして、赤ワインのボトルを傾け、グラスにトクトクと注いでいく。

もうすでに、彼女の目の前に、三人の姿はない。

「ぎゃああああああ……」

玄関から聞こえてくる、少年の悲鳴。

「恋人は散々苦労す、ってか。そう言えばアイ、アンタは黙ったままだけど、マサのことどう思ってるの？」

リョーコは傍らで、ずっと口を結んだままの後輩に話しかけた。

と、アイの顔がぐらりと動き、リョーコの肩に落ちてきた。

「あらら……」

リョーコの耳に、すうすうと規則正しい寝息の音が届いてくる。

「成る程、そりゃずっと黙ったままなわけだわ」

果たして、どの辺りから眠りの園に落ちたのだろうか。

リョーコもまったく気づかなかった。

冷静にミサキを観察していたようで、実際は結構のめり込んでいたのかもしれない。

「うわあああ……ちよつと待ってくれ皆、じ、事情を説明してくれえ……」

玄関から、また少年の悲鳴。

「もろびとこぞりて迎えまつれ、久しく待ちにしマサは来ませり、か」

リョーコはドアに向かって、ワインが入ったグラスを掲げた。

いずれ、マサヒコがこの騒動を収めるだろうが、それまでは傍観するつもりでいる。

ミサキ、アヤナ、リンコの暴走を、彼は酒のせいだと片付けるだろう。
三人も、翌日以降に記憶が無ければそれでよし、あったらあったで、胸の内に封印することになるはずだ。

特に、アヤナとリンコは。

「いや……」

ゆっくりとリョーコは赤ワインを飲み干していく。

もしかしたら、開き直って本当にマサヒコをミサキから奪い取りに行く可能性もある。
そうなればそうなったで、またリョーコにとっては楽しみの種が増えることになる。

「落ち着けっミサキ、若田部、的山っ、う、うわわ、だ、抱きつくなあ！」

リョーコは赤ワインを、全て喉の奥へと流し込んだ。

そして、空になったグラスを、人差し指でチーン、と弾いた。

「……メリー・苦しみます。マサ」

F I N

28 名前： ピンキリ ◆UsBfe3iKus [sage] 投稿日： 2006/12/25(月) 23:56:14 ID:8SkbSVqB
以上です。

メリー・クリスマス。

29 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2006/12/26(火) 00:31:18 ID:8/gqnI3z
集中爆撃キターー

このスレはこれがあるから堪らない。

518 氏、ピンキリ氏、楽しい SS をありがとう。

30 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2006/12/26(火) 03:58:02 ID:J7aWGzpV
神々は我等と濱中スレを見捨てなかった。素晴らしいクリスマスをありがとう！！

31 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2006/12/26(火) 07:37:15 ID:rk5A43Ll
もうホントに 518 氏のアイセンセは激プリだ

ギューッて抱き締めたいぜ！

GJ！

32 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2006/12/26(火) 08:16:25 ID:euBoCknX
518 氏>甘いよー！練乳がけのサッカリン一気飲み以上に甘いよー！ GJ！

ピンキリ氏>マサヒコを丘の上で十字架に磔にしてやりたくなっちゃうぜー GJ！

33 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2006/12/26(火) 19:32:12 ID:6IXshzCK
ちょっ、何この禿しくラブリーなアイ先生はw

今すぐ嫁にしたいくらいであります軍曹

34 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2006/12/27(水) 16:16:11 ID:DMu5QBPw
魔法処女ラブリーアイ

35 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2006/12/27(水) 19:04:38 ID:a8Mck4gZ
>>33

残念ながら既にマサの嫁だ。

36 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2006/12/28(木) 07:25:36 ID:rHPTCZV/
おのれマサ、遂に全員を嫁としてかッ

37 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2006/12/28(木) 19:47:59 ID:RNzPiGfl
久々のトマソンです。

相変わらずネタ切れ状態ですが、妹8巻の書き下ろしを元に書いていこうと思います。

郭氏もちらっと言及されていたネタですが、私もギャルゲはほとんどしたことがない人間です。エロゲはあっても(マテ)ということでマイ解釈オンリーで突撃。

とりあえずプロローグはエロなしです。では投下。

38 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2006/12/28(木) 19:49:36 ID:RNzPiGf1

チチチ……。

どこかからともなく聞こえてくるスズメのさえずりが耳をくすぐる。さわやかな朝が城島家を訪れた。

シンジの部屋のドアがそっと開いたと思うと、一人の少女が足音も軽く部屋に入ってきて、間の抜けた顔で朝寝を貪るシンジのそばに身をかがめた。

「……ちゃん……」

「ん……!？」

うっすら目を開けたシンジだが、目に入ったのは思わぬ顔だった。

「シンちゃん、早く起きてください。学校、遅刻しちゃいますよ!」

深みのある瞳をシンジに向けている、漆黒のロングヘアを垂らしたその少女は、妹のカナミの親友の一人、黒田マナカ。

「え……なんでマナカちゃんが起こしにくんの？」

体を起こしたシンジだが、なぜかマナカに起こされ、目を白黒させた。

「なんでって……幼なじみじゃないですか」

ぷり～ん、という擬音つきでシンジに向かいぶりっ子ポーズで流し目をくれるマナカ。

「え……まあ……そうだね……」

シンジの奇妙な一日の始まりだった。

それからというもの。

マナカと共に通学する途中では、同じく妹の親友である矢野アキとぶつかり、倒した拍子にミニスカでのM字開脚ポーズを取らせてしまった挙句、平手打ちを食う。

登校すれば、アキの平手打ちで腫れた頬を同級生の今岡ナツミにやけに優しく気遣われる。校庭に出れば、物陰からじっと自分を見つめている謎の少女の視線を感じ、授業に出れば変態エロ女教師にからかわれる。

(今日は何か変な日だ……)

いったい、何がどうなっているのだ? 何度もそんな考えを抱いた挙句、ようやく学校も終わり、疲れきって家に帰ったシンジは、妹のカナミに笑顔で出迎えられた。

「おかえりーお兄ちゃん」

やっと普段通りになったか、と一瞬安心したシンジだが、カナミの姿に目を疑った。

「うおっ!? 裸Yシャツ？」

さすがのシンジも、飾り気のない白い布の向こうにほのかに透けて見える妹の肢体に視線が吸い寄せられ、心臓が高鳴るのも当たり前というもので。

が、そこにカナミの不思議そうな声が響いた。

「あれ、お兄ちゃんその顔どうしたの？」

「……え？」

あわてて鏡を見るシンジ。妙に髪が長く、目を隠して……そう、これはまるで……。

「お兄ちゃん、朝だよ〜っ」

「ハッ！」

ある日の朝。城島シンジは、全身にびしょりと汗をかいて、ついでに股間にテントを作って目を覚ました。

「……これが、ギャルゲの世界！」

39 名前： トマゾン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2006/12/28(木) 19:53:14 ID:RNzPiGf1

(夢か……うーん……)

のっそりと起き上がったシンジは、身づくろいをするのと階下へ降りていった。

妹のカナミは既に制服に身を包み、朝食の準備を済ませている。

(それにしても、変な夢だったなあ)

卓の向かい側で朝食を摂っている妹に、夢の最後に見た裸Yシャツ姿をついつい重ねながら、シンジはトーストをかじりつつ、つらつらと夢の内容を思い出し……そしてハッとした。

(…俺、もしかしてギャルゲの主人公と大して変わんない立場にいるんじゃない?)

ようやくそこに気づいたシンジ。妹をはじめ、妹の友人たち、従姉妹とその友人、同級生、それに女教師。これだけの女性に囲まれていて、しかもみなそれぞれに美人や美少女なのだ。

(もし、ギャルゲなら……結構楽しい日々かもな……)

口を動かしているカナミの整った顔立ちを、シンジはぼんやりと眺めた。

カナミは朝食の仕上げに、バナナの切り身を口に運んでいる。彼女のお気に入りの、ピンクのルージュを薄く引いた唇が艶かしく蠢き、微妙な太さと反りを持つバナナが、妹の小さな口に収まってゆく……。

シンジは次第に妙な気分になっていった。

カナミは、シンジのねっとりした視線には気づかず、テレビに目をやっていた。ちょうどニュースでは、芸能人の結婚の知らせが流れている。

「へー、このアイドル結婚するんだ」

シンジはカナミの声に我に返った。

「…ふーん、でもさ、出来ちゃった婚だろ？結婚するにしても、もうちょっと計画的にやってほしいよ」

遠まわしに、お前も危ないまねはするな、と聞いたかったのだが、こんな婉曲表現はカナミには通用しなかった。

「えー、でもさ。お兄ちゃんも、妄想の中じゃアイドルと無計画に中出しでしょ？」

「妄想の中なら無計画でもいいの」

それはその通りだ。妄想のなかで働いた悪事が犯罪になったら、世の中のたいていの男は婦女暴行罪か淫行罪か、たぶん両方をさんざん犯しているだろう。

(そうか…夢の中なら、何してもいいよな……)

いまさらながら、シンジはそこに気づいた。彼は早くから AV に慣れ親しんでいたため、

身近にいる女の子たちをオカズにしたことはほとんどない。

スクリーンの中の美女ではなく、手を伸ばせば触れることの出来る親しい女性と、散々楽しめるとすれば……。例えばの話、実妹のカナミを犯したところで、それが妄想の中なら構いはしないのだ。

(それならいっそ……ギャルゲの世界に浸って、思い切り妄想して楽しんでやろう……
そうだな、まず今夜は……)
シンジの夢十夜の始まりであった。

40 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2006/12/28(木) 19:53:56 ID:RNzPiGf1

以上。

タイトルは
「シンジの夢十夜 ～プロローグ～」で。

次回からはシンジがエロ欲望全開で妄想に浸ります。

第一夜はマナカ編の予定。 まあ気長にお待ちください。

41 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2006/12/28(木) 20:13:14 ID:Tw47hcyj
乙です。さすがトマソン氏！的な SS ですね

42 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2006/12/29(金) 00:06:25 ID:qk8nIxSD
乙&G J！

しかし、本当にベテラン投手陣の力投が目立つな
むしろ残ってくれたのがベテランしかないのだろうか？

43 名前： 117 (´_ゝ`) 投稿日： 2006/12/29(金) 01:47:07 ID:Um85+9ql
濱中終了あかほん作者挫折打ち切りで

連載中が 4 コマの妹しかないから
新人が投下しづらい状態だろうね。
ネタ少ねーし。

氏家が少年マガジンで新連載をしないかぎり
職人は増えないだろう。

44 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2006/12/29(金) 06:06:38 ID:b9DfzZP1
遅レスになりましたが監督保管庫更新乙様です。

ピンキリ神のマサ×ミサのダダ甘カップーやら 518 神のアヤナデレ強化型など
年末忙しいのに何度も見ずに入られない一足早いお年玉ごち様でした

45 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2006/12/29(金) 14:25:43 ID:USsrfKsp
デレ強化型 w w w

46 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2006/12/30(土) 00:52:23 ID:gyc07BOR

そのうちツン強化型とかエロ強化型とか出てくるかな

47 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2006/12/31(日) 01:00:35 ID:Z4EZP/hR
大晦日

48 名前： 天邪鬼 ◆SexKoolQ8Q [sage] 投稿日： 2006/12/31(日) 01:59:27 ID:c0tsZLVi
年内に一本仕上げるつもりが無理った…

2 レスで短編（エロなし）、タイトルは『食欲≧恋心=煩惱>除夜の鐘』

49 名前： 天邪鬼 ◆SexKoolQ8Q [sage] 投稿日： 2006/12/31(日) 02:00:07 ID:c0tsZLVi
「日が経つのは早いね」

毎年言ってるよな、と言いかけて止める。

事なかれ主義を貫くのは、英稜高校 1 年生小久保マサヒコ。

その隣にいる女性は、濱中アイだ。

なぜこの二人が一緒にいるかといえば、話は数日前に遡る。

ミサキは二人だけで過ごす初めての正月だと張り切っていた。

が、父方の実家がミサキの顔が見たいと泣きついてきたのである。

正月くらいは、と言われれば優等生のミサキが放っておけないのは誰にも分かるものだった。

リョーコは年を越しながら呑み尽くすと張り切っており、アイはそれを回避した形だ。

リンコは家族で過ごし、アヤナも正月は家族で過ごすため日本には帰ってこないようだった。

「大晦日に私と二人なんて、役不足じゃないかなあ？」

ひょい、とマサヒコの顔を覗き込むアイ。

あれから再び身長が伸び始め、二人の身長はそれなりに差ができていた。

「そんなことはないですよ。それに悪いのは…」

そこまで言いかけて、口に出すよりも心で愚痴る。

何であの親はこういうときによく家を空けるんだ、と。

商店街で当たったとかなんとかで、夫婦水入らずで年を越すんだなどとハイテンションな母であった。

大体普通は一家招待とかだろう、ドラ○もんの三人用ゲームじゃあるまいし…

置いてけぼりを食らったことよりも、その杜撰さに苛立つマサヒコ。

結局、予定のないもの同士コタツでぬくぬくと過ごすはめとなっただけの話なのだが。

「私にとっては…」

ボソッとアイが漏らした言葉に、マサヒコが反応する。

「なんです？」

「えっ、えっ、わ、私なんか言った??」

本音を漏らしそうになって、アイは焦る。

マサヒコはミサキと上手くやっていて、学校生活も充実している。

だから、安心していいのだと自分に何度も言い聞かせた。

それでも、この状況に喜びを感じている自分がいる。

そのギャップに、アイは混乱していた。

この雑念は除夜の鐘と共に浄化しよう、それが言い。

再び自分に言い聞かせるアイだったが、先ほどから一人で首を振ったり落ち込んだりしている様はマサヒコにとって不思議そのものであった。

「…除夜の鐘って、108 回鳴るんですよね。」

マサヒコの切り出しに、アイはドキッとした。

まさか、エスパー!?!?

「始まりましたね。」

「えっ」

ご～ん、と鳴り響く鐘の音。

一つ鳴るごとに年明けが近づいていく。

「何回言っても足りないくらい…先生には感謝してます。」

「えっ、えっ」

「何か恩が返せればいいんですけど。」

「それは…」

君が幸せになることだよ、と言いかけて飲み込んだ。

年が明けて108回目の鐘が鳴ったときに全てを断ち切ろう。

それなら、今回だけの我がまを神様は許してくれるんじゃないだろうか。

浄土宗とキリスト教がごっちゃになった考えで、アイは決断した。

「…キス、してほしい…」

言っただけで後悔した。

耳まで赤くなっているのが分かる。

マサヒコの方向を見れなくなったアイは、急に黙り込んでしまった。

その耳には鐘の音だけが鳴り響き、マサヒコの返答が聞こえないのが不安を増長させた。

ご～ん、ご～ん、ご～ん

無言の時間がしばらく続いた。

そのとき、頬に触れる柔らかな感触。

まるで、唇のような…

50 名前： 天邪鬼 ◆SexKoolQ8Q [sage] 投稿日： 2006/12/31(日) 02:00:43 ID:c0tsZLVi

…唇？！

それは、唇そのものだった。

それは一瞬のようで、悠久のようで。

アイは全身に熱が行き渡るのを感じていた。

体の芯から、心の奥から燃え上がるような感覚は、過去覚えのないものだった。

ご～ん

最後の鐘の音が鳴った。

年が明けたのだ。

「…新年、明けましておめでとうございます」

少し照れ笑いのマサヒコと、やっと目を合わせた。

アイは耳まで真っ赤にして、俯きながら言った。

「…明けましておめでとう…これからも、よろしく」

今年も、煩惱と一緒に年を越すことになりそうだ。

26個目の蜜柑を頬張りながら、アイはマサヒコに笑顔を向けた。

良いお年を。

51 名前： ペピトーン ◆NerkxCFOyg [sage] 投稿日： 2006/12/31(日) 08:50:11 ID:

5rK9HnHB

古田氏保管庫更新ご苦労様です。

さて、今年最後の作品投下をさせていただきます。

タイトルは「おかしな二人 第三話 でも！？しょうがない」で。

52 名前： ペピトーン ◆NerkxCFOyg [sage] 投稿日： 2006/12/31(日) 08:52:09 ID:

5rK9HnHB

「女王様とお呼び！」

よく聞く決め台詞が部屋に響く。声の主はリョーコ。で、例によってセイジはまたまたリョーコに縛られている。毎度の事とはいえ何故こんな事になったのか。

それは前の晩のことー

照明がいくつかともった薄暗い部屋の中でセイジともう一人の男がジャンケンをしている。

「ジャンケン、ポン！！」

二人の気合のこもった掛け声上がる。その結果、セイジが勝った。

「へへへ、じゃ遠慮なく」

しまりのない笑いを浮かべながらセイジはステージの上にあがった。ステージの上には全裸の女が一人。

そう、ここはストリップ劇場であり、先程のジャンケンには本番ショーの権利を賭けていたのである。

セイジはダンサーに五千円を渡すと、ズボンを脱ぎ捨てた。既にペニスは固くなっている。

「兄ちゃん、元気じゃねえか」

「すぐイクんじゃねえぞ」

と観客席から下品な声が掛かる。

「よろしく、お兄さん」

そういうとステージ上のダンサーが口でセイジのペニスにコンドームを装着し、四つん這いに

なって挿入を促した。セイジは遠慮なく一気にペニスを恥部に挿入した。

53 名前： ペピトーン ◆NerkxCFOyg [sage] 投稿日： 2006/12/31(日) 08:55:48 ID:

5rK9HnHB

「あっ、あっ、あああ！」

ダンサーの喘ぎ声が館内に響く。それと共に観客席から歓声と口笛が聞こえてくる。

セイジは両手で尻を掴み腰を前後に動かす。クチュ、クチュと粘膜のこすれる音がする。

「ああっ、いいっ、こんなの初めて！」

ダンサーが大げさとも言える声を響かせる。その声を聞いてさらにセイジの興奮が高まってきて、さらに動きが激しくなる。粘膜のこすれる音と共に恥部からは透明な液体が

滴り落ちてくる。でも、それは愛液ではなく、事前に塗っておいたローションだろうが。

「こらー、もっと腰振れ」

「手がお留守になってるぞ」

などの野次が飛び交う。

「あああ、顔が、顔が熱いのお！」

ダンサーが顔を赤くして声を上げる。ただ、ここまできると演技であるのは明らかだが、逆にこの位の演技をしなくてはショーは盛り上がらない。

「ああっ、そろそろ…」

セイジの絶頂が近づいてきた。

「私も、いっちゃうわ、きて！」

「ううう、おうっ、おうっ…」

セイジは腰の動きを早めてダンサーを突き上げると、一気にコンドームの中に発射した。

「お兄さん、気持ちよかったわよ」

「へへへ…どうもいたしまして」

「兄ちゃん、気持ちよかったか!？」

「ちょっと早くないか!？」

などの野次も意に介さずセイジは締まりの無い顔をしながらダンサーに会釈をし、ステージから降りてズボンを穿く。すると一転、セイジの顔から血の気が一気に引いた。ズボンの中に入れていた財布が無いのである。ステージ上で本番ショーを満喫している間にすられたのだ。

仕方が無いのでセイジはその足で警察に行き、財布を道で落とした事にして届けた。

まさか、本番ショーの最中にすられたとは言えない。そして、給料日までの間、リョーコに

金を借りる事にしたのである。当然、本当の事はリョーコには内緒である。もちろんそれは

リョーコの慰み物になる事を意味するのであるが、背に腹は変えられない。これが事の顛末である。

リョーコがセイジに馬乗りになり、遠慮なく鞭で叩きながら言った。

「アンタはどうしようもない奴隷だよ！」

全くその通りである。

第三話 おわり

54 名前： ペプトーン ◆NerkxCFOyg [sage] 投稿日： 2006/12/31(日) 09:00:51 ID: 5rK9HnHB

以上です。何だかセイジがかなりダメ男になってしまいました。

>古田氏

更新早々申し訳ないのですが、「おかしな2人 ダメージ」の数字の「2」のところを漢数字の「二」に修正をお願いします。すみません。

それでは皆さんよいお年を！

55 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2006/12/31(日) 10:10:34 ID:Z4EZP/hR
ご兩人乙！

56 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2006/12/31(日) 11:12:30 ID:z1XzgJu/
考えてみると豊田センセってマサ達の中学の女子達のアイドルなんだよねえ、その

実態がこれとは…。「そんな先生を守りたい」なんて言ってくる殊勝な娘がリョーコと対決、なんて恐ろしげなのどなたか書いてくれないかなあ。

57 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2006/12/31(日) 17:46:07 ID:MV2S/2S3

天邪鬼氏、ペピトーン氏

大晦日に乙&GJです！！

58 名前： 名無しさん@ピンキー [age] 投稿日： 2006/12/31(日) 20:23:47 ID:QNcwsol2

今年最後の締め長編大作カモーン

59 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2006/12/31(日) 21:09:13 ID:l5hft1e

トマソンです。

元旦に投下のつもりでしたが、まあ新年に向けての景気づけということで。ちと早いですが、初夢にこんなのはいかがでしょうか。

というわけで、シンジの夢十夜、第一夜いきます。

では投下。

60 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2006/12/31(日) 21:11:20 ID:l5hft1e

こんな夢を見た。

「お兄さん……来て……ください……」

ここはシンジの部屋。

ブラウスにスカートの制服姿の黒田マナカがベッドに横たわり、潤んだ眼をシンジに向けている。

漆黒の黒い長髪は頭の周りに乱れてベッドにまとわりつき、たおやかな両腕も首の左右に置いて、マナカはほっそりした体を無防備にシンジの視線に晒していた。

恥じらいを含んだ仕草に、シンジは胸を高鳴らせ、ゆっくりと近づく。

「マナカちゃん……」

シンジは手を伸ばしかけて迷った。キスから始めようか、肩口から優しく撫でていこうか、いやそれとも、胸を制服のうえから楽しんでやろうか……

頭ではそんなことを考えながら、なぜか腕は先走り、スカートの裾をつまんだ。

「あ……お兄さん、いきなりそんな……」

あわててスカートを押さえたマナカだが、シンジに優しく腕をどかされてしまった。

「ああ……」

あきらめたように身を任せるマナカを見やりつつ、シンジは紺のハイソックスとミニスカートの間、可愛い膝小僧から太股をゆっくりと撫で上げながら、スカートの裾をずり上げていった。

「だ、駄目……恥ずかしい……です……」

ぴっちり閉じあわされた白磁の太腿。その内側に掌を割り込ませるようにして撫で回すシンジの掌の動きに、マナカはもじもじと下半身をもがく。静脈さえ透けてみえるほど白い肌が、少しづつほのかに上気して赤味を帯びていく様子は、ひどくエロチックだった。

「いい眺めだ、マナカちゃん……」

少しずつあらわになっていく素肌に食い入るようなギラついた視線を浴びせながら、

掌で円を描きつつ、なおもシンジは太腿を撫で上げてゆく。やがて愛撫は、すらりと伸びた脚の付け根に迫っていった。

(もう少し……もう少しだ……)

焦りを見せまいと思っただけながらも、シンジの手がかすかに震えるのも、まあやむを得ないところだろう。

脚の付け根ぎりぎりまでをゆっくりと楽しんだシンジは、最後は思い切り、一気にスカートをまくり上げた。

「あっ……」

マナカの恥ずかしそうな声が漏れ、シンジの視線が少女の下半身に注がれる。

そこには純白の可愛い下着が……可愛い下着が……。

「……?!」

そこにあったのは、革と金属で出来た、奇妙な代物。

「……えーとこれは……話に聞く、貞操帯かい？」

顔を真っ赤にしたマナカが、こくんとうなずいた。

「お兄さん……クリスマスプレゼントに渡した鍵を……」

その言葉に、シンジの記憶がフラッシュバックした。

61 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2006/12/31(日) 21:12:23 ID:l5hft1e

あれはほんの数日前。

妹の友人たちが城島邸に集まり、クリスマスパーティ兼マナカの誕生日会が開かれた。飲めや食えやで大騒ぎする妹達に苦笑するシンジを、マナカは部屋の片隅に引っ張っていき、シンジにクリスマスプレゼントだと言って鍵を渡したのだ。

マナカが声を潜め、恥じらいをたたえ、ぽっと頬を染めて、

「貞操帯のカギです」

と言ったあのとき、上目使いにシンジを見つめる彼女の瞳に、シンジはもろにハートを打ち抜かれたような気がしたものだ。

(これを外していいのは、あなただけ……)

マナカの瞳は雄弁にそう語っていた。

「このボケ、ドキっとくるね」

と、いつものエロボケとして軽くあしらいはしたものの、いつかマナカの貞操帯をこの手で開錠して外す時が来ることを祈り、シンジはひそかに、その鍵を常にスタンバイして寝ていたのだった。

追憶から戻ったシンジはぐっと身を乗り出した。

「そうか……分かった」

「きゃっ……」

いきなり覆いかぶさられるのかと勘違いしたマナカは体を固くしたが、シンジの腕は優しくマナカの頭を支えて持ち上げ、その下、枕の裏をまさぐり、例の鍵を取り出した。

「お兄さん……そこに持っていたんですか……」

さすがのマナカもいくらか驚いた声だ。

「うん……いつこうなってもいいようにね。この時が来るのを、俺は首を長くして待っていたんだ」

「お兄さん……」

シンジは貞操帯の鍵穴を見つけ、震える手で小さな鍵を差し込む。そっと鍵をひねると、カチリと音がした。

とうとう、今まで純潔を守ってきた防具を剥がされる。その思いに身を固くするマナカの腰から、シンジは苦心して奇妙な帯を抜き取ると、それをひょいとベッドサイドテーブルに投げ捨ててしまった。

「あ……」

あまりの羞恥にマナカは両手で顔を覆った。

マナカの体に視線を戻したシンジは、生唾を飲み込んだ。

なんという眺めだ。きっちり制服に身を包んでいながら、ミニスカートを思い切り捲り上げられ、下着を——いささか風変わりな下着だったが——むしり取られ、まるで露出狂のように下半身だけを晒して横たわる美少女！

抜けるように真っ白な肌の中央にひそやかに息づく陰毛に、シンジの視線は吸い寄せられた。髪の毛と同じく深い漆黒に輝き、珍しいことに縮れていないストレートの繊毛は、見事なまでに綺麗に手入れされていた。ごく小さな逆正三角形を形作る陰影は、その下の柔肉までは達していない。

だがマナカのそこは——シンジが何よりも見たいと思う部分は、ぴっちり閉じあわされた太腿の間に、かろうじて隠れていた。

62 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2006/12/31(日) 21:16:34 ID:l5hft11e

ごくり。

もう一度生唾を飲み込むと、シンジはマナカに声をかけた。

「マナカちゃん……少しだけ、脚を開いて……」

マナカは顔を真っ赤にして、顔を覆った両手の指の隙間からシンジに哀願のこもった視線を向けた。自ら脚を開くなど、彼女にはとても出来なかった。

「……出来ません」

「マナカちゃん……それじゃ、力を抜いて……」

「駄目……ナニをハメるために大股開くなんてことは、私、出来ません……」

可愛い膝小僧に腕を添え、マナカの脚を割ろうとしたシンジだったが、マナカは太腿を頑強にぴっちり閉じたまま、緩めようとはしなかった。処女らしい頑なに恥じらいを楽しみつつも、シンジが一計を案じる。

「マナカちゃん……」

「あっ……」

シンジはえいとばかり、マナカの細い体に覆いかぶさった。顔を覆った手を優しくどかす。

ちゅっ。そっとシンジの唇がマナカのおでこに触れた。

「あ……」

マナカは細い腕でシンジの体を押しやろうとささやかな抵抗を示すが、シンジはものともせず、強引に制服の上からほっそりした体に腕を回すと、頬、まぶた、鼻の頭、耳たぶと、所構わずマナカにキスを浴びせた。

「あ……う……」

マナカがどんなに顔を背けても、シンジの唇は執拗に追いかけてくる。やがてマナカが抵抗をあきらめ、眼を閉じて耐えるだけになったところで、シンジは頃合を見計らい、攻撃をやめた。

「あ……」

マナカはいぶかしげに眼を開き、キスが止んだこと、肝心の唇へのキスがなかったことをなかば非難するような眼をたたえてシンジを見上げた。

さしもの羞恥心の強い彼女も、顔への嵐のようなキス攻撃が止んだ瞬間とあって、

下半身は注意がお留守になっていた。それがシンジの狙いだった。

シンジはマナカに微笑みかけつつ、少女の脱力した細い両脚の間にぐいと自らの膝を押し込んだ。

「あっ……だ、駄目っ……」

あわててマナカは両手で股間を覆い、脚を閉じ合わせようとした。が、既に二本の脚の間に男のがっちりした膝を受け入れてしまっていてはどうにもならなかった。

「大丈夫、大丈夫だよ……力を抜いて……」

少々必死すぎる台詞だが、代わる言葉も見つからない。少女の抵抗も構わず、ぐいぐいとマナカの両脚の間に体を押し込み、やがて思うさま開かせた脚の間に、シンジは腰を落ち着けた。

63 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2006/12/31(日) 21:18:30 ID:l5hftT1e

「だ、駄目です……こんなポーズ……」

性器だけはかろうじて両手で隠したものの、下半身だけを露出した上、カエルのように両脚を開き、その間に男性の腰を受け入れ、組み敷かれたポーズである。マナカは、恥ずかしさに必死で身をもがいた。

「いい眺めだ……マナカちゃん」

こうなれば、あとは腕さえどかせば、いつでもマナカの体を思うがままにできる。シンジは再び少女の体にのし掛かり、肩を押さえて抵抗を封じ込めると、今度はマナカの首筋にキスの雨を降らせ、さらには舌でチロチロと嘗め回しながら、手を伸ばし、ブラウスの上から胸に愛撫を加えた。

「あ……あっ……」

片手で股間を隠したまま、片手でシンジの手を撃退しようともがくマナカだったが、抵抗も空しく、そのほのかな盛り上がりやシンジの掌が行き来した。

やがて着衣の上からでは飽きたらなくなったシンジはブラウスのボタンを外し、前を大きく開く。マナカの抜けるように白い素肌が一気に面積を広げた。

続いて純白のブラジャーを上にはずらすと、マナカの乳房が――

「可愛いオッパイだね……」

「どうせ……小さいですよ……あっ……」

ようやく抵抗も弱まり、身を固くして愛撫に耐えるマナカの胸に、シンジは攻撃を集中させた。

マナカの乳房は小さかった。

白い素肌がほんの申し訳程度に盛り上がった、揉みしだこうと掴もうにも思うに任せない、ほのかな隆起。中央に息づく可愛いピンク色の乳首を指でコリコリと転がしても、

「あ……」

とマナカは、性感よりむしろ痛みによる、わずかな反応しか示さない。なんとも未発達な乳房だった。

(それなら……たっぷり時間をかけて、俺好みに開発してやる……)

隆起全体をゆっくりと撫で回しては、指先で乳首を弾き、舌で隆起の裾野から頂点に向かい円を描いて丹念に嘗め回し、乳首を気が済むまで吸う。

シンジは気が済むまで、たっぷりマナカの乳房を可愛がった。

64 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2006/12/31(日) 21:22:49 ID:l5hftT1e

長い長い胸への攻撃の末、シンジは顔を上げた。

ほとんど着衣を脱いではいないものの、制服は乱れ放題に乱れ、女体の急所の全てを

晒した姿のマナカの肢体にしばし見とれ……そして、我慢の限界を超えた。

「マナカちゃん、もう、止まらない……ごめん」

「えっ、なにを……あーっ！」

先ほどからずっと、シンジはマナカを組み敷いたままの体勢を取っていた。股間だけはマナカの手が隠すに任せていたが、それにもはや我慢が出来なくなったのだ。

女体の芯を頼りなく覆い隠す少女の手を、力強い男の手があっさりと排除した。

「い、嫌あ……見ないでください……」

あまりの羞恥に目を固く閉じたマナカ。その哀願も構わず、シンジは焼けつくような視線をマナカの秘奥に注ぎかけた。

逆正三角形の黒みの下、大きく割られた太腿の間に息づく、女の体。

シンジはたまらず腕を伸ばし、指先に全神経を集中して、割れ目をそっとなぞった。ピクッと震える少女の反応に誘われるように、続いて柔肉を優しく愛し始める。

「あーっ……あっ……み、見ないで……あっ……いやっ……」

何もかもを男の視線に晒し、媚肉に蠢く指を受け入れながら、マナカはなすすべもなく身を震わせ、か細い声を漏らし続けた。

丹念に、丹念に、シンジは柔肉をほぐしていく。

それまで処女らしく固く閉じていた蕾が次第に性に目覚め、愛液がこんこんと湧き出し、花卉が恥ずかしげに開いてゆく一部始終を、シンジは驚嘆をもって見届けた。

こんなにも魅惑的な眺めが、世の中にあったのか？

「あっ……ああ……」

時折漏れるマナカの甘い声が、いやが上にも彼の興奮をかきたてた。

すっかり濡れてやわやわと秘めやかに開きかけた花びらを、そっとシンジが指で押し開くと、濃い目のピンク色の中身が覗いた。

それを眼にした瞬間、シンジの中で何かがぷちんと切れた。

「マナカちゃん……いくよ……」

「お兄……さん……あ、待って、もう少し待って……」

いよいよとなるとやはり怖くなったのだろう、少し待ってと訴えるマナカだったが、シンジはもう我慢できなかった。とうの昔から痛いほどに張り詰めて屹立している、実物よりは20%ほど増量しているそれを——まあ、これくらいは妄想ゆえのご愛嬌だろう——見やると、マナカの哀願も構わず改めて少女の体に覆いかぶさり、女の肉体にそれをあてがい、じっくり位置を合わせた。

そのままゆっくりと、腰を前に——。

「あーっ、い、痛いっ……」

マナカの顔がゆがんだ。その声にシンジは一旦は動きを止めたが、マナカはいつしか覚悟を決めたのだろう、辛そうな表情を見せながらも、痛みに耐え、シンジにささやく。

「トロトロ挿れないで、一気に突っ込んでください……」

シンジはその言葉に従い、そしてまた自らの本能に従い、ぐいと腰を沈めた。

「ひいーっ！」

熱く張り詰めた男根が、一気に少女の体を引き裂いて侵入していく。マナカは整った顔を引きつらせ、たまらず悲鳴を上げた。

とうとう根元までをマナカの体に沈め、シンジは感に堪えぬようにつぶやいた。

「マナカちゃん……やっと、ひとつになれた……」

マナカの中は熱かった。そして狭かった。

「あ……ひっ……」

マナカの小さな悲鳴が漏れ続けた。

65 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2006/12/31(日) 21:25:26 ID:l5hft1e

腰を使おうとしたシンジだったが、かすかに身動きするだけでもマナカの顔が痛みに歪むのを見て、これ以上動くのはあきらめた。

(突いてみたいけど、無理か……それなら……)

シンジはマナカの中にどっぷりと浸った。熱く溶けたマナカの襷々が男性自身に絡みつき、絞り上げてくるのを快く味わいながら、まだ痛みに耐えて固く目を閉じているマナカにささやく。

「マナカちゃん」

「……？」

マナカがかすかに涙を浮かべた目を開くのを待って、さらにささやいた。

「マナカちゃんの中、熱くて気持ちいいよ……」

マナカは顔をこわばらせ、それでもいくらか無理に微笑みを浮かべてみせた。

「お兄さん……」

ちゅっ。

シンジはマナカの唇をそっと奪った。軽く合わせて、一旦唇を離す。さっきの前戯では温存しておいた、唇へのキスだ。

「んっ……嬉しい、お兄さん……でも本当は、エッチの前にして欲しかったです……」

一旦は笑顔を見せてくれたマナカだが、すぐにぷっと頬を膨らませ、上気した顔をシンジに向け、上目使いで拗ねたような表情を浮かべる。

そのなんともいえぬ甘えた様子がまた、シンジの獣欲をそそり、興奮をかきたてた。

二人はもう一度、唇を重ねた。シンジは、今度はそっと舌を出して少女の色の薄い唇を嘗め回し、ついで軽く開いたマナカの口の中へ、舌を侵入させていく。

「ん……む……」

まだ残る痛みに時折顔をしかめながらも、マナカもシンジの行為に応え、口腔に侵入してきた男の舌に、自らの舌をそっと伸ばす。

シンジの寝室に、ぴちゃぴちゃと舌を絡ませるかすかな音が響いた。

66 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2006/12/31(日) 21:26:40 ID:l5hft1e

(こ、こりゃ……たまんねえ……)

シンジは全身でマナカのぬくもりを感じつつ、マナカの唇には舌を、ワギナには男根を挿入したまま、かつてないほどの昂ぶりを感じていた。

腰こそ使っていないが、憧れの美少女の上の口と下の口を同時に楽しむこの行為が、これほど興奮をかき立てるものとは、シンジはついぞ思い至らなかった。

(や、やばい、このままじゃ……)

あっという間にこみ上げてきた射精の予感に、シンジはいささか焦った。コンドームは着けていないし、彼はまだ高校三年生、マナカに至っては高校一年生である。

責任逃れをする気はないが、今、子供を作るわけには行かないのだ。

慌てて唇を離れた彼は、少女の体にどっぷり浸っていた肉棒を引き抜こうとしたが…。

「あ！？ マナカちゃん、まずいよ！ 脚、脚を……」

マナカの両脚はいつの間にか、丁度あぐらをかいた形でシンジの腰に回され、それをがっちり固定していた。

「ウフ……逃がしませんよ、お兄さん……中で逝ってください……」

まだ痛みが残っているのだろう、涙を溜めた瞳で微笑みかけるマナカの両脚は、少しも緩もうとはしなかった。それでもシンジはなんとか男根を抜こうと身をもがいたが、その動きによってまた、それを熱く啜えこみ吸い付いてくるマナカの女体が、えもいわれぬ快感をシンジにもたらすのだった。

「ま、ま、マナカちゃん！ まずいって、もう、俺、俺……うっ……」

やがてマナカの中で、はちきれそうに怒張したそれが一層膨れ上がった刹那、シンジは断末魔を迎え、少女の体内に思いのたけをぶちまけていた。

「ああーっ……」

体の芯に熱いほとぼしりを浴びたマナカもまた、体を硬直させたのだった。

二人の体から力が抜け、荒い息がやがて静かな息に代わってゆく。

お互いの体に腕を回したまま、二人の意識はぼんやりと闇の中へ堕ちていった。

67 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2006/12/31(日) 21:30:12 ID:l5hftT1e

「お兄ちゃん、朝だよ～」

翌日の朝。階下からのカナミの声に、シンジは目を覚ました。

またしても、股間にテントを作って。

「……夢か」

それにしても……いい夢だった。枕の下の鍵を確かめ、起き上がったシンジだが、着替えるのにも苦労するほど、彼の下半身は勃ちっぱなしだった。

夢精しなかったのは幸運というべきだろう。

今日も学校でマナカと会うことになる。

(俺、マナカちゃんの姿を見ても、じっと我慢できるかな……)

そんなことをつらつらと考えながらシンジはようやく着替えを終え、ゆっくりと下へ下りていった。

その日一日、マナカの姿が眼に入るたびに、シンジはつい妄想の世界に入ってしまうのを押さえようもなかった。言葉を交わしたときなど、目覚めようとする下半身を鎮めるのに苦心したほどだ。

身近な女性をオカズにしたうえで、その女性とともにひと時を過ごす。それがどういふことか、シンジはこの日、存分に思い知ったのだった。

(こんな気持ちいいことを、俺はいままで知らなかったのか……カズヤ、お前は偉大だった……俺もこれからは……よし、まず今夜は……)

シンジの夢はまだまだ続きそうだった。

68 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2006/12/31(日) 21:31:01 ID:l5hftT1e

以上。

題名は「シンジの夢十夜 ～第一夜 マナカ編～」で。

夢という前提で書くと、エッチにつながる過程とか中田氏の後始末とか、余計なことはそぎ落とせるのは楽ですな。

第一夜ということで結構、気合をいれてエロを書いたつもりですが、これを10回続けるのはちと無理。
以後は少し力を抜いて軽く書きますがご了承ください。

次はアキ編のつもりです。例によって気長にお待ちください。

では皆様、良いお年を。

69 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2006/12/31(日) 21:43:52 ID:VLzZmVSH
乙です！
そして一足早いお年玉に感涙っす！！

いやあすっごくリリカルですね
無理は重々承知の上でもっと気合いを入れていただきたくになりますよ

今年最後にいいもん拝ませていただきました
トマソンさまも良いお年をお迎えください！！

70 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2006/12/31(日) 22:02:28 ID:Vt2Qdc60
大晦日に乙一(´ω`)

71 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/01(月) 00:00:11 ID:HLy3xAM9
あけおめこ
とよろ

72 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/01(月) 01:04:54 ID:nDhxRGrg
おめ

73 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/01(月) 01:19:34 ID:jdn+utmh
ことよろ

74 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/01(月) 07:40:13 ID:HLy3xAM9
あけ
おめこ
とよろ

75 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/01(月) 13:33:22 ID:bRiSvZfB
あけ おめこ とよろ

76 名前： 72 ♦jQvWLkj232 [sage] 投稿日： 2007/01/02(火) 10:02:48 ID:jmApyXgU
皆様、あけましておめでとうございます。
早速ですが、小ネタを投下させていただきます。

NGワード「エロ分薄し」「Gガ〇ダムネタあり」

タイトルは「“夢”をつかみとれ！！」で。では投下。

77 名前： 72 ♦jQvWLkj232 [sage] 投稿日： 2007/01/02(火) 10:05:10 ID:jmApyXgU
「—最近、また胸が大きくなっちゃってさ—」
「へー、羨ましいなあ。私のは全然大きくならないよ」
「羨ましいって、そんなこと無いわよ…肩こるし」
「毎日揉めばおっきくなるのかな？」

「うーん…それ、ガセだって聞いたけど？」
とある日の小笠原高校のお昼休み。
何気ないナツミとケイの会話に、クラス中の男子は黙って聞き耳を立てていた。
全員そういったことには敏感な年頃な上、
クラスで1、2位を争う人気の彼女たちが、胸のことで赤裸々に語り合っているのだ。
これで興奮してこそ健全な一般高校男子であろう。

…で…そんな悶々とするだけの男共とは、別次元の男が一人。

それは新井カズヤである。既にカズヤの頭の中には、
次の行動の為のいくつかの選択肢が浮かんでいた。

「そう、かんけいないね」
「さわらせてくれ、たのむ！」

一と。まあどこかで見たことがある物ではあるが…

そして『変態』カズヤの頭の中には、もう一つの究極の選択肢が存在していた。
そう、それは—

「ころされてでも

も み し だ く」

78 名前： 72 ◆jQvWLkj232 [sage] 投稿日： 2007/01/02(火) 10:07:56 ID:jmApyXgU

「うおーっ、今岡ー！！おっばい揉ませろー！！」

そう言うが早いか、カズヤは立ち上がると

いきなり今岡に襲い掛かった。

「な…っ！！ふざけないでよっ！！」

一瞬うろたえたものの、ナツミはすぐに戦闘態勢に入ると
カズヤに向けて怒りの鉄拳をぶちかます。

“ドカァッ！！”

カズヤの顔面にクリーンヒットするナツミの右ストレート。
いつもはこの一撃でノックアウト、彼の夢はあえなく潰える…はずだった。
しかし今日のカズヤは、一味も二味も違う。
こんな攻撃では、全くもってへこたれない。
カズヤは一度ナツミと距離をとって呼吸を整えると、
自らに残された全ての力を右手に集中する。

「ハアア…俺のこの手が真っ赤に燃えるう！！
おっばい掴めと轟き叫ぶう！！」

その雄たけびと共に、再びカズヤはナツミへと挑むべく突撃を開始した。

「まったく…懲りないわね！やあ！！たあ！！」
ナツミはそんなカズヤに対し、容赦ない鉄拳の連打を放つが—
既に本気モードになったカズヤには一発も当たらない。

「な…！！私の技が効かない…！？」
クラス中の男子の夢と希望を乗せたカズヤの右手は、
ナツミの攻撃に全く怯むことなくナツミの桃源郷へと突っ込んでいく。
「ばあくねっつう！！○ッド○インガァーッ！！！」

「頑張れーっ！カズヤー！！」
「お前は俺達の誇りだー！！」
「いけーっ！！」
男子全員の声援(?)を受け、カズヤはナツミの胸に触れ一揉んだ。

“もにゅっ…”

「あ…あうんっ！！」
79 名前： 72 ◆jQvWLkj232 [sage] 投稿日： 2007/01/02(火) 10:09:11 ID:jmApyXgU
—勝負は一瞬で決した。
カズヤの日々のオナニーで鍛えた黄金の指先が、ナツミの胸の上で巧みに動き回り—
すぐさま彼女の身体は快樂の奔流に包まれたのだ。

「ふにゃあ…」
そのまま耐え切れずにへたり込んだナツミに
カズヤは更なる愛撫を加え、彼女を快樂の園へといざなっていく…
「や、やめてえ…カズヤあ…」
「はっはっは、ここか？ここがええのんか、ナツミい？」
「い、いやあ…ああん…」

—こうしてナツミはカズヤの前に陥落し、性奴隷となったとき。
めでたしめでたし。

・
・
・

「—という初夢を見たんだが。どう思うシンジ？」
「病院行け」

(おしまい)
80 名前： 72 ◆jQvWLkj232 [sage] 投稿日： 2007/01/02(火) 10:09:50 ID:jmApyXgU
以上です。お目汚し失礼しました。
それでは皆様、今年も卑猥によろしくお願い致します。
81 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/02(火) 16:27:57 ID:0Rrmb4C1
乙始め也！
82 名前： 541 ◆05jvyNSqBM [sage] 投稿日： 2007/01/02(火) 16:56:43 ID:4kTHkx8a
謹賀新年。久々に投下します。

リョーコ14歳シリーズ「幼妻」編の直後の話になります。
保管庫収納はその順番でお願いします。

タイトル：リョーコ14歳／聖夜
舞台：単行本2巻「034 中村の歴史」
内容：過去、リョーコ、陵辱、鬱展開

83名前：リョーコ14歳／聖夜 ◆05jvyNSqBM [sage] 投稿日：2007/01/02(火) 16:57:36
ID:4kTHkx8a

§ 聖夜

1997年12月24日、クリスマスイブの夕暮れ。
街は明らかに浮ついた雰囲気支配されていた。

リョーコは、駅前の広場を早足に横切って改札に向かう。
手にした携帯には30秒前に届いたメールが表示されたままだ。
仕事が終わらないので遅れる、そういう内容のメールだった。

「まったくもう、時間に厳しくせに、大事な日に遅刻ってどういうこと？」

乗車券の自販機に小銭を投入し、乱暴にボタンを押す。

「イブの夜なのよ。遅刻したらレストランの予約席なんて無くなっちゃう」

反応の鈍い券売機にいらつき、何度もボタンを押す。

「ああ、もう。この機械も、関根先生も話にならないわ」

ようやく、券売機から吐き出された切符を掴み取ると、自動改札を抜けて、猛ダッシュで駅の階段を駆け下りる。ホームに下り列車が滑り込んで来たところだ。あれに乗れば、15分で中学校に着ける。

今日は彼女の誕生日にしてクリスマスイブ。
フレンチレストランで豪華ディナーの後は、シティホテルで二人で過ごす。
それが関根先生との約束だった。人目を忍ぶ関係である二人が、羽目を外して楽しむ夜のはずだった。

…今夜こそ関根先生にしっかり説教してやるんだ。
ちゃんと反省しないと、エッチさせないんだから！

84名前：リョーコ14歳／聖夜 ◆05jvyNSqBM [sage] 投稿日：2007/01/02(火) 16:59:01
ID:4kTHkx8a

¶

夜の校舎。

リョーコは関根が残業している指導室に向っていた。
頭の中で、関根にぶつける文句を吟味推敲しながら廊下を歩いてゆく。

そのときだった。通り過ぎようとした視聴覚室の前で人の気配を感じたのは。

リョーコは、何気なく扉を開けて中を覗き込んだ。
暗い室内の奥から聞こえてくるのは女の喘ぎ声…え？何

室内に一步踏み込み、奥に目を凝らす。数人の人影がビデオモニタを囲んでいた。喘ぎ声はビデオの音声のようだ。人影の一人が立ち上がって口を開く。

「なんだ、先公じゃねーのかよ。びっくりさせやがって」

相手が懐中電灯でリョーコを照らす。その眩しさに反射的に目を瞑ってその場に立ち尽くす。それが命取りとなった。気付いた時には、リョーコは数人の男に囲まれていた。関根とのクリスマスデートにあわせて選んだ服は、彼女を実際の年齢より大人に見せていた。

「ほーこれはこれは、上玉じゃないか。ここの卒業生か？」

しまった…リョーコはおもわず唇を噛んだ。
どう考えてもこのまま無事に帰してもらえそうに無かった。

『ああ～イイツ。もっと、もっと突いて』ビデオからAV女優の声が響く。

「なあ、無修正ビデオも飽きたし、この女で楽しもうぜ」
「えー、アニキ、ヤッチャうんですか」

男達の見た目は20歳前後。たぶんこの学校の卒業生。
クリスマスイブの夜に、彼女のいないクズ共が学校に忍び込んで、視聴覚室の機材でAV鑑賞会でもしていたのだろう。

「チクらないように、口封じしないとまずいだろ。
なーに安心しろ。オレのチンポをぶちこんだら、どんな女もイチコロさ。
次からは、おねだりするようになるんだぜ」
「うひゃひゃひゃ、マジかよ！」
「アニキ、すげー」

アホだ、こいつら…リョーコはそう判断した。

85 名前： リョーコ 14 歳 / 聖夜 ◆05jvyNSqBM [sage] 投稿日： 2007/01/02(火) 17:06:45
ID:4kTHkx8a

¶

「さあ、これから気持ち良くしてやっからよ。」

リーダ格の男が、リョーコの腕を掴もうとした。

「触るな、このチンカス野郎！」

リョーコは飛び退き、男達の手を逃れた。
しかし、それは時間稼ぎでしかない。リョーコは徐々に部屋の隅に追い詰められていった。連中の一人が部屋の扉の内鍵を下ろした。もはや逃げ道は無い。

何か武器はないか…そうだ。裁縫セットにカッターナイフが！
これで戦えるか…相手は四人、いや五人だ。無理。

関根先生から習った護身術は伊達ではない。相手が一人なら切り抜ける自信はある。だが二人相手は難しいし、三人以上に囲まれては勝負にならない。心得があるだけに限界もはっきりわかる。できるだけ時間を稼いで、助けを待つしかない。リョーコはバッグの中を手探りして目的のものを取り出した。

「レイプされるぐらいなら、ここで手首を切って死んでやる」

カッターナイフの刃先を自分の手首に突き立てて、男たちを睨み返す。リーダ格の男はリョーコの脅しを無視し、仲間目配せする。

「気の強い女だな。
おとなしく言うことを聞けば、痛い目に会わずに済むぞ」

男は野卑な笑いを浮かべると、上着の内ポケットから黒い道具を取り出した。次に上着を脱いで腕に巻く。リョーコがカッターナイフで切りつけても、これではダメージを与えられない。

「近付くなッ！手首を切るわよ」
「嘘だね、おまえは切ったりしないよ。
そんな強い目をしてる奴は、自殺なんかしないさ」

男は間合いを詰めると、リョーコのおき腹に例の黒い道具を突き当てる。バチッ、バチ！青白い電光がはじけて、リョーコの体を衝撃が貫く。

「うぐ、が…あ…あ」

まともに声もでない。体の力が抜け、その場に崩れるように倒れた。男の仲間がリョーコの手からカッターナイフを奪い、床に投げ捨てた。

「手間かけさせやがって、お仕置きが必要だな」
「アニキ、俺、こんなの持ってるんすけど」

そういつて、仲間がバズを差し出した。

「お前、女もいないのにこんなの持ち歩いているのかよ。バカじゃねーの？」
「ひどいやアニキ。オレ、グッズマニアっすから。こんなのもあるんですよ」

次に出てきたのは手錠と口枷。

「うひゃひゃ、マジかよ」
「この女は、俺たちへのクリスマスプレゼントだ。さあ楽しもうぜ」
「「おーっ」」

86 名前： リョーコ 14 歳 / 聖夜 ◆05jvyNSqBM [sage] 投稿日： 2007/01/02(火) 17:09:30
ID:4kTHkx8a

¶

非常口を示す緑色の灯りが、暗い室内をぼんやり照らしていた。その室内の片隅で数人の人影が蠢いていた。

「う、くうー、もうイク、出る、出るッ」

リョーコに覆いかぶさり、激しくピストン運動をする男の影。両腕は後ろ手にして手錠を掛けられ、男の仲間達が左右の脚を強引に開いていた。やがて上に乗った男は深々とリョーコを突くと、動きを止めた。膣の中で、男のモノがビクビクと脈動しているのがリョーコにはわかった。

「ふうー」

男は、射精のあいだ止めていた息を吐き出した。逆光のため、リョーコには男の表情が見えなかったが、満足げな様子は伝わってきた。

「どうだ。俺のは大きくて最高だったろ」

「ヒィェー、フェフェフオ」（死ね、下衆野郎）

リョーコの罵倒は、口枷のせいで言葉にならなかった。言葉のかわりに、相手を睨み付ける。それを見た男は、ますます喜んで言った。

「へえ、いいねいいね。その表情」

男はバイブを手にとり、リョーコの顔にペタペタと当てながら言葉を続ける。

「その反抗的な表情が、どこまで保つか見ものだな。」

そう言うと、口枷の穴にバイブを突き入れ、リョーコの口蓋を蹂躪した。必死に舌で押し返そうとしたが、逆に喉の奥まで突っ込まれてしまった。強烈な咳と吐き気がリョーコを襲う。

「ブゲ、ゲボッ ウゲッー」

目から涙が溢れ、口の中には胃から逆流した胃液が溢れた。

「ほらほら、反抗するともっと辛くなるぞ」

男は心底楽しそうだった。…こいつ、ドSだ。

「次はケツ穴をいただくかな。こっちは初めてか？」

男は脅える表情を見たかったようだが、リョーコは無反応だった。…アナルもとっくに関根先生にあげちゃったわよ。

「ふん、まあいいさ。ケツ穴にはいいものを塗ってやるよ」

男はジャケットの内ポケットから、小瓶を出した。小瓶のフタを取ると、中身のどろりとした液体をリョーコの陰唇から肛門にかけて垂らした。

「このクスリを塗られた女は、もうヤルことしか考えられなくなるんだぜ」

リョーコの目は恐怖に大きく見開かれた。男は満足げに笑った。

87名前： リョーコ 14歳／聖夜 ◆05jvyNSqBM [sage] 投稿日： 2007/01/02(火) 17:11:03
ID:4kTHkx8a

¶

あれからどれだけ時間がたったのだろう。前も後ろも何度も繰り返し陵辱されるうちに、リョーコは時間感覚を喪失していた。

「おお、すげー締まる。アニキ、この女のケツ穴は最高っす。」

「マンコに入れたバイブのスイッチを入れてやれ。もっと締まるぞ！」

「うあ、本当だ、すげー。バイブ持ってきて良かった〜」

グズマニアは嬉々として背後からリョーコの穴を攻め立てた。

リョーコは関根に体を開発されていたとはいえ、二穴攻めは初めてだ。

背中側と腹側から同時に突かれる強烈な刺激に、リョーコは意識が飛びそうになる…絶対に感じたりするものか。こんなの気持ち良くなんか、な、い。

「おら、舌使ってチンポ舐めろよ。」

リョーコは髪の毛を鷲掴みされ、床から顔を持ち上げられた。

「ヒタイ、ヒヤマ」（痛い、ヤメテ）

「痛いのが嫌なら、素直にやれよ。」

リョーコは口枷の穴から舌先を出して、椅子に座った男のペニスの先端を舐め始める。

「そうだ、竿の部分もやれ。こびりついたお前のマンカスを舐め取れよ」

侮辱されても、もはやリョーコには反抗する気力は沸いてこなかった。今はただ、一刻も早く解放されることのみを願っていた。男性の性欲は無限に続かないはず。ならば、この下衆野郎共の欲望を満たし、積極的に精力を吸い取ってやれば、より早く解放されるはずだ。

「アニキ、俺、もう、出る、出る——っ」

アナルを攻めていたグズマニアは、リョーコの尻を強く掴んで激しくピストンし、彼女の腸内に熱いものを大量に注ぎ込んだ。…こいつはこれで3回出したはず。あと少しだ、こいつらの精液を全部吸い取ってやる。全身を貫く快感に、軽くイキかけた頭でリョーコはそう考えていた。

「ほら、舌が止まってるぞ。ちゃんと勃たせろや。

そうしたら、またオマンコにぶち込んでやるからな」

…そうだ、このチンポも早く大きくして精液を吸い取らないと。

リョーコは、男のペニスを自ら吸い込み、バキュームフェラを始めた。

「よーし、いいぞ。素直になってきたな」

リョーコはジュボジュボと音を立てて熱心にフェラを続ける。
口の中で男の竿が太く硬くなってゆく…こいつの、すごく、大きい。

88 名前： リョーコ 14 歳 / 聖夜 ◆05jvyNSqBM [sage] 投稿日： 2007/01/02(火) 17:13:19
ID:4kTHkx8a

♀
背後ではグズマニアにかわって、別の男がリョーコのアナルを試そうとしていた。

「うひゃひゃ、ケツ穴が開きっぱなしじゃん。何本入るかな」

リョーコのアナルは三本の指を易々と飲み込む。

「うひゃひゃひゃ、もうユルユルだ」

うひゃ男はリョーコのアナルに両手の指を掛けて左右に大きく広げた。穴の奥からどろりとした白い精液が溢れ出て、腹側へ垂れてゆく。その先にはバイブの根元がモータ音を響かせて揺れていた。

「うひゃ～精子だらけじゃん。お前出しすぎ」
「悪い、すげー気持ちよくて全部中にブチマケたっす」とグズマニア。

「ブチマケじゃねーよ。キモイだろ。後から使うやつのも考えろよ」
「俺、浣腸グズも持ってるから、それで綺麗にしようか」

「うひゃうひゃ、そんなものまで持ってるのかよ。変態だな www」
「じゃあ、準備するっす…」

「もういって。俺はマン穴でやるから」

うひゃ男はバイブを引き抜くと、かわりに自分のモノを突き入れた。
バイブの単調な刺激とは違う動きに、リョーコは嬌声を上げそうになった。
…やだ、わたし感じてる。だめ、そんなのダメ。

リョーコの意味とは関係なく、彼女の膣は男のペニスにねっとりと吸い付き、さらに深い挿入を誘う。

「うひゃー、気持ちいい。マンコサイコー」

男は突くペースを上げてゆく。それに応えてリョーコの体の芯に熱いものがこみ上げてくる。
…こんな酷いことされて、感じるなんて。最低だわ。

「うひゃひゃあ、もうイキそうだっー」
「おいおい、早漏過ぎだろ。塗ったクスリがお前に効いてきたか www」

…クスリ、感じるのはそのせいなんだ。だったらいいわ、感じたっていい。

「うひゃ、この女、自分で！」

リョーコは自ら尻をふって、うひゃ男の突きに応え始めた。巨根男へのフェラのペースも上げた。

…ほら、早く出しちゃいなさい。あんたらの精液を全部吸い取って、早くお終いにしてやる。

「うひゃーー、いく、いくぞ。そら、受け取れや！」

うひゃ男は、リョーコの中へ熱く濃い精液を放つ。

リョーコは尻を高々と持ち上げ痙攣した。この夜、初めての絶頂だった。

89 名前： リョーコ 14 歳 / 聖夜 ◆05jvyNSqBM [sage] 投稿日： 2007/01/02(火) 17:19:45
ID:4kTHkx8a

(続く)

今編は無駄に長いので、続きは後日投下します。

では本年もよろしく。

90 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/02(火) 20:23:37 ID:G9X/wiT/
乙であります

91 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/03(水) 10:31:53 ID:9xEvvFSt
ダブル乙&GJ!

92 名前： 名無しさん@ピンキー [age] 投稿日： 2007/01/03(水) 16:35:12 ID:Vsjd/Jsc
神はこのスレを見捨ててはいなかった

93 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2007/01/03(水) 21:42:34 ID:2GLy1d9J

トマソンです。

皆様あけ おめこ とよろです。

72 氏、541 氏、乙です。

72 氏： 軽妙で新年一番に相応しいですね。

でもGガンダム見てないんでネタが分からん (汗)

541 氏： レギュラーキャラが本作非登場キャラにレイプで最後までいく話は、実はこのスレ史上初めてのはず。未遂はありましたが。

難しい切り口と申しますし、読み手の反応も限られたものになりがちですが、どうか頑張ってください。

さてシンジの夢十夜、第二夜のアキ編を投下します。

94 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2007/01/03(水) 21:43:56 ID:2GLy1d9J

こんな夢を見た。

ピンポーン。

ある日の夜、城島家のベルが鳴った。

シンジがドアを開けると……。

「こんばんは、デリバリーエステ・アローズパラダイスから参りましたアキです」
洒落た私服で着飾り、営業スマイルを浮かべた矢野アキに、シンジは思わず見とれた。

「や……やあ、いらっしやい」

シンジは彼女の制服姿は見慣れていたし、水着、ブルマ、スキーウェアなどに身を包んだところも見たことはあったが、このような自然なオシャレをして誘うような微笑を浮かべたアキは、また一風違った魅力を発散していた。

「あの……私でよろしいでしょうか？」

上目使いにシンジを見つめ、しおらしい表情で了承を求めるアキ。これでチェンジする奴は男じゃない。いや、人間じゃない。

「も、もちろん！ 最高だよ。さあ上がって」

なぜこうなったかという、話しは少々遡る。

95 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2007/01/03(水) 21:44:49 ID:2GLy1d9J

この日の放課後、シンジはアキから奇妙な頼みを受けた。

それは……マッサージの練習台になって欲しい、というものだった。

「な、な、なんでまた??」

内心で（ちょーラッキー!!）とガッツポーズをかましながらかも、それを隠して訳を聞くシンジに、アキはぽつりぽつりと理由を話してくれた。

つい先刻まで、将来の仕事について、考えていたこと。

仕事に活かせるような能力を持ち合わせておらず、悩んでいたこと。

そこへ黒田マナカが口出しをしたこと。

「あるじゃないですか、アキさんにも」

「……？」

「そのムネで、多くの男性をイカすことが出来ると思います」

ポッ！

次の瞬間、闘気を噴出してマナカに天誅を加えはしたのだが。

改めてゆっくり考えれば、我ながらいい胸をしているのだし、これを活用しない手はない、と思ったこと。

そこで思いついたのが、メンズエステのエステティシャンだったこと。

思いつめた表情で、練習台を頼んだ理由を話すアキ。少々勘違いしている気がしないでもない、というか、なんでそんな職業のサービス内容を知っているのだろう？

「あ、あのさアキちゃん。いや、それはアキちゃんは俺から見ても素敵な胸をしていると思うけどさ。それだけを仕事に活用するんじゃなく、普通に事務でも何でもできるように勉強するほうが……」

とりあえずまともなことを言って諫めるシンジだが、内心ではマッサージして欲しくてたまらないのは言うまでもない。

「その自信がないから、こうしているんです。少しはマッサージとアロマも勉強したん

です。お願いします！ 練習させてください」

珍しく、オーラを発散するアキに、少々シンジも気圧された。

「そ、そりゃ、俺でいいなら、願ったりだけど……」

アキの顔がぱっと明るくなった。

「良かった……それじゃ、今夜8時に伺いますね」

そんな成り行きで、着飾ったアキが城島邸を訪れたわけである。

96 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2007/01/03(水) 21:47:57 ID:2GLy1d9J

「お待たせしました……」

シャワーを済ませ自室で待つうちに、着替えを終え、おしぼりやら小瓶やらを携えて現れたアキを見て、シンジは鼻血が出そうになった。

男物の大きめのワイシャツ。下は裸足で、綺麗なピンク色のペディキュアが施された足の爪から、ワイシャツの裾が太腿の付け根近くに垂れるまで、アキのすらりと伸びた生脚を隠すものは何もなかった。そして、ほのかに透けて外縁のシルエットだけが伺える純白のショーツ。腰はきゅっと締まって、シャツがぶかぶかだ。さらに上はノーブラのようで、綺麗なおわん型の乳房が見事にシャツに浮かび上がり、そのてっぺんにはかすかにピンク色の突起が透けて見えていた。

「あ、アキちゃん……」

思わずシンジの声が上ずるのももっともなほどのアキの姿だった。

「やだ、そんなに見ないでください……お部屋、ちょっと暗くしますね」

アキはラジカセをセットしてごくおとなしい音量でリラックス音楽を流し、部屋の照明を薄暗くした。そんな中、裸ワイシャツ姿のアキといえると思うだけで、シンジは興奮がこみ上げてくる。

「さわっちゃ、駄目ですよ？ お客さんは完全受身ですからね」

念を押すアキ。シンジは残念でたまらなかったが、うなづくよりない。

「それじゃ、服を脱いでベッドに仰向けになってください」

「は、はい……」

気恥ずかしいのをこらえて裸になったシンジ。アキもまた、もう立ちかけている男性のシンボルに顔を赤らめ、そっとタオルでそれを覆い隠した。

「では、失礼します……」

アキのたおやかな手がゆっくりと、シンジの足裏からマッサージを開始した。

「おっ……うっ……」

それからというもの、シンジは快樂とほのかな焦らしの中をさまよった。

ラベンダー、レモングラス、あるいはローズマリーのアロマオイルの芳香のなか（アキが持参した小瓶はこれだったのだ）、時にはベビーパウダーを、またはローションを駆使し、アキは丹念にシンジの体をほぐしていく。

「太腿の辺りが凝ってますね～」

「あ、風紀委員会で草取りやらされたから……う、気持ちいい……」

アキの手は力を込めて筋肉を揉みほぐしては、ところどころのツボを捉えては指圧を加え、さらには優しく爪をたてて肌を愛撫していく。

それが丹念に全身を行き来するのだ。シンジはアキの求めるままに仰向けになったりうつ伏せになったりしながら、存分に夢心地を楽しんだ。その間中、股間のタオルは持ち上げられっぱなしだったことは言うまでもない。

だがアキの手は、半ば勃起したそれを時折かすめながら、決して触れようとはしなかった。

97 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2007/01/03(水) 21:51:16 ID:2GLy1d9J

やがて全身がぽかぽかと暖くなり、触れそうで触れない少女の手にシンジがたっぷりと焦れたころ、アキは一旦ベッドから立ち上がった。

「それでは、スペシャルサービスに移ります……」

(スペシャルサービス?)

いぶかしむシンジの前で、アキは恥ずかしそうにワイシャツのボタンをゆっくりと外しはじめる。

「あ、あ、アキちゃん??」

生唾を飲み込むシンジの前で、やがてアキが前を開く。はじけ出た乳房に、シンジは眼を吸い寄せられた。

輝くばかりの若々しい肌が、見事なまでの豊かなお椀型の隆起を形づくっていた。豊かなボリュームを誇りながら、それでもまだどこか未成熟な印象を抱かせる、垂れた感じなど微塵もない引き締まった乳房だった。その先端に息づく、ツンと上を向いた乳首はあくまでも可愛いピンク色だ。

なんという造形だ。芸術品だ! いや、人類の宝だ!

その宝物がやがて、シンジの目前に急接近した。

ワイシャツを脱ぎ捨てショーツ一枚になったアキが、シンジに添い寝するように体を横たえ、シンジに捧げるべくその胸を眼前に持ってきたのだ。

息を呑むシンジの手を、アキの手が優しく導いた。

「触って……いいのかい?」

真っ赤になってうなずいたアキは、次いでシンジのいきり立った股間のそれに手を伸ばした。ローションを塗りこめた少女の手がそっと男根を握り、摩擦を開始する。

「うっ……」

いきり立った男性自身をこすられ、シンジは情けない声を出してしまった。

さらに、顔を真っ赤にしたアキが、シンジにささやく。

「おっぱい、嘗めてもいいんですよ?」

「あ、アキちゃん……」

この乳房を、俺が好きなように楽しめるのか!

喉がカラカラなのを感じながら、シンジはアキの胸にむしゃぶりついた。

全体を掌でやわやわと愛撫し、健康的なきめの細かい肌を丹念に撫で回す。どんなに揉んでも、アキの柔肉は自在に形を変えて掌に吸い付いてきた。ふもとから円を描いて乳首までをそっと撫でつけ、ついに頂上に達した指でくりくりと乳首を弾くと、

「あっ……」

と甘い声を漏らしてアキが身をよじった。

たまらなくなったシンジは、アキの胸の谷間に顔を埋めた。左右から柔肉を寄せ、三方からの圧力を感じつつ、えも言われぬアキの甘い体臭を存分に嗅ぐ。

「アキちゃん……素敵だ……」

乳房全体をしゃぶろうとしたシンジだが、含んでも含んでも、とても入りきらない。ついにあきらめて乳首だけを口に含み、可愛らしい突起に思う存分に唾液をまぶし、吸い、つつき、転がした。

一方のアキも、乳房をなすがままに弄ばれ、時折甘い息を漏らしながらも、いまや毒々しく血管を浮き出させているシンジの肉棒を掌で摩擦し続けていた。

98 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2007/01/03(水) 21:53:39 ID:2GLy1d9J

「アキちゃん……」

なおも胸に顔をうずめながら、シンジの手が、きゅっと締まったアキの腰のあたりを撫で始める。と、

パチン！

アキの手が、シンジのいたずらな手をしっかりつけた。

「いてっ……アキちゃん？」

「だ～め。下半身は触っちゃ駄目です」

「そ、そうなの??」

シンジの心底残念そうな顔に、アキは軽く微笑んだ。

「そういうお店じゃないんですよ？」

「う……」

手コキしながらの台詞にしてはどうかと思うが、シンジが口を開こうとした瞬間、アキの柔らかい指先が男根の先端の割れ目をなぞり、思わず声をもらしたシンジは抗議のタイミングを失ってしまった。

再び普通の手コキに戻るアキに、シンジは物欲しそうな眼でアキの下半身を見やる。髪の毛よりほんの少し濃いめの黄色い陰影が、清楚なショーツを通してかすかに伺えた。

(触れたいけど……駄目なのか……じゃ、せめて……)

アキのショーツからベリベリと視線を引き剥がしたシンジは、ひとつ頼みをした。

「それじゃ、あのさ、アキちゃん……」

「なんででしょう？」

「その……オッパイに挟んでくれないかな」

アキはちょっと考えた。ハンドサービスが基本で、下半身への攻めは禁止だが、パイズリはルール上OKだったはずだ。というより、哀願するようなシンジの眼にアキも断り切れなかった。

「分かりました……それじゃ、そのまま仰向けで楽にしてください」

アキは体をずらし、シンジの股間に胸の位置を合わせてかがみ込んだ。

いきり立った男根にローションを追加すると、左右からそっと、シンジの肉棒を挟み込んだ。

「う……」

シンジは再び情けない声を出してしまった。手ほど繊細な刺激があるわけではないが、この眺めはどうだ！

重力によっていやが上にもボリュームを強調されたアキの国宝級の乳房が、シンジの男性自身を左右からむっちり包み込んでいる。アキが軽く体を上下するたび、ローションを潤滑剤にして柔肉がそれを摩擦し、刺激し続けた。ときおり肌と肌の間に空気が入ってはつぶれ、クチュクチュと音を立てるのがひどく淫靡な響きだった。

やがて先端から、ローションではない、透明な汁がにじみ始める。催淫作用を持つとされるジャスミンの香りに混じって——スペシャルサービスの初めにアキがセットしたものだ——イカくさい匂いが辺りに漂い始めていた。

99 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2007/01/03(水) 21:57:17 ID:2GLy1d9J

「あ、アキちゃん……最高……」

シンジさっきからは荒い息をつき続けていた。血管を浮かび上がらせた彼のシンボル

は、アキの手の中で最大級の怒張に達している。

(でも、イってもらうにはもう少し刺激がいるかな?)

アキは自らの乳房を介して揉みこんでいる男根を観察し、ちょっとした悪戯を――。

「……シンジさん、お店には内緒ですよ？ これ本当は禁止なんで」

「えっ？」

乳房の間からまるでアキの顔を射すくめるように顔を出しているシンジの亀頭。

アキはそっと舌を出し、その先端の割れ目をチロリと舐めた。

「う、うおっ！」

シンジの体に電流が走った。もう駄目だ、今にも、今にも……。

(もうちょっとかな?)

今にも爆発しそうに震えているそれを、アキはもう一度つつこうと舌を伸ばした。

その瞬間――。

「うっ……」

ピュッピュッピュッ、と白濁した男の精が弾け、アキの唇を、舌を、顎を思い切り汚した。

「あっ……」

顔の下半分に熱いしたたりを浴びせかけられ、一瞬アキは呆然とした。その様子を見たシンジもまた、ドキリとした――ぶちまけられた精液を顔に垂らしたまま、呆けたように一物を見やるアキの表情は、それほど扇情的だった。

シンジは射精の余韻のなか、その魅惑的な眺めを心に刻みつけたのだった。

慌てて部屋を飛び出し、うがいして顔を洗ったアキは、やがてシンジの部屋に戻った。

「お疲れ様でした。いっぱい出ましたね」

いくらか無理に笑顔を作り、シンジの腹にまでかかっている白濁した粘っこい液体をおしぼりで綺麗にすると、アキは冷たい飲み物をシンジに渡す。シンジはまだ呼吸を整える途中だった。

「はあ、はあ、アキちゃん、素敵だったよ……それと、ごめん……顔にかけちゃって。その、あんまりタイミングが良くて嬉し、あ、いやいや、あんまりにも気持ちよくて」

「まさか、口の中にまでかかるなんて思いませんでしたよ？」

ぷっと頬を膨らませるアキもまた可愛らしかった。

100 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2007/01/03(水) 22:00:06 ID:2GLy1d9J

サービス開始の時にセットしたタイマーも、ちょうどいい時間を示している。

「それじゃ、最後にもう一度シャワーを浴びましょうね」

乾きかけたローションが、暖かい湯を浴びてまたヌルヌルになるのに驚きつつ、シンジはシャワーを済ませた。アキも脱衣こそしないが、手を伸ばしてローションを流すのを手伝う。

そして、やがて片づけをすっかり済ませたアキは、シンジの頬に優しいキスを――。

「えへへ……あの、シンジさん、ありがとうございます。おかげで、この仕事は出来そうだとわかったんで、自信になりました」

そうだった。夢中になって忘れていたが、これはアキのエステティシャンとしての練習だったのだ。

「それじゃ、お休みなさい」

帰ろうとした少女の手を捕まえ、シンジはアキをじっと見つめた。

このままアキを帰してしまうのか？ それでも俺は後悔しないのか？

「ねえアキちゃん。その……あの、お店に勤めるんじゃない、俺専属のマッサージ師なんて、どうかな？」

「あら……永久就職させてくれるんなら、考えちゃうな」

悪戯っぽい眼でシンジを見つめるアキ。シンジは目の前のボーイッシュな少女にハートを鷲掴みにされたことを、はっきりと認識していた。

やがてアキは握られた腕を優しくほどき、微笑みを残して去ってゆく。立ち尽くしたまま見送るシンジ。その意識はすうっと遠くなっていった。

101 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2007/01/03(水) 22:00:52 ID:2GLy1d9J

「お兄ちゃん、朝だよ～」

翌日の朝。階下からのカナミの声に、シンジは目を覚ました。

またしても、股間にテントを作って。

「……夢か」

またしても、いい夢だった。

下半身を楽しめなかったのは返す返すも残念だが、エステティシャンならまだしも、まさか妹の親友であるアキをソープ嬢にするわけにもいくまい。

(アキちゃんがメンズエステの店にいたら、そりゃ通っちゃうよ……それにしても、アキちゃんのあの胸は……まさに人類の宝だったな)

取り立てておっぱい星人というわけではなかったが、アキの胸を存分に味わった今、シンジが巨乳の魅力を改めて思い知ったことは間違いない事実だった。

(よし……それなら、今夜は……)

シンジの夢はまだまだ続きそうだった。

102 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2007/01/03(水) 22:01:32 ID:2GLy1d9J

以上。

題名は「シンジの夢十夜 ～第二夜 アキ編～」で。

ご想像の通り、メンズエステの経験をもとに書いてます。

ちなみになぜアローズパラダイスかという、と、「矢野」->Arrow's という連想ですな。

「アキの苦手克服」を書いて以来、自分の中ではアキは結構エロいこともこなせる女の子になってしまってます。ので、まあこういうのもありかな、と。

今回はパーフェクトボディを誇る人妻教師の予定。

例によって気長にお待ちください。

103 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2007/01/03(水) 22:27:35 ID:2GLy1d9J

うっ。

推敲が足りませんでした。

古田監督殿、保管庫へ移動のさい、一つだけご訂正をお願いします。

>99 二行目

「シンジさっきからは」 -> 「シンジはさっきから」

お手数おかけします。

104 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/03(水) 23:42:28 ID:VJWQwaJQ
G J !!

続きが楽しみです！

105 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/04(木) 00:43:38 ID:kky8wTPr
乙乙乙

昨年クリスマス前後から活気づいてかつての盛況ぶりを思い出す
年末年始は家庭優先と同時にまとまった休みでもあるから SS を書きやすいのかな？

106 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/04(木) 10:13:23 ID:BE9mrqyA
トマソン氏 G J !!!

「巨乳は世界を救う」次回の隠れ巨乳加藤先生にも超期待!!

107 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/05(金) 02:07:42 ID:nSBYC1ob
加藤先生、お子さんは二人だったっけ？

108 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/06(土) 01:50:37 ID:RS3ErI4p
氏家マンガでバスト 90 オーバーキャラっていたっけ

109 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/06(土) 02:57:18 ID:0iX/fqX8
90 オーバーは身長が 185 以上でないと寧ろグロイ、と思いませんか？やっぱ 86-88 くらい
までが

一番良いかと。勿論ナツミの 83 も垂涎ものです。

110 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/06(土) 09:44:30 ID:rWenrRYg
アヤナも高身長だったら大きすぎると悩まなかったかもな
アキの 85 は「身長に比して丁度いい巨乳」といえるのだろうか
今岡の 83 はなんつーか「美乳」って感じがする

111 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/06(土) 12:24:00 ID:1iN+wK9j
アイ先生キボン

112 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/06(土) 12:48:01 ID:QqtXU+Fs
アヤナキボン

113 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/07(日) 13:48:32 ID:P86RStEi
ボンキュッボン

114 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/07(日) 18:22:18 ID:jTBFQhhy
トイレニセボン

115 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/07(日) 18:34:05 ID:WPZ5ae4p
ボンカレー

116 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/07(日) 22:46:22 ID:jTBFQhhy
加藤先生といえば上から 87、56、88 で 166 c m だっけ

子供を産んでいるにもかかわらずウエストがこれってスゴス w w w

(きっと周りを見回せばこれがいかにスゴイかがわかるはず・ ・ w)

そこらのアイドルですらプロフに58とか書いてて
そのくせ実際は60越えばっかなんだし

暇なんでカップがいくらになるのか考えてみた（カズヤか俺はw
みるかぎり彼女はそんなにすごいグラマーでもないのだが、
1才の子供がいるので母乳による張りがあるものとして
納得出来る範囲でEかFだと仮定する。

綺麗な女性のスタイルはボウリングのピン状になりがちなので
ウェストとバストのアンダーはあまり変わらないのが望ましくて
そのうえカップはアンダーで決まることを踏まえると

Eで20cm差だから67cm、Fだと66.5cm

Wとの佐賀Eで11cmFで9.5cm

くびれからバストの最低部との距離は最長で15cm程度とすると

Fで身長1.5cmごとに1cm増（円錐状？）でちょうどいいくらいだろうか・・・

加藤先生でも多少ダイエットしてるだろうからウェストのくびれが特に細いんだとしても
Eカップは確実にあることになりますなww

母乳で張ってそれだからみごもる前ですら

CかDはあったんジャマイカと妄想してみる・・・w

ちなみにウェストとヒップの比率は0.7：1くらいが綺麗に見えるそうなので
加藤先生はそれもクリアしてるほんとのパーフェクトボディーらしい

なんて書いてたらトマソン氏の次回作が楽しみになってきたw
素晴らしい作品を期待してます！！！！

SSでもないのに長文スマソ

117名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2007/01/08(月) 00:18:23 ID:cXnA8zIe

トマソンです。

>116さん、あなたをこのスレの新井カズヤと認定します。
ま、ほかにもたくさんいますから心配はいりません。（マ

さて、シンジの夢十夜、その第三夜。
加藤先生編です。

では投下。

118名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2007/01/08(月) 00:19:57 ID:cXnA8zIe

こんな夢を見た。

「……あなた……」

シンジが自室のベッドでうつらうつらしていると、しっとりと落ち着いた声が彼を
まどろみから呼び覚ました。

「……ん……」

胸になんとかなくむずがゆさを感じながらシンジが眼を開けると……。

「あなた……お待たせしました。ごめんなさい、洗い物に時間がかかってしまって」
(えっ……！？)

シンジの上に身をかがめ、シンジのパジャマをはだけて乳首を指で優しくなぞっていた女性は、小笠原高校の国語教師、全校生徒の憧れ、『清楚』という言葉が似合う人ナンバーワンの、加藤キョウコ先生。エプロン姿で、妖しく微笑みながらシンジの胸に指で「の」の字を描いている。

「か、加藤先生？」

「うふふ、どうしたの『加藤先生』なんて……いつものように、キョウコって呼んで」

誘うような瞳を向ける整った顔立ちから、豊かな髪量を誇る漆黒のロングヘアがごく自然に垂れていた。

(そっか、俺、加藤先生と結婚したんだ……すげえラッキー……)

ぼんやりと夢心地の中、シンジが大きな黒目がちの瞳に見とれるうちに、加藤先生はさらに身をかがめ……。

「うおっ！？ か、いやキョウコっ?!」

加藤先生の——いや、以後はキョウコと呼ぼう——の舌が、ちろちろとシンジの乳首を転がし、シンジは思わず体を震わせた。

「あなた……今日はぼうやは、お父様とお母様に預けてきちゃった……ねえ……」

上目使いに誘うような視線を向けながら丹念に舌を滑らせる女に、こらえきれずにシンジがキョウコの体に腕を回すと……。

「……！？」

衣服に包まれた腰を予想していたシンジは、驚きの表情を浮かべた。キョウコの背中に回ったシンジの腕は、しっとりとした素肌に吸い付いたのだった。

「あん……」

たおやかな腰を引き寄せられ、キョウコも甘い声を漏らす。

「きよ、キョウコ？ エプロンの下は……」

「雨続きで、着るものがなくなっちゃって……お気に召さないかしら？」

男なら夢にまで見そうな、愛妻の裸エプロンである。

シンジは心臓を高鳴らせつつ、抱き寄せた女の体ごと、くるんと体を返した。今までとは逆に女体を下に組み敷いた形で、キョウコの上気した美しい顔立ちを見つめながら、シンジはキョウコの胸に手を伸ばした。

「…気に入らないはずないだろ？」

「あ……」

ゆっくりと揉むだけで、キョウコは眼を閉じ、かすかに吐息を漏らすのだった。

119 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2007/01/08(月) 00:21:57 ID:cXnA8zIe

エプロン越しに豊かに張りつめた柔肉の弾力を楽しむシンジだったが、やがてキョウコがそっとそれを静止した。

「あん……ま、待って、汚れちゃう……」

キョウコはあくまでも優雅に、後ろで結んだエプロンの紐をゆっくりと解いた。

息を荒げたシンジがエプロンをむしり取ると——そこには、薄いブルーのショーツ一枚のみを身に着けた、美しい女体が横たわっていた。

それも……それも、なんという体だ！

肌の輝きや張りで言えば若いマナカやアキには一步を譲るが……成熟してぬめぬめと

吸い付くような手触りの肌は、どこをとっても象牙のように艶めいている。

安産型のヒップはショーツ越しにシルエットを浮かび上がらせ、大理石のような太腿から引き締まった腰までをまるやかな曲線で見事につないでいた。きゅっとくびれた腰周りには余計な肉はまったくなく、どちらかといえば脇役に徹して、豊かなバストとヒップを強調している。その中心にくぼんでいる可愛らしい臍が、ごく控えめに存在を主張していた。

そして胸は——あのアキよりもさらに一枚大きいと思われる乳房は、重力によって多少扁平になってはいたが、円錐型の見事に整った膨らみを湛えていた。あまりにも豊かな量感でシンジの眼を捕らえて離さないその隆起の先端には、大きめの乳輪の真ん中に、ごく薄いブラウンの小さめの乳首が息づいていた。

キョウコの絶妙なプロポーションに、シンジはしばし見とれた。

そしてキョウコは——かろうじてショーツを身に着けてはいたが——素肌を全て晒して手で体を隠そうともせず、それでもなお恥じらいを浮かべて、桜色に上気した顔をシンジに向けていた。その瞳は、何よりも雄弁に、彼女の望みを訴えかけていた。

(……触って……いじって……あなたの望むようにして！)

脳内にはっきりその台詞を聞き、シンジは自制心も理性もどこかに吹き飛んだ。

「あっ……」

シンジはキョウコの胸にむしゃぶりついた。豊かな量感もさることながら、何よりも成熟しきって柔らかく熟れた肌と、むせ返るような濃厚な女の体臭に、シンジは陶然となった。夢中で乳房にしゃぶりつき、むにむにとみしだくうちに、ドロリとした白い液体が分泌されてくる——エプロンが汚れる、とキョウコが言ったのはこのことだったのだ。

一驚したシンジだったが、考えてみれば、一歳になったばかりの子供がいる彼女から母乳が出るのは、むしろ当然だった。

「キョウコ……おっぱいが……」

「いいのよ……飲んでも……」

シンジは赤ん坊よろしく乳首を含み、無心に吸った。

「あ、あん……」

キョウコの体も時折、ぴくぴくと震える。

「キョウコのおっぱい……おいしい……」

シンジはもう母親が恋しい年でもなかったが、

(いくつになっても、女の乳房は男のふるさとなのさ……)

などと頭の中で言い訳を考えつつ、シンジは夢中になって、濃厚でほのかに甘い母乳を啜り続けた。

120 名前： トマゾン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2007/01/08(月) 00:23:45 ID:cXnA8zIe

「あなた……ねえ、下も……」

出る限りのお乳を味わいつくし、ようやくにして顔を上げたシンジに、キョウコがそっと促す。言われるがままにシンジは手を伸ばし、吸い付くような象牙色の肌に両手を這わせた。きゅっと締まった腰を撫で回し、可愛い臍を一回りして、やがて愛撫は下半身へと進んでいった。

シンジはキョウコの体の芯をかろうじて隠している清楚なショーツを見やった。布越しに伺える黒々としたかぎろいの下、微妙なあたりに既に小さなシミが出来ているのを見つけ、シンジはそこに熱い視線を注ぎかけた。

「キョウコ……もう、濡れてるよ……」

「いやだ、見ないで……あっ、あん……」

恥ずかしそうに手で股間を隠すキョウコだったが、本気で抵抗する気はない。

その手を優しくどかせ、白磁の太腿の間に膝を割り込ませたシンジは、ショーツ越しに愛撫を開始した。手始めは指一本でそっと縦になぞっては、ツンツンとつつき回す。見る見るうちに薄いブルーの生地には浮き出たくぼみを、押し広げるように揉みこんでやると、ショーツの染みが次第に面積を広げ、女の体が時折びくびくと震えた。男に好きなようにいじられた薄い生地には、やがて大きな楕円形に淫靡なシミが浮かび上がる。

「あっ……ああ……」

キョウコが愛撫を受け止めて甘い声を漏らすうち、濡れそぼった布切れはぴっちりとして体に張り付き、キョウコの女性器の形をくっきりと浮かび上がらせてしまった。

「キョウコ……」

たまらなくなったシンジの指が、ショーツの縁にかかった。震える指がゆっくりと、最後の一枚を剥きおろしてゆく。

「ああ……恥ずかしい……」

抗わずそっと腰を浮かせて協力しながらも、キョウコは羞恥心を失ってはいなかった。ぽっと頬を染めた恥じらいの表情に誘われるように、足先からその布切れを抜き取ってしまうと、シンジはどうとう全裸になった妻の体を再び組み敷き、じっくりと眼を楽しませた。

「キョウコ……綺麗だ……」

抜群のプロポーションとしっとり象牙色に輝く肌を併せ持つ妻が、一糸まとわぬ女体を無抵抗に横たえ、彼に捧げるかのように差し出している。羞恥と興奮とで桜色に上気した体は、来るべき行為を待ち望んで震え、むせかえるような熟れた女の色香を漂わせていた。

121 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2007/01/08(月) 00:28:03 ID:cXnA8zIe

組み敷いた女体を眺め回して生唾を飲み込むシンジの視線は、ともすれば豊かな腰つきに吸い寄せられた。

その中央に息づく黒々とした影は、男の精を吸い取り、見事な下ばえを形成していた。

けっして剛毛ではない繊細な縮れた毛だが、量が多いのだ。だが十分に手入れをしているのだろう、余計なところには生えておらず、邪魔にはならない。さわさわと陰毛を撫で付けてやると、キョウコの体は焦れたように、もっと敏感なところへの愛撫を望むように腰をひくつかせた。

そしてその下に息づく女の秘奥は……キョウコの体はマナカのそれとはまったく違い、すっかり成熟した媚肉だった。ぷっくりと肉厚の大陰唇を押し広げると、真っ赤に熟れきった花びらが恥ずかしく覗き、その奥からとめどなく愛液が漏れだし、つーっと内股を垂れてゆく。

そっと指を挿入すると、男根とは比べ物にならぬ小さなそれを、キョウコの媚肉が熱く包み込み、絞りあげてくるのだった。

まさにそれは、今が盛りと咲き誇る大輪の花びらであった。

「ああ……あなた、もう、もう……」

「うっ……」

指先で愛され続けて焦れたのか、キョウコもまた手を伸ばし、トランクスの上からそっとシンジの男根に愛撫を加え始めた。いきり立った肉棒への微妙な刺激と、ぱっくりと開いて彼を誘う女体に、シンジの我慢も限界に達した。

トランクスを脱ぎ捨てたシンジは、キョウコの腰に熱く燃えたぎったそれをあてがう。

期待をこめてぽっと上気した顔で見つめる妻に

「キョウコ……」

と万感の思いで呼びかけると、シンジはぐいと腰を前に突き出し、花芯のなかに身を沈めていった。

「あああーっ……」

待ち望んでいた熱いものが、一気に侵入して来る。貫かれたキョウコの口から、歓びの声がほとばしった。

キョウコの体はごくわずかな抵抗感とともに、にゆるん、という感じでシンジの男根を受け入れた。そして一旦受け入れると、熟れた肉壺はそれ自体が生き物であるかのように、決して離すまいと熱く絡みつき、締め上げてきた。

(や、やべえ……このままじゃ、保たねえ……)

啞え込まれたペニスから流れ出る快感が、全身を侵食していく。

(突かない、突こう、突いて、突く、突くとき、突けば、突け……カ行五段活用……)

シンジは慌て気味に、現代国語の内容を思い出し——目の前でいい声で鳴いている女性に教わったものだ——時間稼ぎを試みたが、所詮長くは続きそうになかった。

一人で果てる前に、せめて妻にも歓びを。そう思ったシンジは、指で小さな桜ん坊を探り出しつつ、腰の前後運動を開始した。

「あっ、あっ、あああ……」

腰を前に出すごとに、コツンコツンと先端に何かが当たる感じがする。肉芽を撫で付けるごとに、女の体が震え、跳ね上がる。そのたびにキョウコは甘い声を漏らし、眼を閉じてシーツを握り、快感に耐えるのだった。

あの真面目で清楚な加藤先生を、俺が狂わせている！

シンジはこの上ない征服感を味わっていた。もはや彼の絶頂はそこまで来ていた。

122 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2007/01/08(月) 00:30:17 ID:cXnA8zIe

だが、キョウコはまだ満足してはいなかった。

「あなた……」

キョウコは妖しく微笑むと、シンジの体に腕を回した。シンジもそれに応え、二人の体が密着する——そこで、キョウコは寝返りを打った。

「うおっ……」

二人は結合したまま、今度はシンジが仰向けになり、その上にキョウコが女性上位で位置を占める形になった。

その体勢から、今度はキョウコが主導権を握り、腰を振り始めたのだ。

すると——なんという違いだ！

男性の弱点も己の弱点も知り尽くした成熟した女の動きは、啞え込んだ肉棒を蹂躪し可愛がりつつ、自らも最大限の快感を得るべく、段差を膣の上壁へこすりつけ、先端で子宮を突つかせ、的確に弱いポイントへの刺激を引き出した。これに比べれば、先ほどのシンジの腰の動きなど、ただ闇雲に突いているだけだった。

「う、うおっ……キョ、キョウコ……」

必死に耐えるシンジの目前に広がった光景もまた、魅惑的だった。

羞恥をかなぐり捨てて自分の上にまたがり、漆黒の髪を振り乱して、狂ったように腰を振り、眼を閉じて快楽を、そして彼の肉棒を貪り続ける、憧れの美人教師！

「あっ、あっ……あんっ……」

見事なまでに豊かな乳房がゆさゆさと揺れている。シンジが手を伸ばして乳首を捉え、

転がすと、キョウコは身をよじって可愛い声を漏らしながら、さらに腰を振り続けた。するとシンジの男根がツンツンと子宮を突き上げ、そのたびにそれを啜え込んだ肉壺がキュッキュッと締まり、シンジを心の底からとろけさせるのだった。

いまやキョウコは、輝くばかりの肌にじっとり汗をにじませ、全身を反り返らせて若くたくましい肉棒を啜え込み、存分に味わっていた。幾重もの花びらからは蜜が溢れ、時折、シンジの腰にぽたりぽたりと滴りを落としていた。

まるで食虫植物が、分泌液で誘って昆虫を捕らえては徐々に花卉を閉じて締め付け、溶かして栄養を吸い取るように、キョウコの女体はシンジの男性自身を捕らえ、吸い付き、締め上げ、まとわりついて、熱く溶かしていった。

「キョウコ……もう、もう俺……」

あまりの快感に、シンジはあっという間に昇り詰めていく。

「ください、あんっ……ください、このまま……ああ……」

キョウコは体を倒し、全身をシンジに密着させた。胸に感じる豊かな乳房の量感、押し付けられたまま細かく動く乳首の感触、全身で感じられるぬめぬめとした肌とその温もり、そしてじっとりとした熟れた女の体臭。至近距離からシンジの眼を覗き込む、漆黒の大きな瞳、そしてクチュクチュとかすかに響く淫靡な音。キョウコのすべてが、シンジの五感を圧倒的なまでに支配した。

「お、お、おおうっ……キョウコッ……！」

やがてシンジの体は硬直し反り返った。肉棒がビクビクと断末魔のよううごめき、その先端からピュッピュッピュッと熱い液体が弾け出る。シンジは妻の体内に、思いのたけを思い切りぶちまけた。

「あーっ……」

キョウコもまた、ほとばしった男の精のすべてを子宮で受け止め、体をピンと硬直させたのだった。

123 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2007/01/08(月) 00:32:36 ID:cXnA8zIe

精を一滴残さず妻に捧げつくしたシンジは、仰向けになったまま動けなかった。

(正常位で味わった征服感など、俺の思い上がりでしかなかった……どう見ても、力尽きて降伏したのは、俺のほうだ……俺の妻はなんて、なんて体をしているんだ……)

ともすれば意識が飛びそうになるのをこらえ、『素敵だったよ』くらいは囁いてやらねば、とキョウコのほうに顔を向けたシンジだったが、あっさり先手を取られた。

「あなた……嬉しい、久しぶりなんだもの……」

彼女の大きな瞳は潤んでいた。

キョウコの体がまたしてもシンジの上のにし掛かってくる。

ちゅっ。

そっと二人の唇が触れ合った。

「……わたし、昼間は良妻賢母であるようちゃんと頑張りますから……だから、夜は……一度は上気が収まりかけていたキョウコの顔が、またぽっと真っ赤になった。

「夜の私はまだ、女でいたいんです……だから……その、また抱いてください、ね？」

シンジは夢心地の中、出来ることなら、

「もちろん、喜んで！」

と大声で叫びたかった。だが、彼はようやく息は整ったものの、精魂尽き果て、というより搾り取られ、話すのも一苦労だった。

しかも、意識の暗闇がすぐそこまでやって来ていた。

「も……ち……ろ……」

そこまでどうにかささやいたところで、シンジの意識はすっと遠のいていった。

124 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2007/01/08(月) 00:33:44 ID:cXnA8zIe

「お兄ちゃん、朝だよ～」

翌日の朝。階下からのカナミの声に、シンジは目を覚ました。

またしても、股間にテントを作って。

「……夢か」

これまた、いい夢だった。

シンジは今日の一限が国語だったと思い出し、教壇に立つ加藤先生の洗練された立ち居振る舞いを思い描いた。

(俺、もしかして指されても立てないんじゃないか?)

不安にかられながらも、彼はベッドから抜け出した。容易に鎮まろうとしない股間をなだめすかして着替えをしながらも、彼は先刻の夢を反芻しないではいられなかった。

(……やっぱり、加藤先生は最高の女性だった……)

学校で見せてくれる楚々とした笑顔と、ベッドで見せてくれた愛欲にまみれた表情を脳裏に描き比べ、シンジはそのギャップに改めて魅了された。

(……だけど、俺にはさすがに濃厚すぎるかなあ。でもやっぱり清楚な女性はいいい……それに、結婚もいいな……もう少し若いところだと……よし、今夜は……)

シンジの夢はまだまだ続きそうだった。

125 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2007/01/08(月) 00:35:05 ID:cXnA8zIe

以上。

タイトルは「シンジの夢十夜 ～第三夜 加藤キョウコ編～」で。

今回は29歳の人妻、加藤キョウコ先生がヒロインですが。

マサママをヒロインにした「水入らずの夜」も結構楽しんで描けた記憶があります。

結局、私は熟女が好きなのだろうか？

……いや若い子も大好きですがね。

次回は、若くて清楚とくればこの人、ケイ編の予定。

例によって気長にお待ちください。

126 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/08(月) 01:07:58 ID:0N1rVaW/

トマソン氏G J ! ! ! ! ! ! !

最高っス ! ! ! !

まさかこんな展開でこられるとは！

正直予想してませんでしたよ

ちようど>>116 で加藤先生の肢体を妄想してた直後だっただけに

とても艶かしい彼女が堪能出来ましたw

これでしばらくは暮らしていけそうです (何が

127 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/08(月) 01:20:07 ID:H6m6eu8d
GJ

トマソン氏のSSはエロくてナイス

128 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/08(月) 03:05:06 ID:HJfh0OGF
トマソン氏 GJ!!

>>127

エロくてナイス

略してエロス!

129 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/08(月) 15:43:13 ID:zYzHdqAT
トマソン氏 G J!!

最高にエロスでした!

次はケイちゃんか…(*^A`)ハアハア

130 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/08(月) 23:12:46 ID:KSvwwqD83
WG J!!

131 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/09(火) 22:17:00 ID:YzIXh96x
あかほん本スレ、単行本発売前に落ちてモタ orz

132 名前： 名無しさん@ピンキー 投稿日： 2007/01/09(火) 22:21:32 ID:yuwl8BNZ

TBの3人がイっちゃったよ(^`A`^)

133 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/09(火) 23:31:37 ID:PYkh0sMg
>>131

ヒント：板更新

134 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/09(火) 23:50:59 ID:YzIXh96x
>>133

ぬががが、別板で同じ体験しときながらまたこのはやとちり……

お詫びに皮を……腹を切るッ、スマヌ

135 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/10(水) 06:44:04 ID:f2vcG8LT
>>134

お詫びとしてSSを投下するなら許してやらんでもないw

136 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/11(木) 02:19:33 ID:0ObsE+Rd
今更だが、あかほんはもう少しだけでも連載続いてほしかったな

137 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/11(木) 02:23:23 ID:3312RP58
ひいきではないが今のマガジンの中では面白い方だったと思う

138 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/12(金) 00:27:50 ID:V1hLN58y
あかほん第一姦にして最終姦、発売間近

139 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/12(金) 12:37:10 ID:3KUspd2Q
>>138

卑猥!

140 名前： 名無しさん@ピンキー [age] 投稿日： 2007/01/12(金) 17:26:14 ID:SAb6t1qs
2ちゃん閉鎖したらこのスレどうする?

141 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/12(金) 18:14:55 ID:V1hLN58y
役目を終えたということで終了してもよいんじゃないか
つまり「卒業」

残念ではあるけどね

142 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/12(金) 21:07:20 ID:r6A/JIbp
ここは2chじゃないし、ドメインなんぞ他にいくらでもある。

そもそも閉鎖するわけないだろうが。

あと age んなカス

143 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/12(金) 23:52:28 ID:AbVEbtfH
閉鎖したとしてもまたどっかで会うかもしれんしな。

いい雰囲気で作ってきたし、誰かがそういう場を作って自然に集うかも試練。

なんだかんだで消えないと思うけどね。

77-7

144 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/13(土) 00:13:49 ID:+wzc8XdQ
ドコかに移住したいな俺は。俺の勝手な意見だが、この稀なネ申スレとネ申職人さんに会えなくなるのはかなりつらい

145 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/13(土) 00:46:00 ID:FrZ0/7no
そうか、2ch と BBSPINK は別扱いだったっけ

146 名前： 名無しさん@ピンキー 投稿日： 2007/01/13(土) 01:34:23 ID:Eq6JRe2p

というより 2ch の所有者は法人だから大丈夫じゃね？

147 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/13(土) 08:42:57 ID:UnIVhJr6
まあ大丈夫だよ

148 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/13(土) 14:55:52 ID:1SeG9ljs
さてそろそろ郭氏の SS が読みたいのだが

149 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/13(土) 16:34:31 ID:7ziwPRiv
前スレの埋め立てシリトリが、やたらと面白い。

すでに1つの作品として成立しているし、保管庫入り希望！

150 名前： 541 改めルーク ◆Wixlu9loZM [sage] 投稿日： 2007/01/13(土) 16:40:19
ID:SFV3MPmE

お久しぶりです。妹&濱中イカセロワイアル（タイトル未定）第1話ようやく完成。
投下してもよろしいでしょうか？

現在漫喫につき返事はお早めに返していただけるとありがたいです。

151 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/13(土) 16:47:17 ID:/gZ2cd83
wtkk しながらまってるぜ！

152 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/13(土) 16:52:16 ID:1+/Lx6Fy
>>150

気にせず投下してください。

以後は他の作家さんの投下途中とかでなければ、わざわざ断りを入れずに

「投下します」だけでいいと思いますよ。

では、期待して待ってます。

153 名前： 541 改めルーク ◆Wixlu9loZM [sage] 投稿日： 2007/01/13(土) 17:02:47
ID:SFV3MPmE

1 2006 6/9 19:10

「…は？」

あまりに唐突な小宮山のその発言は、ここは夢の世界かとアキに一瞬だけ錯覚を起こさ

せた。

「イク」という言葉と「合う」という言葉がどうしても頭の中でつながらない。まさかここにいるみんなで体を重ねて、「世界で最も多く的人数が同時にイッた」などというとんでもないギネス記録でも作ろうというのか。

ありえない話ではなかった。授業中ですら男子生徒でさえひいてしまうほどの下ネタを抵抗なく披露し（小宮山ワールドなどという呼び名がついたほどだ）、日常生活でも何かあれば周りの人間にセクハラまがいの行為をする。そんな小笠原高校が誇る変態女教師はあまりに訳の分からない事をさらりとやってのけた。

「もう一回言うわ。これからみなさんには…」

「ふざけるのもたいがいにしてください」

小宮山の言葉を遮って、マナカが声を上げた。下ネタ以外の冗談を言うことの少ないマナカの声が、怒りに満ちていた。

元々マナカは小宮山にいい印象を持っていないらしく、事あるごとに何かと突っかかる。小宮山もまた売り言葉に買い言葉で返すものだから、二人の間にはしょっちゅうただならぬ空気が漂う。

それをたまたまよく目にするアキはその場の空気に怯えてしまうほどだった。

「はあー、黒田さんは相変わらず頭が固いわねえ。ついでに胸も固いのよね。まあいいわ。これからあなたたちにこれがおふざけでもなんでもない証拠を見せてあげる」

余計な一言にマナカの目つきがより一層きつくなかったが、小宮山はそれを気にすることなく自分の後ろに立っていた女に目配せをした。女はそれを受けて先ほど入ってきた出入り口のほうに移動をすると扉を開け、

「奥さん、入ってきてもいいですよー」と呼びかけた。

次に飛び込んできたのは、目を疑う光景だった。小宮山より少し上の年の程と見受けられる女が彼女と親子ほど年の離れた老人を引きずるようにして現れた。

男の首にはカナミやアイに装着された首輪と同じ首輪がいやらしい輝きを放ちながら存在していた。いや、そんなことよりアキを驚かせたのは女が放った奥さんという言葉だった。

まさか、この二人は…。

「紹介をするわね。この方はひだまり幼稚園の園長先生の長瀬ハジメ先生と奥さんのミナコさんよ。そりゃー、私も最初に知ったときは流石にびっくりしたわよ。

老人の夫だったら、夜の生活が勤まるか怪しいものね。じゃあ、早速だけどみんな長瀬先生に注目して」

そういうと、小宮山は白衣のポケットから何かリモコンのようなものを取り出した。それを遠慮なくハジメの首輪に向けると、数回ボタンを押した。

聞きなれないピー、ピー、という電子音が辺りに響いた。10秒ほどの周期でその間隔は狭まっていて、それが3回繰り返される頃には全員がハジメの首輪に視線を向けていた。

154名前： 541改めルーク ◆Wixlu9loZM [sage] 投稿日： 2007/01/13(土) 17:06:06

ID:SFV3MPmE

その首輪の前方にあるライトが赤く点滅し、そこからまるで警告音のように電子音が発生されていたのだ。

「あと20秒ぐらいで首輪が作動するわ。みんなよく見ておくのよ」

その20秒はあっという間に訪れた。警告音の間隔がなくなり、そしてその2秒後にはハジメの全身が首輪から一瞬にして現れたロープに亀甲縛りの要領で縛られていた。

口がハンカチで塞がれるというオマケつきで。そして、ハジメの体が支えを失ったかのように崩れ落ちた。

「なっ…」

部屋が一瞬にしてざわついた。あまりの光景にシンジやマナカでさえもショックを受けていたし、アイに至っては小さく悲鳴を上げていたほどだ。それをなんともおかしそうな表情で小宮山は眺めると、ずい、と一歩前に身を乗り出した。

「これからの皆さんも行動次第ではこうなるわ。これで分かったでしょ。自分がこれからどうなるか」
とりあえずうなづく事しかできなかった。シンジやアイは顔面蒼白になっていたし、マナカの表情も優れない。
ただ一人、シンジの友人である新井カズヤのみは股間を押さえ恍惚の表情を浮かべていたが。

「じゃー、さっそくルール説明をするわね。これから皆さんには最後の一人になるまでイカし合ってもらおうの。
この場所を一人ずつ出発してもらって、試合が始まるわ。そして、出発するときには一つずつデイバックを受け取ってもらうんだけど、
その中には食料と、水と、ここの地図とかそんな必要なものが入ってるの。出発したらあとの行動は自由。どこに行っても構わないわ。
それで、ここからが重要よ。あなたたちの脱落条件なんだけど、男子と女子でそれぞれ違うから注意してね。男子は射精してしまったら、女子はアナルを奪われたらアウトよ。もしそうなったらコンピューターが識別してあなたたちの首輪に電波を送るの。そうすると…」

小宮山がハジメの方を向いた。満面の笑みを称えた、嫌な表情だった。

「その場でこうなるわ」
また周囲がざわついた。小宮山の目を盗んで周囲を見渡すとほとんどの人間が呆然となっている。

ただ、カオルや最前列のメガネの少女だけが状況を理解していないようで、それが逆に冷静さを保っているように見えた。

「それで、この会場についての説明なんだけど…」

155 名前： 541 改めルーク ◆Wixlu9loZM [sage] 投稿日： 2007/01/13(土) 17:12:02

ID:SFV3MPmE

そこまで小宮山が口にした時、マリアが動き出した。

ホワイトボードの脇に丸めてあった大きな模造紙を中村と二人がかりでホワイトボードに貼り付けた。

「これが今回の会場よ。小笠原高校の近くにあるド○キホ○テが最近改装工事に入ったのはみんな知ってるわよね。

そこが改装した後どうなるかなんだけど、なんと、そのビル一つ丸々アダルトグッズショップになることになりました～。

そこであなたたちには話題づくりも兼ねてここでイカし合いをしてもらいます。

店の準備はほとんど整ってるからアダルトグッズに囲まれてのイカし合いよ。あ～羨ましいわ～」

そんなに羨ましいならアンタが参加すればいいじゃないか。ここにいる約半分の者はそう思っているだろう。

アキは勝手にそれを代表して叫びたい衝動に駆られた。

「それで、そのルールなんだけど、出発したらどこに行ってもOKていうのはさっき言ったわよね。

けれど、それに例外があるわ。試合中に私達が1時間に1回流す放送で、それまでの脱落者と禁止エリアっていうのを放送するの。

もし指定された時間以降にエリアに残っていたり進入した場合には…」

そこから先の見当はもう付いていた。

「悪いけど、ルール違反としてやっぱり長瀬先生と同じ目に遭ってもらわ」

やっぱりな。こういう変なカンだけが当たるようになってしまった自分がアキは少しだけ嫌になった。

「禁止エリアは一度設定されたら試合が終わるまで解除されないから気をつけてね。

地図を見れば分かるんだけどエリアの数はビルが5階建てで各階3×3の全部で45エリアよ。

あと、この場所がある5階のB-1エリアは全員が出発して5分後に禁止エリアになるの。

それと首輪が発動する条件はもう一つ。もしもあなたたちがイカし合いを拒否して6時間誰も脱落しないなんて事になったら…」

ここから先の予測も出来ていた。

「全員の首輪が発動するわ。優勝者はなしよ」

やっぱり。

「ただし」

その言葉にアキは思わず顔を上げた。

「それを防ぐため、今回は特別ルールを採用したの。3時間脱落者が出なかった場合に限り、特別に私とマリア先生が参加するわ」

ひっ、と思わず小さく悲鳴を上げ、あつさった。その様子に不信感を覚えた何人かがアキの方を向いたが、そんなのは気にならなかった。

マリアが、ペ〇ちゃん人形のように舌を出し、嬉しそうな表情でこちらを見ていた。今にも襲い掛かってきそうなその表情に、恐怖を感じずにいられなかった。

間髪おらずに最初の一步を踏み出したマリアを加藤が羽交い絞めにしてどうにか止めていた。

「じゃー、次は武器の説明なんだけど…」

そのときだった。中村の「そこ！私語をするな！」という怒声と共に音を立てず何か小さな物体が空気を切り裂き最前列の少年に向かって飛んでいった。

おそらくアイと何か話をしようとしていたのだろう。だが、アキの視線がそれを捕らえる頃には同じく最前列の金髪の少女が素早い動きでそれを一瞬にして受け止めていた。

「な、な、な…」

その「正体」を目にした少女が、口をパクパクさせその場に立ち尽くしていた。

何人かの者が何が飛んできたのかを確かめようと立ち上がり、同様に呆然となっていた。

「なんて物を投げるんですかー！！」

「先輩それ私のパクリじゃないですか！！」

甲高い少女の声とアイの声が重なった。アキも思わず立ち上がった。その物体には、白いチョークのような外見に紐が一本生えた、月に一度嫌でも訪れてしまう女特有の現象の際に多くの人間がお世話になるものだった。

そのあまりの光景にカオルですら絶句し一步後ずさるようにして少しでも距離を置こうとしていた。だが、肝心のそれを投げた中村本人は至って冷静だった。

「だめよミサキ〜。いくら彼氏の前だってそんなもの受け取っちゃー。それに触れたら失格よ。だからアンタはもうここで失格ね。さすがに長瀬先生のようにほしないけど」

中村のその言葉に少女はただただ立ち尽くしていた。しばらく間をおいて弱弱しい「…分かりました」という声と共に音もなく席に着き、その物体を誰の目にも触れないようにポ

ケットの中へと閉まっていた。

その一部始終を目にしたはずの小宮山は顔を綻ばせ、ニヤニヤと意地悪な笑みを浮かべていた。

6 / 9 19 : 14 天野ミサキ 脱落

【残り15人】

156 名前： 541 改めルーク ◆Wixlu9loZM [sage] 投稿日： 2007/01/13(土) 17:13:14
ID:SFV3MPmE

投下終了。相変わらず改行が長くなってしまったw

157 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/13(土) 18:30:00 ID:jbGL8IZf
なぜミサキは脱落したんだ？

158 名前： 541 改めルーク ◆Wixlu9loZM [sage] 投稿日： 2007/01/13(土) 18:35:23
ID:SFV3MPmE

うわっ失敬！肝心な部分を投稿してねえ！

155は忘れてください！

159 名前： 541 改めルーク ◆Wixlu9loZM [sage] 投稿日： 2007/01/13(土) 18:37:01
ID:SFV3MPmE

あれ、全部投稿してた。158こそ忘れてくださいw

160 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/13(土) 20:24:02 ID:FrZ0/7no
乙&GJ！

161 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/14(日) 18:13:19 ID:NbSfDPOu
541 改めルーク氏、乙でございます！

続きに期待しておりますです。

162 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/15(月) 15:46:28 ID:Wp71muZt
ルーク氏乙

ルークと言えばスターウォーズしか連想できない俺

163 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/15(月) 16:55:56 ID:mQx6W+u4
ルーク氏 GJ！

>>162

俺は悪くヌエーな親善大使が思い浮かんだ俺テイルズ厨乙

164 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/15(月) 18:31:48 ID:KEpvInmE
テイルズか……。テストに2でバルさん2戦目に勝てなくてやめたっけか

165 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/15(月) 19:42:56 ID:gh1/e3C/
<http://comic7.2ch.net/test/read.cgi/csaloon/1168856955/1-100>

166 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/15(月) 22:00:48 ID:7cwx5YoM
前スレ埋めしりとりで鈴木君がwww

167 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/15(月) 23:32:32 ID:QeHtR4Z4
郭氏が降臨しないな…元気だろうか。

168 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/16(火) 18:19:58 ID:n+OCc7Ch
まあマターリと待ちませう

169 名前： 名無しさん@ピンキー [age] 投稿日： 2007/01/16(火) 20:17:19 ID:gxlHgCOH
アヤナ分が不足してきた

170 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/16(火) 20:36:55 ID:vhzrScQO
>>169 それでは、あかほんスレより。

858 : 名無しさんの次レスにご期待下さい : 2007/01/15(月) 23:51:30 ID:Yp48oDoe

- 1位 142票 藤崎あかり@ヒカルの碁
- 2位 141票 若田部アヤナ@女子大生家庭教師濱中アイ
- 3位 73票 松岡美羽@苺ましまろ
- 4位 56票 ピノコ@ブラック・ジャック

アヤナ・・・orz

171 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/16(火) 22:07:39 ID:NrrIaVfa

俺も郭神は心配なんだ。正直一番好きな作家じゃないんだが、
郭神がいるってだけで安心感がある。エースと言われる所以か・・・
いまさらだけど氏の奮闘がここを支え続けたと痛感するぜ。

172 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/17(水) 07:42:58 ID:vEYOhO5U

二人目のお子さんができたそうだから夫人ともども忙しいんだろ、多分>郭氏
黙って来て黙って去るのが職人のルールとはいえ、
二年近く投げてるこのベテラン陣は消えるときは必ず一言残すような気がする

心配してもしゃーないから気長にいこうや

173 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2007/01/17(水) 21:03:03 ID:W5dr2fru

トマソンです。

ここ数日、アクセス規制に引っかかって投下できませんでした。
これってプロバイダ単位で規制されるのでしょうか？

さて、シンジの夢十夜、その第四夜。
ケイ編です。

では投下。

174 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2007/01/17(水) 21:03:39 ID:W5dr2fru

「不束者ですが、よろしくお願ひします」

きちんと正座し三つ指をついて、木佐貫ケイ、いや今は城島ケイが、しおらしくシンジに頭を下げた。

本日めでたく華燭の典を挙げた二人は、初夜を過ごすため、ホテルのスイートルームの一室にいた。

純白のウェディングドレスを身に纏ってベッドの上に正座して三つ指をついているあたりが微妙にズレたシチュエーションだったが、それにしても……肩も露わなドレス、手袋、ケープ、ストッキングなど、身に着けるもの全てを純白に統一したケイは、一片の穢れも感じさせぬ清潔な美しさに満ちていた。

「こちらこそ、よろしく。それにしても、ケイ……綺麗だよ」

「城島君……じゃないね、アナタ……だよね？」

照れたようにはにかむケイ。疑問が浮かぶとすぐ正直に口にしてしまうのは、昔から全く変わっていない。

「でもあなた、ウェディングドレスを着てくれ、なんて、どうして？ 無理ってレンタルを一日、伸ばしたんだよ？」

このドレスを着たところは、昼間ゆっくり見てくれたじゃない？」

「それはね……」

ベッドに座っていぶかしむ表情のケイを見つめながら、既にシンジは心臓を高鳴らせていた。とうとう、ケイの体を心行くまで楽しめるのだ。

このときを、どれだけ待ち望んでいたことか！

彼とケイが付き合いはじめてから、もう一年以上の時間が過ぎている。

もちろん、過去何度もシンジはケイに体を求めた。だがそのたびに、どこか天然っぽいくせに固くて真面目なケイにスマートにかわされ、ようやくのことでBまで許してもらっただけだった。

要するに、今の今までオアズケを食っていたのだ。

付き合い始めたときには、「もっと知り合ってからにしましょう」と逃げられた。

そろそろいいかと思った時には、「結婚してくれるなら、ね？」と避けられた。

婚約したときには、「結婚したらいいよ」とかわされた。

そして今日、ようやく本当に結婚式を挙げられたのだ。改めて考えると、なんだかすっぱりケイのペースにはまっているような気もするが、それでも——ようやくケイと結ばれると思うと、シンジの鼓動が高まるのも自然な成り行きというものだろう。

175 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2007/01/17(水) 21:04:36 ID:W5dr2fru

「それはね。一生に一度のことを迎えるのに、その姿で居て欲しかったんだ」

「え……嬉しいけど、結婚式は昼間済んだんだよ？」

「式のことじゃない……お前との、初めての夜のことだ」

「えっ……きゃっ」

ポッと赤くなったケイを、シンジは優しくベッドに押し倒し、唇を奪った。

「むっ……むっ……」

ゆっくりと濃厚なキスを楽しんだシンジは、やがて顔を上げ、ケイをじっと見つめた。

短めのおかっぱ頭は知り合ったころから変わっていない。少し化粧がうまくなって、より綺麗になっているが、恐がりなところも、涙もろいところも、シンジが惚れた高校生のころからそのままだ。

もちろん、シミひとつない小顔のアクセントになっている、眼のそばの泣きボクロも、上目使いでシンジを見つめる、むしゃぶりつきたくなるような瞳も。

「ケイ……」

「だ、駄目……このドレス、レンタルなんだよ……」

ゆっくりと胸に手を伸ばしたシンジだが、ケイの抵抗は激しかった。

「ドレスが汚れたら、買い取りさせられちゃうよ？」

心の底から残念だったが、シンジはおとなしく手を引っ込めた。

無垢を象徴する純白のウェディングドレスを思い切り汚したかったのだが、そうすれば給料何ヶ月分かが吹き飛ぶのだ。

「ごめん……それじゃあ……ちょっと動かないで、そのままでいてね」

「えっ……あなた、何を……きゃっ」

シンジの手は、立てば床を擦る長さのスカートの裾をつまんだのだった。

「動かないで……」

「え、えっ…駄目、駄目だよ……」

はやる気持ちを抑え、ゆっくりとシンジの手がロングスカートをめくっていく。ほんの少し上ずらせたところでその下に眼をやると……残念なことに、もう一枚、いくらか厚めの生地があった。めげずにもう一枚めくると、また一枚。

「……いったい何枚あるんだい？」

まだ顔を赤らめているケイだったが、シンジの子供っぽい振る舞いと情けない声にこらえきれず、くすくすと笑ってしまった。

「ふふ、ウェディングドレスのスカートって多重構造なのよ？ でも、もうお仕舞い」

「それじゃ……」

三枚目をめくると、とうとうこれも純白のストッキングに包まれた、すらりと伸びた脚が覗いた。

「あ……」

恥ずかしそうに耐えるケイのスカートを三枚まとめて、シンジは捲り上げていった。

目を血走らせ、すらりと細い脚に嘗めるような視線を浴びせつつ、ゆっくりと。やがて膝上でストッキングが途切れると、アイボリーに輝く太腿と、その上に走る、ストッキングを吊ったガーターベルトが目飛び込んでくる。

太腿の付け根まで覗いたところで、ケイが抵抗を始めた。

「だ、駄目……脱ぐから、離して……シワになっちゃうよ……」

「もうちょっと……もう少しなんだ」

さらに少しだけ捲ると、これも純白のショーツの下端、微妙に膨らみをたたえたところがちらりと覗き、シンジはそこに食い入るような視線を注ぎかけた。

「駄目だったら！」

ケイの声が厳しくなり、しぶしぶシンジは手を離した。

「ごめん……でも……」

「もう、馬鹿……脱ぐから、待っててね」

(……オアズケを命ぜられた犬はこんな気分なのかな?)

そんなことを思いながら、立ち上がったケイがおずおずとドレスを脱ぎ、専用のコスチュームに丁寧に掛けるまでをシンジは見守った。

176 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2007/01/17(水) 21:05:29 ID:W5dr2fru

「そんなにじっと見てなくても、いいじゃないの」

ドレスを脱ぎおえて口を尖らせるケイの姿に、シンジはのどがカラカラになった。

上は肩紐なしのショートビスチェ、下はなんとも洒落た刺繍のなされたショーツに太腿までの長いストッキング、それを吊るすガーターベルト。華奢な体をエレガントに隠す下着は、その全てが純白だった。ストッキングとショーツの間の輝くような太腿にうっすら静脈が透けて見えるなか、ガーターの紐が走っているのがなんともエロチックだった。

羞恥を含んで立ち尽くすケイを、シンジはゆっくりと抱き寄せる。

「ケイ……おいで」

「あ……」

ベッドに腰掛けたシンジは膝の上にケイを座らせると、首筋にキスの雨を降らせつつ、肩口から愛撫を加えていった。片腕で腰を抱きこちらもさわさわと脇腹を撫でながら、肩を撫で回していたもう一方の腕は、胸を狙ってそっとビスチェの中に侵入していく。

「あっ……だ、駄目……」

口ではそう言っている、ケイは逆らいはしなかった。体をシンジの愛撫に任せ、次第に荒くなる呼吸を悟られまいと耐えながらも、すこしづつ体を侵食し始める性感に、

ケイはもじもじと身をよじり続けた。

やがてシンジはケイを後ろから抱きしめたポーズで、両手をビスチェの中に突っ込み、両方の乳房を包んだ。やわやわと揉んでやると、吸い付くような柔肉が掌にしたがって形を変えているのが感じられ、返ってくる弾力と温もりに、シンジは夢中になった。

「ああ……」

たまらずケイもビスチェの上から胸を押さえ、シンジの手を押さえようとするが、シンジの動きは止まらなかった。

「う……」

耳たぶを優しく噛まれたケイが、甘い声を漏らす。同時にシンジの指が乳首を探り出し、優しく弄び始めた。コリコリと転がしてやると、膝の上のおやかな体がピクンと反応する。初々しい反応を楽しみつつ、シンジは片手で胸を揉み続け、片腕をケイの太腿に移した。

「あ……だ、駄目……」

白磁の太腿をゆっくりと円を描くように撫で上げると、ケイは恥ずかしそうに身をよじって手で股間を隠してしまった。

シンジはその手を優しくどかせると、ぴっちり閉じた脚を無理に開かせはせず、だが断固として、微妙なあたりに指先を忍び込ませていった。

「あああっ……」

そこが既に微妙に湿っているのに力を得たシンジは、薄い布一枚を通して割れ目と思われるあたりを丹念になぞり、柔らかい媚肉をそっと揉みこむ。時折ぴくぴくと震えるケイの可憐な反応を楽しみつつ、やがてシンジはグッショリと濡れたショーツの中に指を忍び込ませていった。

「ああ……」

じかに柔肉に触れた指先に全神経を集中し、やわやわといじくると、ケイの体が弾かれたように震え、甘い吐息がシンジの耳にかかる。それがまた彼の興奮を掻き立てた。

177 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2007/01/17(水) 21:06:08 ID:W5dr2fru

もう、十分だろう――。

濡れ具合からそう判断したシンジはケイの手を取った。

女体を指先で愛され続け、目を閉じて押し寄せる性感に耐えていたケイは、突然手を握られて、はっと目を開けた。

「……あなた？」

シンジはトランクスの前から取り出した男性自身に、ケイの手を優しく導いた。

「ケイ……触ってごらん」

「あ……」

熱く張りつめたそれに触れ、ケイは驚きの声を上げた。

ケイは物心ついて以来初めて、成熟した男根を見たのだ。妄想ゆえに実物よりも 20% ほど増量したそれは、ケイにはまるで化け物のように思えた。いきり立って血管を浮かびあがらせ、自分の顔を射すくめるように屹立する夫のペニス！

「これが……」

それがやがて自分の体の中に入ってくると思うと、ケイは信じられない思いだった。恐怖もまだ少し残っている一方、たっぷりといじられ、ほぐされてジンジンと疼く体の芯が、さらにかっとな熱くなっていくのがはっきり感じられた。

「優しく、撫でてごらん」

「は、はい……」

ケイの掌がおそろおそろ男根を握り、そっと上下し始めた。暖かくたおやかな手の微妙な圧力にあっという間に昂ぶりを覚え、たまらなくなったシンジは、ケイの背中の中のホックを荒々しくはずし、ビスチェをむしりとった。

「あっ……」

上半身を全て晒してしまい、思わず男根から手を引っ込めて恥ずかしそうに胸を隠すケイの体を、シンジは優しくベッドに押し倒した。続いて、大きな楕円形のシミを浮かび上がらせているショーツの縁に指を掛け、一気に剥きおろす。

「あ……」

無垢の体を覆う最後の一枚を奪われ、ケイは羞恥に身を硬くした。

178 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2007/01/17(水) 21:06:43 ID:W5dr2fru

ガーターベルトだけを身にまとった美しい裸身を、シンジはとっくりと眺めた。

「綺麗だ……」

シンジはほかに言葉を知らなかった。

ケイの体はなんともたおやかだった。日本人女性の平均よりもぐっと華奢で、乳房も決して大きいというわけではない。だが、このすべすべと吸い付くような肌はどうだ、この恥じらいを含んだ仕草はどうだ！

元は象牙のように輝く肌が、今はさんざんに愛撫を浴びて桜色に上気し輝いている。その中央にある黒い影は、特に手入れはしていないのだろう、ごく自然に縮れた茂みを浮かび上がらせ、白い肌の中でアクセントを放っていた。脇腹を、乳房を、臍を、太腿を優しく撫でてやると、撫でたところだけがさらにほんのり上気して赤みを増してゆく。

シンジは、ケイのほっそりした両脚を優しく割って腰を落ち着けた。どこもかしこも艶やかな肌がぽっと上気しているなか、シンジの目はやはり股間に吸い寄せられた。

今や両脚を大きく割られたケイの体は、しっとりとした露を溜めて恥ずかしげに開き、ピンク色の花卉を覗かせていた。

それはまさに、初めての男性への期待に大粒の涙を流す、開花寸前の媚肉であった。

「ああ……そんなに……見ないでえ……」

シンジもトランクスを脱ぎ捨て、全裸になった。いきり立って血管を浮かびあがらせている男根はもう準備OKだ。そっと位置を合わせる。

「綺麗だ、ケイ……いくよ」

「来て、あなた……ごめんなさい、お待たせして……やっぱり、恐くって……」

ケイもまた、シンジに長いことオアズケを食わせていたことは分かっていた。

セックスが恐かったわけではない。最後まで許してもしも気に入られなかった場合に、シンジを失うのが恐かったのだ。

それゆえに、ケイは恋人を長いこと待たせてきた。だがつつがなく結婚した今、全てを許すのは当たり前のことと言えた。

（ああ……いよいよ……）

まだ羞恥に苛まれながらも、熱く燃えたぎる肉棒が女体にあてがわれたことを感じ、ケイは体から可能な限り力を抜き、そっと目を閉じた。

179 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2007/01/17(水) 21:07:34 ID:W5dr2fru

シンジもまた、待ち望んでいた時が来たことに激しい興奮を感じていた。

やっと、やっとこのときが来た！

「ケイ……」

出来るだけやさしく、そっと腰を前に出していく。はっきりと感じられる抵抗を突き破り、シンジの男根はケイの体を貫いていった。

「ひいっ……い、いたっ……」

小さな悲鳴をあげ、シーツを握って破瓜の痛みを耐えるケイを見て、シンジは感動を新たにした。長いこと待たされたことも、今なら感謝の念で受け止められる。

やはりケイは処女だった。ということは、過去も現在も未来も、この美しい妻の体を思い切り味わえるのは、俺だけなのだ！

——よくぞ今まで、誰にも触れさせずに穢れなき体を育んでくれた！

「ケイ……ありがとう」

「えっ、何を……あっ……ひいっ……」

口をついて出たシンジの感謝の言葉に、一瞬いぶかしむ表情を浮かべたケイだったが、次の瞬間にはまた、体を貫かれた痛みを美しい顔が歪んだ。

大きな瞳から涙をつーっと一筋流して、かすかな悲鳴を漏らし続けるケイを抱きしめ、いくらかでも破瓜の痛みが薄らぐのを待って、シンジはそっと控えめに腰を前後させた。

ケイの体は目一杯の包容力でシンジのそれを受け止めていた。汲めども尽きぬ愛液がシンジのそれをぬるぬると潤し、柔軟で暖かい壁々が予想を超える吸着力で吸い付き、締め上げてくる。腰を出せば、先端にこつんと何か当たり、引けば、トロトロに溶けた粘膜が逃がすまいと絡みついてくる。

「ああ、あああっ……」

そのたびにあえぎとも悲鳴ともつかぬ吐息がシンジの顔をくすぐる。そして、痛みを耐えながら何かを訴えかけるような、愛する妻の視線——。

(この体を気に入ってくれるかしら……もし気に入ってもらえなかったら、私は……)

そんな不安をたたえた、儂げなケイの瞳がシンジを見つめていた。それがまた愛しさをあおり立て、シンジはケイの体に腕を回し、全身を密着させた。

「け、ケイっ！」

「あーっ……」

意外なほどに成熟した女体と可憐な反応に、ほどなくシンジは絶頂に達した。我慢の限界に至った男根が爆発し、思いのたけをケイの体内にぶちまけたのだった。

180 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2007/01/17(水) 21:08:52 ID:W5dr2fru

「……ああ……」

ケイは熱くほとばしった男の精をその子宮で受け止め、放心状態だった。シンジは荒い息をついて、そんなケイを優しく抱きしめてやりながら、これからのことを考えていた。

(……この体を味わえるのは、俺だけ……)

十分に熟れてから破瓜を迎えたとはいえ、ケイはまだセックスの快感を知っているわけではない。ケイがどれほど性を楽しめる女になるか、どんな技を身に付けて男を歓ばせるようになるか。

(……それは俺次第……だよな……)

明日から何を教えよう？ 無垢なこの体を、どう開発していけばよいだろうか？ 射精の余韻のなかそんなことを考えるシンジ。やがてケイの目の焦点が合い、潤んだ瞳でシンジを見つめた。両方の大きな眼から一筋、涙の後が残っていた。

「……素敵だったよ、ケイ……」

「やだ、そんな……」

優しくささやくシンジに、ケイは恥ずかしそうにシンジの腕を逃れ、艶やかな膝をそろえてベッドに座った。

「でも、気に入ってもらえて嬉しい……あっ、シーツを汚しちゃった……」

ケイが身を動かしたあとに残った、ダブルベッドに敷かれた真っ白なシーツにポツンとついた赤いシミ。それはケイの美しい純潔の証だった。

(記念に持って帰ろう……)

そう考えながらシンジは、無垢を象徴するものがもうひとつあるのを思い出し、部屋の片隅にかけられた純白のドレスを見やった。

「買えばいくらなのか正確には知らないが……俺の花嫁には、それだけの価値がある！」

「このシーツ、ホテルに頼んで貰い受けよう……それと、ドレスもやっぱり買い取ろう」

「えっ？ でも、お金かかるし……それに、買ってどうするの？」

「うん……」

シンジはいぶかしげに自分を見つめているケイの大きな瞳を正面から受け止め、さすがに気恥ずかしくなって目をそらし下を向いた——が、今度はケイの可愛らしい乳首に目を奪われてしまい、慌てて視線を妻の顔に戻した。

「あの、つまり、その……結婚記念日の夜には、また着て欲しいんだ」

その意味を悟ってみるみる真っ赤になったケイは、そっと夫に寄り添い、その胸に顔をうずめた。

「……馬鹿……しっかり稼いでね、高いんだから……」

「ああ……」

シンジはベッドに身を横たえ、薄暗く部屋を照らしていた照明を落とした。やがて互いの体に腕を回したまま、二人は安らかな寝息を立て始めたのだった。

181 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2007/01/17(水) 21:09:24 ID:W5dr2fru

「お兄ちゃん、朝だよ～」

翌日の朝。階下からのカナミの声に、シンジは目を覚ました。

またしても、股間にテントを作って。

「……夢か」

この夢はちょっと幸せすぎたかも知れない。今日も学校はあるのだ。教室で、一体どんな顔をして木佐貫ケイに会えばいいのだろう。

それに、ケイの席はシンジの斜め前だ。彼女のたおやかな背中が、小さめのヒップの曲線が、真白なうなじが、授業中に目に入ってくるのだ。勉強に身が入るはずもない。

(……まあ勉強は勉強として……)

もぞもぞとベッドから起き出して着替える間も、シンジの脳裏からはケイの裸身が消えなかった。ガーターベルトとストッキングだけを身に着けた、清潔で、華奢で、美しく、そして熱いケイの女体が。

(やっぱり清楚な女性がいい……それに、うぶな女を俺好みに開発していくなんて、まるで光源氏計画……そうか、それだ。よし、今夜は……)

182 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2007/01/17(水) 21:13:26 ID:W5dr2fru

シンジの夢はまだまだ続きそうだった。

~~~~~  
以上。

タイトルは「シンジの夢十夜 ～第四夜 ケイ編～」で。

ウェディングドレスをキーアイテムに使うことはずいぶん前に決めたのですが、どうも難しい題でした。ケイは妹やその友人達ほど強烈な個性があるわけではないので、結局、処女性を正面に出すしかなかった感じです。

なお、ウェディングドレスやビスチェの構造を知っているわけではなく想像で書いているので、突っ込まないように。

次回は光源氏計画に適した素材ということで、チカ編の予定。  
例によって気長にお待ちください。

ところでコピペをミスりました。

- ・これ>182の最初の一行は>181の最後にあると思ってください。
- ・>174の最初に 「こんな夢を見た。 (改行 x 2) 」

を追加して読んで下さい。 と最後に書いても無駄だな。

古田監督殿：

保管庫に移される時、上記の訂正をお願いいたします。

183 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/17(水) 21:19:01 ID:8v7iJaPQ  
>>182

G J !!

184 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/17(水) 22:00:20 ID:Zkycdmfd  
ケイちゃんにはやっぱ白がにあうな(\*Δ)ハアハア...

トマソン氏 G J !!!

185 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/17(水) 22:58:04 ID:Db5f5D9k  
うはー G J !

186 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/18(木) 00:04:23 ID:HjBJyoBf  
さすがトマソン神。

最高にエロい仕事をしてくれるぜ！

GJ !

ところでここではケイの苗字って「木佐貫」が一般的なのか？

187 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/18(木) 01:24:36 ID:++LLIhn6  
トマソン氏乙です

>>186

このスレ限定の仮の姓だけどな  
名付け元は確か郭氏

188 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/19(金) 07:17:39 ID:PkE/Ngp2  
皆はあかほん買いましたか？

189 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/19(金) 07:20:02 ID:c60YBNK9  
>>188

もちろん

190 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/19(金) 12:10:48 ID:4knkPSKQ  
かむな！

191 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/19(金) 22:16:23 ID:BlaaG9Kv  
アイ先生分が不足してきた…

192 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/20(土) 13:09:39 ID:TzqrLGRl  
アイ先生かわいいよアイ先生

193 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/20(土) 21:24:15 ID:I8BOr99v  
鯖死亡から復帰

194 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/21(日) 21:34:15 ID:mjnSuugw  
静かですね

195 名前： ピンキリ ◆UsBfe3iKus [sage] 投稿日： 2007/01/21(日) 23:20:44 ID:PmvTMDtQ  
職人の皆さん、古田氏、お疲れ様です。  
妹小ネタで、スルー対象ワードは「エロ無し」「下ネタあり」です。  
題は『熱い冬の夜』でお願いします。

では投下。

196 名前： ピンキリ ◆UsBfe3iKus [sage] 投稿日： 2007/01/21(日) 23:21:52 ID:PmvTMDtQ  
冬の夜は寒い。

何を当たり前な、とお思いだろうが、だがそれは完全なる事実ではない。  
人類は『寒さをしのぐ術』も『暗い夜を避ける術』も知っているからだ。  
自力で火を起こす方法を手に入れた時、寒さと暗さは、人類の恐怖たり得なくなった。

『かくして、人類は文化的活動の第一歩を踏み出したのです……』

城島シンジは自宅の居間でテレビを見ていた。

彼の体は厚手の衣服に包まれ、前にはコタツ、下にはホットカーペット、そして頭上には  
輝く電灯がある。

現在の時間は午後十時過ぎ、屋外は真っ暗で、冷たい北風が吹いている。

「やあ、こうして改めて考えてみると、文明の発達に感謝だな」

「そうだね、お兄ちゃん」

シンジの向かい側で同じようにテレビを見ているのは、彼の妹である城島カナミだ。

「でもどうしたの？ いきなりこんなお固いテレビ番組を一緒に見ようだなんて」

「たまにはいいじゃないか、今を生きるということのありがたみと意味を考えて……」

シンジとカナミが今見ているのは、NOKスペシャル『素晴らしき文明』という番組だ。

人類が火を起こす手段を見つけた時を『文明の起源』とし、  
そこからどのように文明が発達し、人間の暮らしが変わっていったかを特集している。  
全八回という大きなスケールで、裏番に負けてなるものかという国営放送の意地が垣間見

えると言えよう。

「でもお兄ちゃん、また新しいエロDVDを手に入れたんじゃないかって？ そっちは見なくていいの？」

「え、し、知らないなあ」

「えー、でも一昨日お兄ちゃんが帰ってきたときに……」

「は？」

「玄関に鞆を置いたでしょ、そしたら『ゴトツ』って明らかに教科書やノートとは違う音がしたもん」

「……お前、シャーロック・ホームズか」

シンジはカナミに視線を合わせないようにと、テレビ画面を食い入るように見つめた。話題をそこで終わらせようという意思の現れであったのだが、その程度のフリでカナミが追求の手を緩めるはずもなく。

「この番組の裏番なんだけどさ」

「あ、ああ」

「『華麗すぎる一族』だよ、キムカズが主演の」

「……そうだな」

「『華麗すぎるエッチ族』ってエロDVDがあったよね、確か」

「はあうっ！」

シンジはよろめいた。

今カナミが言葉にしたエロDVDこそ、先日彼が手に入れたものであったからだ。

「あ、『日曜大洋画劇場』もあったよね。今日は『008 私が愛した大スパイ』だったっけ？」

「……うん」

「『006 (ゼロゼロセックス) 私の淫らなデカオッパイ』ってタイトルのもあったなあ……」

「るはあっ！」

シンジはよろめいた。

今カナミが言葉にしたエロDVDもまた、先日彼が手に入れたものであったからだ。

「『世界ウルルン滞在日記』……」

「……うう」

「えーと、『世界エロロン頹廢日記』」

「ぶはあ！」

シンジはよろめいた。

今カナミが言葉にしたエロDVDもまた、先日彼が手に入れたもの以下略。

「そして『行列の出来る生活相談所』」

「……」

「『行列の出来る性欲解消所』だったっけ」

「おえああ！」

シンジはよろめいた。

今カナミが言葉にしたエロDVDもまた、先日以下略。

「『スター☆メンバー』、芸人の爆裂問題が司会の」

「……」

「これは『ヤリー☆チンバー』」

「ほおうあ！」

シンジはよろめいた。

今カナミが言葉にした以下略。



「……お兄ちゃん」

「はい、何でしょう……」

「案外お兄ちゃんの連想力って、単純だよな」

「ううう」

ケラケラと笑うカナミ。

シンジはぐうの音も出ない。

カナミの言う通り、今度入手したエロDVDは全て、『日曜夜のテレビ番組』の題名をパクったものだ。

シンジは基本的にエロ本やエロDVDは狙い撃ちで買うほうだが、時々こういう「お遊び買い（もしくは借り）」をすることもある。

「……って、ちょっと待て、カナミ」

「ん？ 何？」

コタツに突っ伏していたシンジだったが、ふとある疑問を覚えて顔を上げた。

「お前、俺の新しいエロDVDのタイトルを全部知ってるってことは……」

「……」

「いくらお前がそっち系に詳しくても、ピタリと言い当てることなんて不可能だ！ カナミ、お前……また勝手に見たな！」

「あはは、そんなわけないでしょ」

「いや、俺は昨日カズヤと遊びに出ていた！ その間にお前が視聴することは可能だ！」

「わあ、お兄ちゃん凄い推理。まるでエラリー・クイーンみたい」

「こんなの推理でも何でもなし！ どうなんだカナミ、お前見ただろ！」

「……見た。でもさ、お兄ちゃん」

「何だ」

「あんまりおもしろくなかったよ、全部」

「ぜ、全部見たのかお前……って、そーいう問題じゃねー！ あれだけ無断で人の部屋を漁るなど！」

冬の夜は寒い。

だが、人類は『寒さをしのぐ術』も『暗い夜を避ける術』も知っている。

かつては火、そして今は電気の力による数々の器具。

コタツにホットカーペット、エアコン、ヒーター、蛍光灯、懐中電灯……。

「お兄ちゃんの自家発電でこの家の電気がまかなえたらいいのにね、全部見終える頃には相当な発電量に……」

「そーいう問題でもねーっ！」

「あ、朝までカキ続けたら発熱作用で暖房いらず、かな？」

「そーいう問題でもねーったらねー！」

ひたすらエロ方面にボケネタをかますカナミ、そして突っ込みを絶やさぬシンジ。ギャアギャアと微笑ましい兄妹喧嘩の炎が、日曜の深夜に燃え盛る。

『では、今夜はお時間が来たようです』

テレビの中の司会役のアナウンサーは、今自分が出演している番組の視聴者である兄妹が低レベルのエロ会話をしているなどとは当然知るわけもなく。

『では、また来週のこの時間に、皆さんにお目にかかりましょう』

穏やかな笑みで番組を締めくくるアナウンサー。  
エンドロールがその顔に重なり、画面の下から上へと流れていく。  
「一週間あれば全部見れるでしょ？ 来週はまた別のエロDVDを……」  
「お願いだからもう勝手に見ないでくれ……カナミ」

冬の夜は寒い。  
だが——城島家は、暑い。  
もとい、熱い。

F I N

198 名前：ピンキリ ◆UsBfe3iKus [sage] 投稿日：2007/01/21(日) 23:24:14 ID:PmvTMDtQ  
以上です。  
ではまた。

199 名前：名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日：2007/01/22(月) 01:38:34 ID:kyNq9lYH  
ピンキリ氏 G J

パロ系のタイトル多いですからねw

200 名前：名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日：2007/01/22(月) 03:42:06 ID:mF5E42Ob  
乙ー

201 名前：名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日：2007/01/22(月) 20:44:04 ID:t3fBe7TL  
カナミに向けてバーローと突っ込みたい

202 名前：名無しさん@ピンキー [age] 投稿日：2007/01/22(月) 23:20:38 ID:bEeefgB0  
今週扉絵のミホが可愛い  
誰か書いてくれないだろうか？

203 名前：名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日：2007/01/22(月) 23:22:59 ID:Paf/1wmi  
前スレのしりとり SS で鈴木君が大変なことに°・(ノ△)°・

204 名前：名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日：2007/01/23(火) 00:15:51 ID:DyNL2an3  
あっちのほうにこそ GJ を贈りたいw

205 名前：名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日：2007/01/23(火) 02:15:06 ID:8m/+jlOA  
あのしりとりを手を出したいのだが  
あまりのレベルの高さに躊躇してしまうぞw

206 名前：名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日：2007/01/23(火) 17:37:31 ID:0EALiZD5  
また別の意味で最高傑作となりそうだな…  
2ちゃん最後の夜に皆に G J

207 名前：名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日：2007/01/23(火) 20:50:46 ID:Ms+wdjtw  
前スレ 5 0 0 KB 到達。シリトリ職人の皆さん乙でした。

ただの埋めシリトリのはずだったのに、  
↓ここから妊娠コンボの流れが神だった。

> 760 名前：名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日：2007/01/04(木) 11:04:01 ID:q1Xtzlr+  
> コンドームに穴を開けるミサキ

208 名前：名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日：2007/01/23(火) 22:16:17 ID:ihI6hOZd  
妊娠コンボから囚われの鈴木ネタまでのあの尻取り SS は、  
氏家 SS 保管庫に入れるべきじゃないだろうか。

面白すぎてハゲシワラタ ( ° ▽ ° )

209 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/23(火) 22:20:46 ID:ihM6ODnF  
>>古田氏

いつも保管乙です

お願いします！出来れば前スレのしりとりを番外編として保存出来るならしていただきたい！

アレに書いた人達マジで乙&GJ！

210 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/23(火) 23:34:30 ID:Qpf70l0I  
>>202

漏れも思った

めがっさ可愛かったな

211 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2007/01/24(水) 00:42:19 ID:asYBUf+i

トマソンです。

ピンキリ氏乙でした。

さらに前スレの埋めしりとり SS を投下した方々に拍手。

さてシンジの夢十夜、第五夜。

チカ編です。

では投下。

212 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2007/01/24(水) 00:43:48 ID:asYBUf+i

こんな夢を見た。

「シンジさん……少し、いいですか……」

「あ、チカちゃん。どうしたんだい？」

ある日の深夜の城島家、シンジの部屋に小さなノックの音が響き、シンジがドアを開けると、そこにはパジャマ姿の女の子が立っていた。

その少女は、いとこのエーコに連れられて遊びに来た女の子、吉見チカ。あまり存在感のあるほうではないが、しとやかでおとなしめの、おさげ髪の可愛らしい少女だ。

とりあえず部屋に迎え入れはしたものの、シンジは勉強の悩みか何かだと思っていた。宿題についての質問でもあるのだろうか、と。

だが。

「……シンジさん……私を女にしてください！」

漆黒のロングヘアを垂らして目の前に立ち尽くす少女は、思いつめた表情でじっとシンジを見つめて、そう言ったのだ。

さすがにシンジも言葉に詰まった。『女にしてくれ』とは、やっぱりアレか？  
しかし、本当に手を出したらこれは犯罪では？

「……チカちゃん……一体どうしたんだい？」

シンジは間の抜けた質問をするのが精一杯だった。

「シンジさん……初めて会ったときに、私が躓いたところを胸で受け止めてくれたときから、ずっと……ずっと好きでした……」

チカは羞恥に顔を真っ赤に染めて、おずおずとパジャマの胸のボタンを外し始める。

「だから、シンジさん……」

「あ、あのチカちゃん、落ち着いて。気持ちは嬉しいよ、うん。だから座って……」

チカは聞いているのかいないのか、前のボタンをすっかり外すと、目を合わせずにしばらく佇んだ。もう一步を踏み出せばもう戻れない、果たしてそれでも良いのかどうか、最後の逡巡をありありと浮かべて。

だが少女はやがて意を決して、目をつぶって前をえいっと開き、パジャマの上を脱ぎ捨てた。

「ち、チカちゃん？」

慌ててチカの細い手を押さえようとしたシンジだが間に合わず、チカのほっそりした上半身は全て露わになってしまった

「シンジさん……気に入って……もらえました？」

シンジは生唾を飲み込んだ。まだ幼さも抜けきっていない少女が、目の前の男性に気に入ってもらえなければこの世の終わり、とでも言いたげな思いつめた表情で彼を見つめ、トップレスの姿を晒しているのだ。

213 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2007/01/24(水) 00:44:31 ID:asYBUf+i

真白ですべすべで、柔らかそうな肌。成熟した女の柔らかさでなく、幼い子供の柔らかさだった。そしてまだ青く果実を感じさせる、真円形の可愛らしい乳房。だがそのボリュームは既にマナカ以上だ。そして、ほのかな隆起の先端にちょこんと息づく、乙女そのものの薄い色を湛えた小さな乳首。

「毎日、マッサージしているんですよ……シンジさんに気に入って欲しくて……」

気をつけの姿勢でシンジの視線に耐えていたチカだったが、シンジがもう一度ごくりと生唾を飲み込み、胸を食い入るように見つめているのに気づき、恥ずかしげに、だが嬉しそうに微笑んだ。

「ち、ち、チカちゃん。服を着ようよ、服……」

さすがのシンジも焦りまくりながらも、股間が鎌首をもたげ始めたのをどうすることも出来なかった。シンジのパジャマのズボンに浮き上がったテントを、チカも目ざとく見つけた。

「あ……シンジさん、私の体で興奮してくれた……もっと、見てください……」

「ち、チカちゃん、駄目だよ……」

チカの手がパジャマのズボンのウエストにかかる。顔を真っ赤にしながらパジャマのズボンをも脱ぎ捨てたチカを見て、シンジの理性もついに全壊した。

(俺が手を出さなかったら、この娘は一体どれだけ傷つくのか？ 身投げでもしかねないじゃないか？ ならば、優しく可愛がるのも男の務め……。)

都合のいい理屈を付けて自己を正当化したシンジは、今やパンツ一枚のチカをベッドに座らせた。

「チカちゃん……いいんだね？」

「……はい……」

そうと決めれば、シンジとて若い男、もはや止まるはずがない。

チカの隣に座ったシンジは、まず優しく頬ずりしてやると、そっと唇を奪った。

「む……」

目を閉じてなすがままにシンジに身を任せるチカだが、おそらくキスも初めてなのだろう、その体はわずかに震えていた。腕の中にいる少女への愛しさがだんだんと募ってきたのを感じつつ、シンジは可憐な唇を嘗め回し、肩口から愛撫を加えていった。

214 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2007/01/24(水) 00:45:35 ID:asYBUf+i

シンジが小さな肩を優しく撫で回していた掌を進めてワキの下に差し込むと、チカの体が突然跳ね上がった。

「きゃっ……」

「……チカちゃん？」

「私、そこは弱いんです……」

そういえば、とシンジは思い出した。

(以前この子から、『私はワキを責められると落ちちゃいます』というメールをもらったことがあったな……それなら、ちょっと試してみるか……)

シンジは優しくチカの腕を導き、頭の後ろで組ませた。

「えっ……シンジさん、何を……」

チカがいぶかしむのも構わず、腕を大きく上げ、無防備に晒された少女のワキの下にシンジはそっと顔を近づけた。

「きゃっ……や、だめです……」

すりすり鼻の頭をこすり付けてやると、チカは必死に身をよじった。シンジが少し悪乗りしてみると――

「きゃああああっ！！！」

ワキの下をぺろぺろと嘗められ、チカの悲鳴が響き渡った。半狂乱になって激しく身をもがいて抵抗し、ようやくシンジの舌から逃げ出したチカは、ベッドの隅まで逃げ出し、体を震わせて泣き出してしまった。

シンジはあまりの反応に驚き、思わず謝ってしまう。

「ご、ごめんチカちゃん……ちょっと試してみたくなっただけど、そこまで弱いとは思わなくて……」

「……シンジさん……ごめんなさい私、びっくりしちゃって……」

チカも怒っていたわけではないようだ。あまりに敏感すぎて、耐えられなかっただけなのだろう、やがてシンジに微笑みを見せてくれた。

「でもワキの下はなしにしてくださいね？ 私、どうにかなっちゃいそうですから」

再びシンジの隣にちょこんと座ったチカの悪戯っぽい笑顔に、シンジは思わず見とれた。これほどの弱点を晒しながら、それでもなお体を任せてくれようというのか？

愛しさがさらにつのってくるのを感じながら、シンジは両手をチカの胸の隆起に伸ばしていった。

215 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2007/01/24(水) 00:46:11 ID:asYBUf+i

チカの乳房は、隆起のサイズだけを見ればマナカ以上だったが、やはり年齢相応に未成熟で固かった。衛生陶器のように真っ白な肌を撫で回して、みずみずしい感触を楽しみ、ほのかな隆起を力をこめて揉み、くりくりと乳首を転がしてやる。

「う……」

チカはかすかに喘いで、目を閉じて初めて味わう奇妙な感覚に耐えていた。まだ固い果実だけあって、揉むのは力がある――シンジは手をチカの腰に回し、顔を胸に埋めた。

隆起の周辺からそっと舌を滑らせ、円を描いて次第次第に乳首に近づいてゆく。とうとう可愛らしい乳首に到達し、思うさま乳首を吸ってやると、ようやくチカの吐息も次第に甘くなっていった。

「ああ……」

ツンツンと舌先で乳首をつつかれ、体を固くするチカの初々しい反応は、シンジには妙なる音楽のようだった。

チカの乳房を丹念に楽しんだシンジは、少女の下半身に目をやった。脚というよりアンヨとでも言いたいようなほっそりした脚がぴっちり閉じられ、その付け根を白い木綿のパンツが覆い隠していた。周囲にわずかにレース状の装飾がなされているだけの飾り気のない、純白で清潔なパンツだ。中学生一年生ならこれが当たり前だろう。

これを筆り取れば、まだ幼いチカの女体を覆うものは何もなくなる。シンジは優しくチカの体をベッドに横たえると、ゆっくりとその縁に指をかけ、震える手で最後の一枚を剥き下ろしていった。

羞恥に手で顔を隠しながらも、チカもそっと腰を浮かせて協力していた。

216 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2007/01/24(水) 00:47:05 ID:asYBUf+i

ついに全裸になった少女の体を、シンジはとっくりと眺めた。

「ああ……恥ずかしい……でも、嬉しいです……」

チカは、焼け付くような視線が股間に注がれていることをはっきり意識していた。

シンジはもう一度生唾を飲み込むと、見るからに生えかけのまばらな繊毛、くつきりと覗いている裂け目を、食い入るように見つめた。

女性の裂け目は、成長にしたがって姿を変える。幼いころは長く、前から見てもはっきり分かるが、成熟するにつれて短く、真下に向けてゆき、成熟した成人では直立すればほとんど見えなくなる。

チカの体はちょうどその途上にあつた。脚をぴっちり閉じていても、前から半分ほど割れ目が覗いているのだ。周りとはほとんど色が変わらない、ごく薄い大陰唇が固い蕾を見せていた。

だが……その女体は、あまりにも未成熟で、小さかった。

チカは中学一年生としても大きいほうではない。身長もせいぜい 145cm というところだ。

ほっそりして頼りなげな腰つきも、まだ固い蕾も、シンジを迎え入れるに十分に成熟しているとはとても言えない。シンジは、チカの秘裂と自分の一物を見比べたが……。

チカの体に無理に男根を挿入するのは、まさに破壊行為だった。

シンジはもちろん、目の前の少女を犯したかった。穢れなき処女の体を我が物に出来るチャンスなのだ。

だが、忍耐、我慢、辛抱、理性……とにかくあらゆる抑制をフル動員して、シンジは耐えた。

(チカちゃんを壊していいわけがない……)

シンジはそう自分に言い聞かせ、いくらか無理やり微笑みを浮かべて、チカに顔を向けた。

「……チカちゃん……とても入らないよ」

217 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2007/01/24(水) 00:48:21 ID:asYBUf+i

「……そんな……」

チカは泣き出しそうな表情を浮かべた。処女を捧げようと深夜に男性の部屋を訪れ、全裸になって体を差し出した挙句にこの一言を言われたのでは、チカはまるで、女失格と言われたような気がしたのも無理はない。

「そんなこと……そんなこと、ないです……きっと、入ります……」

チカはベッドに横たわったまま、羞恥に固く目を閉じて、細い脚を自らおずおずと開いていく。

「チ、チカちゃん？」

やがて少女の両脚はシンジに向かってY字型に開き、少女の体の何もかもがシンジの前に広がった。

「きっと……入ります……お願い……」

幼さの残る小さな女陰に、シンジの視線は否が応にも吸い寄せられた。

まばらな縮れ毛が生えかけているそこは、今は固く閉じた蕾だった。やがてはふっくらと熟して、男に限りない歓びを与え、また与えられるようになるだろうが、今はまだ無理というものだ。

もう一度生唾を飲み込み、シンジは口を開いた。喉がカラカラなのを、声が上ずるのを必死にこらえて。

「だ、駄目だよ……チカちゃん、壊れちゃうよ……」

その声に、とうとうチカは本当に泣き出してしまった。

「シンジさん、私じゃ……私の体じゃあ、シンジさんに満足してもらえないんですか？うう……、ぐす、うひっく……」

シンジとて思春期の男子、女の子の涙にはかなわない。

パジャマの中でいきり立ってやり場のない股間の肉棒と、しくしくと泣いているチカとに挟まれ、シンジは悪魔に魂を売った。

「じゃあさ、チカちゃん……舐めてくれないか」

218 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2007/01/24(水) 00:49:41 ID:asYBUf+i

チカははっと顔を上げた。

父親以外のものは見たこともないが……挿れてはもらえないとしても、それでシンジに喜んでもらえるならば……。

(せめて、シンジさんには満足してもらいたい……)

その一念で、チカは言われるままにうなずいた。

「……はい……」

「それじゃ、ここにしゃがんでごらん……」

シンジはパジャマとトランクスを脱ぎ捨て全裸になり、ベッドに浅く腰掛けた。脚を開き、その間にチカをしゃがませる。

「あ……」

初めて見る男性器、それもいきり立って血管を浮かび上がらせているペニスは、少女にはグロテスクな代物だった。

(でも、シンジさんのものなら——)

チカはおずおずと、それを眺めた。

「それが、おちんちんだよ……そうだな、まずは優しく握ってみて……」

「は、はい……えっと……」

「うっ……」

小さな、だが暖かい掌に優しく包まれ、シンジは情けない声を出してしまった。

「……それじゃ、そっと舐めてみてくれ……」

「はい……」

「……ううっ……」

言われるままにおのれの肉棒に愛撫を繰り返すチカに、シンジは調子に乗って次々にテクニックを仕込んだ。

「次は全体をそっと舌を滑らせて……次は裏側の線を中心に……」

「タマタマをやさしく握ってマッサージして……」

「その段差はカリとって、その段差の内側が弱いところだからそっと舐めてごらん……う、うおっ……」

穢れなき全裸の少女にフェラチオのテクニックを教え込んでゆき、自分の肉棒に奉仕させるのは、シンジ自身が驚くほど刺激的だった。

219 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2007/01/24(水) 00:52:40 ID:asYBUf+i

「それじゃチカちゃん、俺は横になるから、反対方向を向いて上に乗ってほしい」

「えっ……あ、そ、そんな……」

力強い腕によって軽々と導かれたチカの体は、ちょうど女性上位のシックスナインの形でシンジの上に乗ってしまった。

「いてて。ほら、開いて……」

チカの膝で顔を押しされ、少し痛い思いをしたシンジは、ぐいとチカの両脚を開き、両膝を自分の顔の左右に置いてしまった。

「あっ、いやっ……恥ずかしいです……」

なんという格好だ！ シンジの顔にまたがり、未成熟な女体をシンジの目前に差し出したポーズを取らされたチカは、あまりの羞恥に股間を両手で隠してしまった。

体を支えるすべもなく、シンジの体に身を預けたままうつぶせになっているチカの目の前に、グロテスクな肉棒が屹立していた。

「さあ、手と口で可愛がってごらん……」

「で、でも……」

股間を覆う手をそのために使えば、全てをシンジの目の前に晒してしまう。さっきは自ら脚を開いたとはいえ、男性の顔の上にまたがったポーズでというのは、また違った羞恥をもたらした。

「チカちゃん……見たいんだ、君の全てを……」

「ああ……」

ゆっくりとチカの手は引っ込み、シンジのペニスへ向かった。

シンジの目の前に差し出された、未成熟で一点の穢れもない女体！

チカが優しくペニスを可愛がり始めた。シンジもまた、かすかに漂う奇妙な匂いに陶然となりながら、そっと指先で少女の体の芯を愛し始める。

「あああっ……」

秘奥を撫で回す指先にチカは身を固くしたが、このポーズでは逃れるすべもない。

シンジはまだ幼さを感じさせる媚肉をつつき、なぞり、押し開き、揉み込み、ゆっくりと楽しんだ。

220 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2007/01/24(水) 00:53:45 ID:asYBUf+i

丁寧に撫でほぐしていくうちに固い蕾がじっとりと濡れてきたことに、シンジは一驚した。



いかに未成熟で小さいつくりとはいえ、女性としての機能は既に備わっているのだ。

チカの顔を見やると——チカは健気に、いきり立つ男根に唾液をまぶし、舌を絡め続けていた。やがてシンジのリクエストのままに、先端1／3ほどをほおぼり——チカの小さな口にはそれが精一杯だったのだ——先端の割れ目をチロチロと舌先でなぞり、唇の内側で段差の内側を摩擦を続けた。

下半身は下半身で、幼い媚肉を好き放題にいじらせながら。

「んーっ……」

秘肉の割れ目をそっと舌でなぞられ、少女の体が痙攣した。だが、大きく開かれてがっちり押さえられた両脚を閉じることも出来ず、シンジのクニリングスに頭の中が真白になりながらも、チカは懸命に奉仕を続けた。

かすかに漂い始めた、奇妙にイカ臭い匂い。熱い肉棒の先端から自分の唾液ではない、ねばった液体が漏れ出しているのが感じられる。

(シンジさんに満足してもらえるのだったら……私はどんなことでも……)

体の流れ始めた奇妙な感覚が高ぶりつつある性感であることを、チカはまだ知らない。性の知識が十分にあるとはとてもいえない中学生の身分で、ただひたすらにシンジを満足させようと、チカは懸命に奉仕を続けた。

シンジの舌が執拗にチカの女陰を、恥ずかしげにかすかに勃起したクリトリスを、蟻の門渡りを、時としてアナル周辺をも嘗め回す。

さしも幼い女芯も、執拗なクニリングスに次第にほぐされ、開き始めていた。

ピンク色どころか桜色といたいくらいの色の薄い肉襞がしっとり露をため、初めての男性への期待に恥ずかしく開き、おいでおいでをするように覗いている！

その蠱惑的な眺めに見とれるシンジのペニスを、チカは懸命に刺戟し続けていた。

(チカちゃん、待ってろよ……もう少し大きくなったら、この体は俺のものだ……)

亀頭を熱く包み込み先端を嘗め回し続けるチカの口技に、シンジもまた頭の中が真白になり、限界がすぐそこまで来ていた。そっと舌を割れ目に差し込んでやると、チカが弾かれたように体をピクンと震わせ——同時にチカの口の中で、シンジの精が爆発した。

「むぐーっ！」

チカはその小さな口で、ほとぼしった精液を受け止めたのだった。

221 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2007/01/24(水) 00:56:42 ID:asYBUf+i

大きく息をついて脱力するシンジの上で、チカもまた呆けたような状態だった。口の中に弾けた熱い液体をどうしていいのか分からない——少し苦くて、奇妙な臭いのするそれをそっと指につけてみて、白くてどろっとしたものであることを確認する。

(……これが……男の人の、シンジさんの精なんだ……ちょっと臭い……)

「いんいあん……これ、のんらほうがうれしいれすか？」

(飲んだほうが嬉しいですか?) と言おうとしたのだが、液体を口に含んだままではこれくらいがいいところだ。

「チカちゃん、そりゃそうしてくれれば嬉しいけど、無理しなくても……」

コクン……。

シンジの言葉が終わる前に、チカは目をつぶってその液体を飲み下した。

「シンジさん……私、シンジさんに喜んでもらえるなら何でも……し……ま……」

さしも気丈なチカも限界だった。初めて見る男根を散々に舐めさせられ、まだ幼い女体を腰に力が入らぬほどにいじられて、挙句の果てに意思の力だけで男の精を飲み下し

たのだ。

チカは消耗しきってがくりと崩れ落ち、小さな体をシンジに預けて気を失った。

「チカちゃん……」

シンジは、羽根のように軽いチカの体を優しく姫抱えにしてベッドに横たえてやると、添い寝してその寝顔に見とれた。可憐な唇からわずかに垂れかけた、白濁した液体を拭いてやり、おでこにちゅっとキスしてやる——さすがのシンジも、口内射精の直後に唇にキスする気にはなれなかったのだ——そして、乱れた漆黒の髪を撫でて整えてやると、今後のことに思いを馳せた。

(もう少し待ってろよ……三年か五年かしたら、チカちゃんももう少し大きくなって、きつものすごい美人になる、そしたら思う存分にこの体を頂く……それまでは、手や口や髪でのエッチな技を仕込んでやるからな……)

この美少女の体でどれだけ楽しめることか？ 縦横に妄想をめぐらせ、至福の表情を浮かべたシンジは、腕の中にチカの温もりを感じながら眠りについたのだった。

222 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2007/01/24(水) 00:58:09 ID:asYBUf+i

「お兄ちゃん、朝だよ～」

翌日の朝。階下からのカナミの声に、シンジは目を覚ました。

またしても、股間にテントを作って。

(……さすがにちょっと若すぎたかなあ……俺も結構ロリコンかも……)

いかに可愛らしいといっても、中学一年生はやりすぎだった。おまけにチカの体が小さすぎて、あるいはシンジのアレが大きすぎてか、挿れられなかったとあっては、もったいない気がするのも当たり前ではある。

(それにしてもチカちゃんて、清純そうに見えても結構エッチなんだな……)

全ては妄想なのだが、シンジの中では、中学一年生の女の子とシックスナインを楽しむんだことは既に正史になっているらしい。

(清純派を三人続けたから、次はエッチな女の子もいいな……よし、今夜は……)

シンジの夢はまだまだ続きそうだった。

223 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2007/01/24(水) 00:59:24 ID:asYBUf+i

以上。

タイトルは「シンジの夢十夜 第五夜～チカ編～」で。

挿れなきゃ挿れないで結構エッチになるもんですなあ。

次回はショーコ編の予定。

224 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/24(水) 02:28:36 ID:gIyA6Sfg  
最 高 G J

225 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/24(水) 02:57:45 ID:81OI8/Es  
トマソン氏乙です

226 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/24(水) 09:52:01 ID:EnYpTrJK  
乙です。夢でもシンジ羨ましす  
227 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/24(水) 22:44:25 ID:97kfvsvO  
>>223 G J！チカちゃん可愛いよ  
228 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/25(木) 01:03:59 ID:Il9Iob+j  
トマソン氏相変わらずG Jっす！！

チカちゃんいじらしいですね  
シンジに会うまではエーコのエロボケに  
びっくりしたりして清純だったのに  
すっかり大胆になっちゃって・・・

恋を知ると女の子は変わるんだなあw

229 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/25(木) 01:14:17 ID:gyc07BOR  
トマソン氏ノってますな  
乙

230 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/25(木) 15:55:41 ID:pbSSCpAW  
ちょ、じゃあ四天王は誰なのよ

231 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/25(木) 15:56:51 ID:pbSSCpAW  
ゴメソ

>>230 はゴバーク

232 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/26(金) 10:11:07 ID:jglXXqd+  
はい、氏家大の入試は難しいからね、

ケアレスミスしないよう単行本には隅から隅まで目を通しておくように！

出来れば修正前の掲載原稿や人気投票、単行本のCM、帯や特典の復習もしたいところね  
基本問題は点数の稼ぎどころなんだからしっかりチェックしないと！

そしてSSも忘れちゃダメ、各職人ごとの作品名と傾向を！

応用問題で差がつくんだから！

233 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/26(金) 17:02:28 ID:Egq7FSbr  
そういや8巻にはCMあったのか？

234 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/27(土) 15:01:43 ID:C4mOV6gw  
特に目の覚める事件がないのめいような悪いよな

235 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/27(土) 22:24:29 ID:yyuhSivW  
さて週末だが・・・

236 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/28(日) 15:48:57 ID:NPVSb4P/  
ゆっくりとね

237 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/29(月) 07:34:20 ID:vYpK7qAM  
静かに週があける

238 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/30(火) 07:04:02 ID:Y6JrJ5IY  
そしてマターリと

239 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/30(火) 13:19:40 ID:muwt/agG  
>>230 が言っていた四天王

小宮山、中村、マサママ、社長

エロ四天王が降臨する

240 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/30(火) 13:26:52 ID:iRHgEY6O  
社長ってそんなにエロかったっけ？

241 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2007/01/30(火) 22:07:51 ID:+cgiA17b

トマソンです。

加藤先生の子供がいきなり五歳になっていて激しく動揺。  
妹世界の住人は年は取らないと思っていたんですがね。

さて、シンジの夢十夜、その第6回。

ショーコ編です。

では投下。

242 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2007/01/30(火) 22:08:42 ID:+cgiA17b

こんな夢を見た。

(遅くなっちゃったな…)

シンジは足早に夜道を歩いていた。寒空の下、家への近道をしようと公園のなかを  
突っ切り、歩を進めていたそのとき。

がさがさがさ。

「む…ぐうーっ……」

なにやら暴れる音と、くぐもった苦しげな声がする。

(……？ アオカンカップルか？ 痴漢か？)

妙な音の源を探ってシンジが茂みの向こうを見ると……。

「わっ?! な、なんだ?」

そこにいたのは、ベージュ色の巨大なイモムシと、それから生えた二本の得体の知れ  
ない真白な棒。

「むーむー……」

シンジの声をききつけ、いっそうイモムシが暴れ、二本の棒が激しく動く。

それが茶巾縛りにされた女性とその脚だとシンジが気づくには数秒かかった。

「なっ……?!」

紺色のブルマを穿いた下半身が見事なまでに素肌を晒し、もがく両脚が開いたり閉じ  
たりしているのがまるで誘うような眺めだった。が、今は見とれている暇はない。

「だ、大丈夫ですか……」

とりあえず声を掛けたシンジは、思うさまめくり上げられ、頭上で縛られたスカート  
の裾をほどいてやった。

「む〜……」

中から出てきたのは、後ろ手に手枷をつけられ、ご丁寧にギャグボールまでを噛ま  
された女の子。

「……って、岩瀬……さん?!」

「むぐ……」

豊かな漆黒のロングヘアを乱して荒い息をついているその少女はなんと、妹の親友の

一人、岩瀬ショーコ。

シンジは慌てて手枷を外し、唾液にまみれたギャグボールも取り払ってやった。

「はあ、はあ、ああ……お兄さん、ありがとうございます……助かりました」

「いったいどうしてこんな……」

「それが実は……彼ったらヒドイんですよ。私を茶巾縛りにして放置プレイしたまんま、忘れて帰ってしまったんです」

てっきり賊にでも襲われたのかと思っていたシンジは、予想外の答えに、とっさには状況がつかめない。

「……茶巾？ 放置？ まんま忘れて？」

243 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2007/01/30(火) 22:11:05 ID:+cgiA17b

しばし呆然としたシンジだったが、ショーコが寒そうにしているのを見て我に返った。

「……まあそれは置いといて……寒かったろうね」

「ええ……あの、お兄さん……体が冷えちゃって、その……暖めてもらっても、いいですか……」

ショーコはスカートの上から両手で脚をさすりながら、体をブルツと震わせた。

考えてみれば、どれくらいの間ああしていたのか知らないが、ショーコはこの寒空の下、むっちりとした素足をむき出しにしていたのだ。体が、特に下半身が冷えるのは当たり前のことだった。

「あ、ああ…それじゃ、ウチはすぐそこだから、風呂にでも入っていくといいよ」

ううん、と首を横に振るショーコ。

「そうじゃなくて……お兄さん、そこのベンチに座ってください」

「え？ あ、ああ、いいけど……え、い、岩瀬さん……?!」

直近の長いベンチに浅く腰掛けたシンジ。なんと、その膝の上にショーコはそっと腰を下ろし、体を任せてくるではないか！

「私、あんまり大ごとにしたくなくて……暖かくなるまで、こうして居させてください……あの、駄目ですか……？」

横座りのまま、そっとシンジのコートの前を開いて体を押し付けてくるショーコに、たまらずシンジの心臓が跳ね上がった。願いを込めて訴えかけてくる瞳に吸い込まれそうな気さえする——シンジに、断ることなど出来はしなかった。

「あ、いや、いいよ……でも……」

「良かった……お兄さんあったかーい……ああ……」

ほっとしたような表情で体をすり寄せてくるショーコに、シンジはそれ以上何も言えなくなってしまった。

(……岩瀬さんって、こうして見るとすごい美人だな……)

妹のカナミは勿論、アキやマナカに比べてもシンジとの絡みは少ないが……ショーコは美人ぞろいの妹の友人達の中でも、抜きん出て正統派の美少女といえた。

あくまでもストレートで量も豊かな漆黒の髪。きれいに真ん中で分けられた前髪は、シミひとつない額を見事に縁取っている。整った顔立ちの中でもひととき目立つ、大きな黒目がちの瞳。甘えて体を押し付けてくるショーコにシンジが見とれているうちに、彼女は目を開き、悪戯っぽい視線を向けてきた。

「ごめんなさい、これじゃ、お兄さんが……寒いでしょ？」

244 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2007/01/30(火) 22:12:42 ID:+cgiA17b

「えっ……うお……い、岩瀬さん?!」

思わずシンジは情けない声を出してしまった。ショーコの手が、ジーンズの上からシンジの股間をそっと刺激してきたのだ。

「ショーコで、いいですよ?」

「い、いわ、いやショーコちゃん?!」

「うふ……寒い時は、体の芯から暖まるのが一番ですよね」

ショーコは巧みにジーンズファスナーを下ろし、半ば立ち上がったアレを優しくつまみ出す。幸い、手は冷えていない——少女の掌に暖かく包まれ、ツボを押さえた摩擦を繰り返すショーコのハンドサービスに、あっという間にシンジのそれは天を向いて屹立してしまった。

「しよ、ショーコちゃん……彼氏がいるんだろ? こんなこと……」

「ええ……でも、お兄さんなら……誰にも言いませんから……ね?」

一旦は止めようとしたシンジだが、そういわれれば断りきれない。というか、本当はお願いしたいくらいだ。おまけに、股間は既にフルチャージである。

ショーコはシンジの膝から降りると、両脚の間に割って入り、しゃがみこんだ。

「しよ、ショーコちゃん!?!」

ショーコはためらわずにくわえ込んだ。

「お、う、うおっ……」

さすがに経験値が違う。深々と口に含み、軽く息を吸って口腔の内側を肉棒に吸い付かせて顔全体を前後させると、まるで性器に入り込んでいるかのように男根全体が暖かく摩擦される——しかも段差の内側を、先端の割れ目を、絶妙に舌がチロチロと刺激してくる!

ショーコのフェラチオに、シンジはあっという間に追い上げられていった。

「しよ、ショーコちゃん……おおうっ……これじゃ、保たないよ……」

「うふふ……お兄さんのって、大きくて素敵……」

一旦、ペニスから離れたショーコは、再びカプリとそれを口に含んだ。ほんの数秒、モゴモゴと口を動かして立ちあがる——いきり立ったシンジの肉棒には、いつの間にかコンドームがぴったりと装着されていた。

(……すげえテク……)

感心するまもなく、ショーコはスカートの脇からブルマを下ろすと、恥ずかしそうに顔を赤らめ、だが誘うような微笑を浮かべてシンジに向き直り、ロングスカートをゆっくりとめくって見せてくれた——薄暗いなか浮かびあがる真白な太腿が少しずつ、露わになっていくのはなんとも蠱惑的な眺めだ。シンジは生唾を飲み込み、食い入るように見つめる——彼は純白のパンティを予想し、また期待していた。

だが、スカートがすっかり持ち上げられたときそこに覗いたのは、隠すべき黒い翳のない、ふっくらと熟れた媚肉だった。

245 名前: トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日: 2007/01/30(火) 22:14:21 ID:+cgiA17b

予想以上の眺めに、シンジはまたしても心臓が跳ね上がった。

「……あ、あのショーコちゃん、下着は……」

「今朝、彼氏がパンツオナニーで汚しちゃって……」

「……え、えーと……その、お毛々は……」

「それも彼氏に剃られちゃって……あ、でも彼氏のは私が剃っていますからおあいこですけど……お気に召しませんか?」

お気に召さないわけがない。自らスカートを捲り上げて無毛の秘奥を晒す美少女に、

シンジは喉がカラカラになり、心臓がバクバクいっているのをはっきり感じていた。

「……魅力的過ぎて……どういったいいのか分からないよ……」

「うふふ、嬉しい……それじゃ……」

寒い中なのだが、強烈な誘惑に、シンジのいきり立った肉棒が縮まる気配はない。

ショーコはゆっくりとシンジの上に跨ってきた。

「しょ、ショーコちゃん、ちゃんと濡らさないで……」

「あら、大丈夫です。私、起きている間はずっと濡れてますから……あああっ……」

位置を合わせ、ショーコが焦らすようにゆっくりと腰を下ろしてゆくと、少しずつ、少しずつ、シンジのそれがショーコの体内に侵入していった。

あまりにもゆっくりした挿入に我慢しきれず、シンジはぐいと腰を浮かせた——結合が一気に深まり、先端が何かにつんと当たり、ショーコは大きく身をのけぞらせた。

「うあああっ！……ああ……お兄さんたら……」

「うおっ……ごめん、ショーコちゃん……待ち切れなくて……」

「ふふっ……ああ……入ってる……熱い……」

すっかり腰を下ろしてしまうと、ショーコはしばし目を閉じて結合を味わった末、ゆっくりと体を揺らし始めた。

「う、うおっ……」

一見すると全く普通の格好をしている目の前の美少女が、実は下着だけを脱ぎ捨てて、ロングスカートの中で男根を深々と咥え込んでいる！ どこか背徳的な、だが圧倒的な快感がシンジを襲った。

ゴムのせいで絡みつく襞々の感触が薄められているのがなんとももどかしい。だがそのもどかしさがまた獣欲を掻き立てる。寒空の下、そこだけを熱く包み込まれたシンジは、自分にまたがった女体のずっしりとした量感と確実に昂ぶりゆく性感に、あっという間に夢心地に陥った。

246 名前： トマゾン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2007/01/30(火) 22:17:45 ID:+cgiA17b

「ああ……ああっ……お兄さん、暖かいですか？」

そう言われて、いつしか体中がぼかぼかと暖かくなっていることにシンジは気づいた。

「うん……気持ちいいよ、ショーコちゃん……」

「私も……あったかい……」

対面座位でどっぷりとシンジを咥えこんだショーコもまた、ぽっと顔を上気させ、うっとりとした表情を浮かべ、体を揺らし続けていた。上下に前後に、くいっくいっとう腰を振り、そのたびに甘い吐息を漏らす。

「お兄さん……ああっ……ちょっと立ち上がって、歩いて見てください」

「え？ で、でも危ないよ……」

「大丈夫、こうしていますから……」

ショーコは腕をシンジの首に、脚を腰に固く回し、全身を密着させた。ダッコの体勢でつながったまま、シンジが試しに立ち上がるとあら不思議、二人はいまや、駅弁位で深々と結合していた。

「ああーっ……」

甘い吐息を漏らしながらもショーコがささやく。

「SHINJI と繋がったままこんな公園歩くななんて、頭がフットーしそうだよおっっ……」

残念ながら、シンジはその元ネタを詳しくは知らない。

というより、彼はそれどころではなかった。

「うおおっ！？」

不安定な体勢でシンジにしがみついたのが効いたか、ショーコの膣がキュッと締まり、

啜え込んだシンジのペニスを強烈に絞り上げたのだ。

「う、うっ……」

ほんの二、三步脚を踏み直ただけで、シンジは頭が真っ白になった。片足を下ろすたびにショーコの体はわずかに上下に揺れる、すると最大限に怒張した肉棒がツンツンとショーコの子宮をつつき、そのたびにキュッキュッと肉壺が締まるのだ。ショーコの膣圧がスチール缶をも潰すスペシャル仕様であることをシンジは知らなかったが、その名器ぶりに彼は身も心もとろけてしまった。

「お、うっ……」

脚に力が入らなくなってしまう、耐え切れずにシンジは元のベンチの上に戻った。

「あうっ！……お兄さん、大丈夫ですか？」

「はあ、はあ、大丈夫、うっ……気持ちよすぎただけ……」

どさりと座ったときのショックで体の芯を突き上げられ、体をのけぞらせたショーコだが、その答えに安心したか、再びマイペースで体を揺らし、目を閉じて歓びを貪り始めた。

「ああ……素敵……やっぱり、これが一番暖まりますね……」

ショーコの熱い吐息が顔にかかる。至近距離にある、輝くようなロングヘアを振り乱して肉欲に溺れる美少女に見とれながら、シンジもやがて昇り詰めていった。

「う、ううっ……ショーコちゃん……俺、もう……」

「……そうですか……うふふ、それじゃ……」

一瞬残念そうな表情を浮かべたショーコだったが、ぐっと下半身に力を入れた。括約筋に気合を込めると、強烈な膣圧が再び発動し、シンジの男根を痛いほどに絞り上げた。

「お、おおうっ……」

「ああ～っ……」

たまらず、ショーコのなかでシンジは爆発した。最後の蠢動を感じ取ったショーコもまた、タイミングを合わせて男の体に回した腕と脚に力を含め、密着した全身を硬直させる——ショーコは、見事なまでにシンジの絶頂を演出してくれたのだった。

247 名前： △ [sage] 投稿日： 2007/01/30(火) 22:21:36 ID:+cgiA17b

「ああ……」

「はあ、はあ……ショーコちゃん……本当にしちゃったね……」

「うふふ、お兄さんも暖かくなりました？」

しばらく余韻に浸っていたショーコはやがて微笑を浮かべてシンジの上から降りると、しおれかけた男根からコンドームを取り外して口を縛り、さらに——

ぱくっ。

「うおっ……」

肉棒の先端にべったりと残った白い液体を、ショーコは可憐な口で綺麗にしてくれた。(……な、なんてサービスだ……)

献身的なお掃除フェラに、シンジは感動を禁じえなかった。この娘は、当たり前のようにこんなことをしてくれるのか？

「あ、ありがとうショーコちゃん……でも、本当に大丈夫なの？ 彼氏がいるのに」

「うふ……彼、寝取られに興味持ってるから、この話をすればきっと燃え上がります」

「……寝取られ？ ……あ、そう……」

どうやら彼氏に隠すのではなく、堂々と話して更なるエッチの燃料にするらしい。出来れば内緒にしておいてほしい、いやそれ以前にもう少し一緒に居て欲しかった



シンジだったが、その願いもむなしく、ショーコは立ち上がってブルマを穿いた。シンジはまだ未練を残しながらも、のろのろとズボンを直す。

「あ、もちろんお兄さんの名前は出しませんから、安心して下さいね」

「……そうしてくれ。あと、カナミ達には絶対に内緒で頼む」

「うふふ、そうですね。それと、これは私のほうで処理しときますね？」

先ほど己が放出した男の精を受け止めたコンドーム。ショーコは口を縛ったそれをティッシュにくるんでしまい込む。まさか証拠として彼に見せるんじゃないだろうな、とぼんやり考えながら、シンジは身づくろいを済ませた。

「それじゃお兄さん、本当にありがとうございました。茶巾からも助けてもらって、それに、その……」

ショーコはポッと頬を染めた。

「……その、おかげで体の芯から暖めてもらいました。私は帰りますから……」

「あ、えーと、もう遅いから送るよ」

立ち上がろうとしたシンジだったが、精を絞り出し尽した直後とあってまだ体に力が入らず、よろけて再びベンチに座りこんでしまった。

「ありがとうございます。でも一人で帰れますので……」

ショーコはすっとシンジに身を寄せる。思わずドキリとしたシンジの頬に、ショーコはチュッと軽くキスをしてくれた。

「フフ……本当は、あのまま公園を一周して欲しかったんですよ？」

耳元でそうささやくと、ポッと頬を染めたまま、ショーコは小走りに去っていった。時折、振り向いては手を振るショーコの姿はやがて曲がり角の向こうに消え、軽やかな足音が遠くなっていく。

ベンチに座ったままようやく呼吸を整えたシンジだったが、脳裏からはショーコの上気した微笑みがいつまでも消えなかった。

あの娘の彼氏とやらは、いつもあの体を抱き、あのサービスをさせているのか？

シンジは奇妙な感情が湧き上がってくるのを感じた。心の底から湧き上がってくるこの感情は……どうやら嫉妬だろうか？

(——我ながら勝手なもんだな、彼氏持ちってことは知っていたのに——)

ふと下半身に冷たさを感じてジーンズを見ると、前に数箇所、小さなシミが出来ていた——ショーコが残していったその滴りは、彼女もまた激しく燃え上がった証だった。だが、それも今ではすっかり冷えてしまっている。

突然に襲ってきた寂寥感に身を任せるうちに、彼の意識はぼおっと遠くなっていった。

248 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2007/01/30(火) 22:23:29 ID:+cgiA17b

「お兄ちゃん、朝だよ～」

翌日の朝。階下からのカナミの声に、シンジは目を覚ました。

またしても、股間にテントを作って。

(ショーコちゃんって、実はすごい美人なんだよな……)

シンジの脳裏には、自分の上にまたがり、目を閉じて快樂を貪るショーコの上気した表情が浮かんで消えていた。またもかすかに湧き上がってきた彼氏への嫉妬を、シンジは意思の力を奮い起こして抑えた。

(それにしても……茶巾縛りに、放置プレイに寝取られプレイ?)

一般的とはとてもいえない、彼氏とのお楽しみ内容ではある。アキに変態扱いされているのももっともと言えよう。

(……そう、確かにショーコちゃんは変態かも知れない)

それはそうかも知れない、だが、それでも——。キュッと締め付けられた時に全身を駆け巡ったあの限りない歓びを、シンジははっきりと思い出せた。

(それでも、ショーコちゃんは……凄えいい女だった……)

シンジは心底そう思ったのだった。

(それにしても行きずりの女性と一回限りの深い仲に、ってのも味があるな……次は、そうだ、あの娘で試してみるか……)

シンジの夢はまだまだ続きそうだった。

249 名前： トマソン ◆sZztcRmPbc [sage] 投稿日： 2007/01/30(火) 22:24:35 ID:+cgiA17b

以上。

タイトルは「シンジの夢十夜 ～第六夜 ショーコ編～」で。

次回はミホ編の予定。

250 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/30(火) 23:04:53 ID:VYzJS+HC  
ショーコエロいwいつもGJ!

251 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/30(火) 23:06:44 ID:gtHe0X2n  
トマソン氏GJ!!

いつもいつも乙です

そしてありがとうございます!!!

読む方はのめりこんで一気に読めちゃいますが

書く方はさぞかし大変なんだろうなーと

バカみたいな感想を持ってしまいましたw

夢なのにしっかりゴム着けちゃうショーコが面白いですね

彼女なら中に出させて彼氏の前で開脚してそれを出して・・・とか

寝取られプレイのネタにしそうかもとかw

加藤先生、実はいつの間にか再婚してて

相手の連れ子が5才とか・・・w

252 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/31(水) 00:43:42 ID:rEaTEF87  
GJ!

トマソン氏、筆がノリにノッてる時期ですか?

行く一月、逃げる二月、去る三月と公私ともに忙しい時期に突入となるが、他の職人も無理せずガンガレー

253 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/31(水) 02:07:09 ID:K6lr3cDj  
ショーコの本領発揮か(\*´Δ`)ハアハア

本編じゃシンジと絡む話はほとんどないからね。こういう形での絡み(・▽・)イ!!

254 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/31(水) 11:04:33 ID:XgzaO4mn

こち亀の登場人物は歳とらないが部長の孫は歳とるようなもんだ

255 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/31(水) 12:36:14 ID:wW63hImz

ショーコエロオオオオイ(;^ω^)b!!

256 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/01/31(水) 20:24:03 ID:wW63hImz

前スレ落ちたな……

257 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/01(木) 10:30:58 ID:yB8uOn4n

天寿を全うされたのさ

258 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/01(木) 21:34:13 ID:B0H105YD

ところで、後2週間でバレンタインだな……

チョコの代わりに自分にリボンまいて「私を食べて」ってやりそうな奴はたくさんいるが、一番破壊力(男を落とす力)がありそうなのは誰だろ……

259 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/01(木) 22:29:24 ID:S5fOcDri

男を落とす破壊力が一番あるのはナツミちゃんにきまってるだろ

260 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/02(金) 09:11:42 ID:f/XRWNuX

またエロおもろいのをよろしく!

261 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/03(土) 12:51:19 ID:0qPgN8yz

久しぶりに古田監督の保管庫を読み返したがなかなかおもしろかった

職人ごとに異なる微妙なカラーの違いを読み比べてみるのも楽しい

誰それは真っ向勝負の直球エロパロ、誰それは変化球多投の幻惑エロパロ、

はたまた制球力でボールギリギリをつく幅広エロパロ、小技でペースを持っていく小ネタエロパロ

262 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/04(日) 01:12:31 ID:0ty4MvIn

この時はまだ知るよしもない。職人達は後の石田衣良だった……

263 名前： 郭×伊東 ◆5pkah5lHr6 [sage] 投稿日： 2007/02/04(日) 16:59:41 ID:ALU4z+V+

はい、どうも郭です。

読者諸氏にはなんだか心配をおかけしてしまって申し訳ないです。

て言うか、心配して頂けるだけで感謝ですよ。職人冥利に尽きます。

しばし忙殺されておりましたがトマソン氏の久々の復活作に気合いを入れられたり、

72氏やピンキリ氏の軽快な作品にほっこり癒されたりしていました。

さて、散々延期しまくったアヤナ帰国ものですがよ〜〜やく前半のみですが、

脱稿したので投稿いたします。前スレ>>329の続き。

NGワードは「アヤナのキャラが変わりすぎ」「前フリ長い」「ダラダラ」ですか。では、投下。

264 名前： 郭×伊東 ◆5pkah5lHr6 [sage] 投稿日： 2007/02/04(日) 17:00:21 ID:ALU4z+V+

「…………でも」

「明日の、文化祭のことだから、ね？」

「…………分った」

どこか、わざとらしい、会話だった。ふたりの間には、まだ消えない固さが、澱のように残っていた。

「ごめんください……」

「どうぞ、小久保君」

中学生の頃から何度も訪れた若田部家だが、妙に寒々しい感じがした。

「私の、部屋でね？」

「ああ」

アヤナの後についていくマサヒコ。ぼんやりと、彼女の後ろ姿を見守っていた。

「……あんまりものを持ってきてないんだね、若田部」

「アメリカに行く前に処分しちゃったものも多いし。向こうに置いたままにしておいたのもあるしね」

「ふうん……」

ガランとしているのは、玄関だけではなかった。

マサヒコの記憶の中ではアヤナの部屋にあったはずのぬいぐるみや、リトグラフ、ルームライト——

それらが、ほとんど無くなっていた。部屋の広さが、その寂しさを強調していた。

「でね、小久保君。明日なんだけど、つきっきりでお店に入れるのが、

私と的山さん、それに井口さんと村松さんくらいでしょう？

ウェイトレスのローテーションを考えたんだけど、一時から二時の間がちょっと厳しそうなのよ」

「そっか。柴原はバレエ部でパフェ屋やるって言ってたしな。

男の方もずっといるのは俺と杉内、それに大野に湯上谷と佐々木くらいかな」

「女子も部の催し物とかぶる子が多いしね。今の段階でこれだと確実に足りなくなるわ」

「調理なんかの裏方は俺や杉内たちの5人で回りそうだけど、確かにウェイトレスは厳しいかもな。

その時間帯だと部の出店からなかなか帰ってこれなくて遅れてくる子也多そうだし……」

「だから……ひとつ提案があるんだけど」

「？なんだ？」

「天野さんや、お姉様や濱中先生の力を借りるってのは、ダメ？」

「え！って、それは、お前……」

「実はね、もう三人には話してあるんだ。そしたらみんなOKだって……」

「で、でも、それ、ウチのクラスの連中がなんて言うか」

「女子にはね、的山さんと柴原さんから他校の友達と昔の家庭教師の先生なんだけど、ヘルプを頼むのはどう？って言ってもらって、こっちもOKもらってるのよ」

（濱中先生や中村先生はともかく、よりによってミサキは……）

アヤナの真意が分らずに混乱するマサヒコだが、

彼女はふざけているのでも、からかっているのでもなく、真剣な表情だった。

「あのさ……やっぱり、ミサキはまずいよ。その……俺も他の奴らにからかわれんの、正直嫌だし」

「……そっか。うん、分った。でもお姉様と濱中先生は」

「濱中先生は良いと思うよ。就職活動終わってヒマだってこの前言ってたし。

でも中村先生は本当に大丈夫なのか？平日だし、休めるの？」

「うん、この前ちょっと電話したんだ。そしたら面白そうだから手伝ってくれるって、超ノリノリだったから大丈夫だと思う。私から後で連絡しとくね？」

「ああ、なら……そうだね、ミサキには俺からしとくよ」

「そうね……じゃ、そういうことで。ちょっと待ってて、お茶の用意するから」

「あ、いや、もう話が終わったんなら帰るけど」

「ダメよ。せっかく久しぶりに来てくれたんだから、お茶ぐらい飲んでいって」

やや強引にマサヒコを引止めると、アヤナは部屋から出て行った。  
マサヒコはなんとなく押されるような形で、そんな彼女を見送った。

(しかし……………わかんねーな、女って……………)

マサヒコにしてみれば——アヤナの告白も、アヤナとミサキの再会も、アヤナの今日の発言も。

全てが、自分の思考の許容範囲を超えてしまっているものだった。

なぜ、アヤナは自分のような平凡な人間に好意を抱いたのか。

マサヒコの恋人であり、アヤナにとって親友であるはずのミサキに、なぜそれを告げたのか。

そして——いくら人手不足とはいえ、なぜ、そのミサキに学園祭に来るようにわざわざ言ったのか。

全て、訳の分からないことだらけだった。

(もしかして、若田部、オレのことを好きだっていうのも、冗談で……………なんてな)

§

265 名前： 郭×伊東 ◆5pkah5lHr6 [sage] 投稿日： 2007/02/04(日) 17:01:26 ID:ALU4z+V+

都合の良い希望的観測を思い浮かべてつい苦笑してしまうマサヒコ。

しばらくアヤナの部屋でボー————と彼女が戻るのを待っていた。

(?にしても……………お茶の準備にしちゃ?)

たっぷり30分近くは待たされて、さすがに心配になってきたマサヒコだが——

「お待たせ、小久保君」

「いや、別にそんな……え？」

アヤナを一瞥したマサヒコは、驚いて目を剥いた。

「ミルク入りで良いのよね、小久保君？」

顔を赤くしてそう言うアヤナだが、マサヒコはあんぐりと口を開けたままだ。

なぜなら、そこには——エプロン一枚だけの、アヤナがいた。

そう、いわゆる裸エプロンの状態でアヤナはティーポットと、ティーカップを用意しようとしていた。

「……………? わわわ、若田部ッ!!! お前、そそそ、そのカッコ!」

「砂糖は、要らなかったよね? 小久保君」

ようやく我に返り、マサヒコは慌ててアヤナを詰問する。

しかし顔こそ赤くしたままだが、アヤナはごくごく普段通りの会話を続けていた。

「だだ、だからあ!」

訳が分からないままマサヒコはほとんど叫ぶような声でアヤナに更に問い質そうとするが——

「ズルイのよ、小久保君は」

アヤナは俯くと、ぽつり、と一言、そう漏らした。

彼女の発する静かな迫力に、マサヒコは言葉を呑み込むしかなかった。

「私が勇気を出して好きだって言ったのに、いつまでたってもあなたは何も言ってくれない。

好きだとも、嫌いだとも、何も。天野さんに私があなたに告白したことを伝えたのは、あなたにイライラしたのもあるけど……私が本気だってことを宣言したつもりだったの」

「……………」

「分る? 私にとって、天野さんは一番のライバルで、一番の親友なの。

だから……陰でコソコソしたくなかったのよ。あなたのことが好きだっていうことを、

もうこれ以上隠しているのが嫌だったの。自分の感情を殺したまま、中途半端に引きずったまま、

友達でいられないと思ったから。そっちの方が、自分にも……天野さんにも、嘘をつくことだって……最低なことだって、そう思ったから」  
アヤナの目は、真剣そのものだった。その気迫にマサヒコはすっかり圧倒されていた。しかし、そこはツッコミマスター・マサヒコ。弱りながらも、一応の技は繰り出す。

「あのさ、それは分ったし、悪かったけど、なんでそのカッコなわけ？  
そのあたり、正直訳が分らないんだけど」

「…………グッとこない？」

「は？」

「お姉様に男の子が、えっと……一番グッとくるカッコは？って聞いたら、あの……は、裸エプロンに勝るものはないって…………そ、そういう話だったんだけど」

「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

(ああああああああ、あのメガネええええええ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!)  
卒業以来久しぶりに中村へ全力のツッコミをかます(あくまで心の中で、だが) マサヒコ。

「グッと……こないんだ…………私がここまでしてもダメってことは、やっぱり小久保君、私のことなんて…………う、ううッ」  
だが、アヤナとは言えばいきなり悲しげな表情になると目尻に涙を浮かべ…………今にも泣き出しそうな顔になってしまっていた。

「わ！待て、若田部！」

そんな彼女の様子を見て、放っておけないのが天然フェミ男・マサヒコである。泣きかけのアヤナに慌てて近づくと、必死で言葉を続けた。

「あのな、グッとくるとかその、意味がイマイチわかんねーけど。

若田部はそんなカッコしなくても十分美人だし、別に泣くことは」

「うッ…………だって、だって。恋愛のことなら百戦錬磨のお姉様が、どんな男でも裸エプロンの女の子を見れば100%グッとくるって言ってたのに。実際、豊田先生だってどんなに仕事で疲れていても裸エプロン見ると元気になるって」

「…………お前は中村先生に毒されすぎてると思うぞ」

「??」

知りたくもない中村&豊田の性生活の実態を聞かされ、げんなりと疲れてしまうマサヒコ。

§

266 名前： 郭×伊東 ◆5pkah5lHr6 [sage] 投稿日： 2007/02/04(日) 17:03:39 ID:ALU4z+V+

アヤナはまだ半泣きのままだが、マサヒコの言葉の意味を掴みかねているのか、頭に疑問符を浮かべて不思議そうな表情だった。そしてそんな彼女の様子を見て――

(グッとこねーわけ、ねーじゃん…………)

そう、いくら仙人マサヒコといえど、実は先ほどから既に非常に危険な状態になっていたのだった。

なにせスタイル抜群の、あのアヤナの裸エプロンである。

さきほどから彼女が涙を拭おうと手を目元に動かしたり、体を動かすたびに、

豊かに盛り上がった乳房がエプロン越しにぷるぷると揺れ、

しかも幸か不幸かエプロンの布の生地が薄いために、乳首がくっきりと浮き立って――マサヒコは、目のやりどころに迷うどころではなくなっていた。

(イカン…………このままでは、イカン)

常人ならば既に欲望がスパークしていてもおかしくない状態だが、自制心を120%増しに活動させ、マサヒコはアヤナに向き合った。

「あのな、若田部。オレは、お前のことが、好きだよ」

「！」

「ずっとさ、思ってた。この子は、オレらなんかとは住むとこの違う子なんだって。きっと……十年か、それくらい後に出会ったら、話しかけることさえできなくなるような、

そんな女の子なんだって。正直、あの頃……いや、今でもオレはそう思ってるんだ」

「……そんなこと」

「覚えてるか？三年の頃の、人気投票の話」

「？あ、男子の体育が自習になったときに女子の人気投票をして、後で豊田先生に怒られたって、その話？」

「ああ。聞いているかもしれないけど、お前、ブッチギリで一番人気だったんだ」

「でも本当は、それ、違うよ。私、中学の頃は一回も告白されたことなんて」

「分るんだよな」

「？なにが？」

「怒らないで聞いて欲しいんだけど……若田部ってさ、どっか憧れの存在なんだよな。だから告白することも、迷っちゃうっていうか。お前に惚れてた奴は、やっぱりいっぱいいたと思うよ。

でもな、お前はやっぱり特別なんだよ。だから、みんな」

「……あなたも？」

「え？」

「小久保君も、そうだったの？私のことを……そんな風に、思ってたの？」

「ああ。なんて言うかさ。オレはお前のこと、普通に友達だって思ってたけど。でもオレがお前と普通に話してんのを、みんなはすごく羨ましそうに見てたんだよな。それにあるとき気付いて……オレ、お前はやっぱり……」

「どうして？ねえ、小久保君。私だって、普通の女の子だよ？

生理にもなるし、汚い話だけど病気になれば吐いたりするし、下痢になったりするよ？」

「お前の言うことも分るんだけどさ。でも」

「それに……するよ？小久保君のことを考えて、は、恥ずかしいことも」

「は??????」

「するの……昨日も、したし。あなたのことを思って。本当は……さっきも、作業をした小久保君を見て、我慢できなくなって……トイレで、しちゃった」

「???あ！」

アヤナの言わんとすることをようやく悟り、仰天するマサヒコ。

しかし彼女は顔を真っ赤にしたまま、なおも続けた。

「あなたに、ずっと避けられてて、私はすごく悲しくて、寂しかったの。

……でもね、それなのに、なんでか分らないんだけど、すごく、え、エッチな気分になったの。

昔お姉様にそういうことのやり方を習って、したこともあったんだけど、

そのときは全然気持ち良くなかったのに……あなたに冷たくされてるのに、私、

なんだかヘンな気持ちになっちゃって……それで、ぬ、濡れて来ちゃって……

我慢できなくなって……学校のトイレでするなんて、恥ずかしくて、もし見つかったらと思うと怖くて。

でも凄く興奮しちゃって……しちゃったの。あなたのことを考えて。それも、何度も、何度も。

本当は……さっきキッチンに行ったときも、我慢できなくなっちゃって……したから、ホラ」

アヤナはそう言うのと——両手でエプロンの裾をつかみ、ゆっくりと下から捲る。

「わ、わかた、べ……………」

制止することもできず、ただ呻くように呟いてマサヒコは彼女の動きを見つめた。

§

267 名前： 郭×伊東 ◆5pkah5lHr6 [sage] 投稿日： 2007/02/04(日) 17:04:45 ID:ALU4z+V+

ミサキの静脈が透けて見えるほどの白さとは違う、健康的なピンク色の肌。

恥じらいゆえか、裸の下半身はほんのりとさらに赤く色づいていた。

そして髪の色と同じ、紅茶色の恥毛がふわりと中心に生い茂っていた。

“ごくッ”

マサヒコは、思わず唾を飲み込んだ。喉が、カラカラに渴いていた。

はっきりと分るくらい、アヤナの恥毛には透明な滴がまとわりついて光っていた。

「濡れてるでしょう？小久保君、私……」

「だ……ダメだよ、若田部」

「濡れてるのは……あなたのことを、考えていたから。あなたの腕に、抱かれることを。

あなたの唇で、キスされることを。あなたの指に、触れられることを……」

裾から手を離すと、そう言いながら胸元に手を乗せてアヤナは目を閉じる。

その表情は、しかし、決して淫猥なものではなかった。

むしろ——神への、敬虔な祈り。そんな表情のようにマサヒコには見えていた。

「あなたに、触れられて……あなたに、愛されることを思って、

私は毎日のように、自分を慰めていた。それが終わった後、虚しくなるってことが分っていても。

こんな風に、あなたのことだけを思って……………私は」

“くちゅ……………”

アヤナが、右手の指先を自分の茂みの中へと這わせる。そこから、小さな、湿った音が漏れた。

「わ、わかた、べ」

“くちゅ……………ちゅ”

マサヒコが凝視していることにも構わず——いや、むしろ彼の視線を意識して、

気持ちを高ぶらせながら、アヤナは茂みの中の泉を掻き混ぜ続けた。

「あ……毎日……毎日。あなたに、避けられていても、止められなかった。

時には、あなたと天野さんが、愛し合っている場面を想像して、うん……こんなことをしていた。

私は……住むところの違う、女なんかじゃない。憧れの存在でもないし、特別なんかじゃない。

あッ……ただの、女なの。ホラ、見てよ、小久保君」

アヤナが自分の中から指を抜き取ると、手のひらを広げてかざしてみせた。

「……………」

呆然と、マサヒコはそれを見た。アヤナの指先には、べったりと半透明の愛液が付着していた。

部屋の灯りに反射して、それは鈍い光を放っていた。

「見てよ……………小久保君」

アヤナはひどく淫靡な笑みを浮かべて——人差し指と親指をくっつけたり、離したりした。

そのたびに、指と指の間にねっとりとした糸がかかり、にちゃにちゃとしたいやらしい音が響く。

「これ……これがね、あなたのことを考えるといつも……私のあそこから出てくる、恥ずかしい液」



そしてそのまま――

“ぷちゅ…………く、くちゅ”

指先を自分の口元へと運ぶと、うっりと、淫蕩な微笑みを浮かべたまま、それを口に含んだ。

「あ……………」

マサヒコは何も出来ず、ただ彼女を見つめることしかできなかった。

目の前の出来事が、信じられなかった。

あの、誰よりも潔癖性だったアヤナが、茂みの中から愛液を掬って口に含み、くちゅくちゅと口の中で転がしている。――どうしても、信じられなかった。

(夢……？これは、夢、なのか？)

「夢じゃ、ないよ」

マサヒコの思考を読んだかのように、アヤナが囁いた。

「これは、夢じゃない。あなたが、いる……小久保君……」

潤んだ目でアヤナがそう言うと、エプロンを脱ぎ去った。

「あ……………」

ふるり、と豊かに実った大きな乳房が目飛び込んできた。

先端には、赤く色づいた、ぽっちりと小さな乳首。きゅっと絞られたウェストライン。

健康的に肉づいた両の太腿の間に咲く、薄い色素の茂み。

言葉を発することすら忘れ、マサヒコはアヤナの裸体を見つめていた。

「夢じゃないよ…………ホラ」

アヤナがマサヒコの手を取って自分の乳房の上にのせた。少しだけ、汗の冷たさを感じた。

どくっ、どくっ、と心臓が脈打つ音が、手のひら越しに、聞こえた。

§

268 名前： 郭×伊東 ◆5pkah5lHr6 [sage] 投稿日： 2007/02/04(日) 17:05:38 ID:ALU4z+V+

「私は…………ここにいる。あなたが…………ここにいる。これは、現実だよ。小久保君」

そう呟いた後、アヤナはマサヒコの手を自分の口元に、寄せた。

“ちゅ…………ぴちゅ”

そして愛おしそうに口に含むと、舌先で絡めるように――マサヒコの指先を、舐め続けた。

(あ……あ…………わかた、べ…………)

舐められているのは、指先のはずだった。それは、分っていた。

しかし、指先を舐められるたび、マサヒコはびりびりと痺れるような快感に貫かれていた。

ペニスを舌先で舐られているような、弄ばれるような、錯覚。

ミサキにフェラチオされたときよりも、遙かに強烈な快楽だった。

“くちゅ…………きゅちゅ”

舐め続けながら、アヤナは左手を自分の茂みの中へと潜らせ、潤んだそこを掻き混ぜる。

「小久保君…………舐めて……私の、恥ずかしくて、エッチな……」

そして、指先に付着したそれを、広げて見せた。

先ほどより、それはずっと、湿り気を帯びて――ずっと、濡れているように見えた。

「……………」

「いや？私のを、舐めるの」

“ちゅぶ”

マサヒコはアヤナの言うがまま、彼女の愛液でべっとりと濡れた指先を口に含んだ。

ほんの少し、塩の味が口の中に広がる。

「嫌なんかじゃない……………若田部の、指……………可愛い」  
「舐めて……………それは、私の、だから……………私、だから」  
“ちゅふう……………るう”  
“くっちゅ、ぷちゅ……………”

ふたりは、取り憑かれたように互いの指を舐め合う。  
やがて指先は、唾液でまみれてふやけてしまうほどになったが、ふたりは、なおも舐め続けた。

“ “くっふ……………” “

どれくらいの時が過ぎただろう——ようやく舐めるのを止め、ふたりは、見つめ合った。

「小久保君……………私を……………愛して、ください……………」

「……………いいのか？若田部」

「いいの。小久保君になら、全部……………私の、全部……………いいから」

マサヒコには、まだ恋人であるミサキへの背徳感が消えたわけではなかった。

(オレは……………若田部が……………)

だが、マサヒコは自覚していた。ここまで、迷ってきたのは。

アヤナを傷つけるのが、怖かったからでも——

アヤナとミサキの友情が、壊れてしまうのをためらったからでも——

本当は、どれでも無かった。マサヒコは、ただ、怖かったのだ。

——自分の感情に、正直になることが。

——アヤナのことを、友人以上だと思っていたことを、認めるのが。

(オレは……………オレは、本当は、若田部のことを……………)

「好き……………私は、あなたが、好きだから。ここで……………いま……………」

アヤナが、抱きついてきた。マサヒコは、生まれたままの姿の彼女を受け止める。

柔らかな、重さ。アヤナの、体温。伝わる、鼓動。

至近距離に、赤く、熱っぽい表情のアヤナ。無言のまま彼女は、

“ちゅッ”

マサヒコに、キスをした。唇の熱さを、感じた。体温より、明らかに熱かった。

「好き……………小久保君。私は……………ずっと、あなたが好きだった。

あの、金魚をもらった日から。あなたの家の玄関で、押し倒されたときから。

足を挫いたときに、保健室に連れて行ってくれたときから。ずっと……………」

「若田部……………オレも、好きだった」

「……………本当に？」

「すごく……………キレイな子で、頭も良くて、みんなの憧れの存在だったけど、

オレはお前と一緒にいると、楽だったし、面白かったし。でもそれだけじゃなくて、

なんて言うか、ミサキや、的山や、濱中先生と違って、ちょっとドキドキする感じもして……………」

「私も……………小久保君と一緒にいると、楽しかった。それに、私も同じ。ドキドキしたり……………」

他の男子とは……………そんな気持ちになったこと、なかった。あなた、だけだった」

§

269 名前： 郭×伊東 ◆5pkah5lHr6 [sage] 投稿日： 2007/02/04(日) 17:06:27 ID:ALU4z+V+

今回は以上。嫁にも指摘されましたが私の書くアヤナって変態っぽくなりますね。

今回も青春モノっぽくするつもりがこれだもんなあ。ていうか、セックスまでの過程って難しいです。

これもほとんど完成しかけたのを没にしたくらい手直ししてるんですけどね。



「だから、何でプールなんだ」

「ここ温水プールじゃない。夏には温水プールなんて入らないでしょ」

「いやちょっと待て、さっきの屁理屈と完全に矛盾してないか？ 冬だ冬だって言うんなら、スキーだって」

「はいはい、いらんおしゃべりはここまでよ。来た以上は楽しむ、それ以外に何かある？」

「自分が来たかっただけだろ、結局」

東が丘アミューズメントプール、それは市内で最も巨大なレジャーランドだ。巨大と言っても、全国的に有名なその手の施設から比べると、その規模は遥かに小さい。屋外の遊泳プールはそれなりの大きさだが、隣接している屋内プールは至って普通のありふれたものだ。

競泳用50メートルプールがひとつ、そして幼児用の丸型プールがひとつ、サウナがひとつ。

「久しぶりだね、ここに来るの」

「あー、私が下着を持ってくるのを忘れた時だよ」

「あの時は外のプールだったけど」

「てか、俺達受験生だったんだよな、何考えてたんだか」

マサヒコはリョーコの身勝手さにまだ釈然としていないようだったが、彼以外は全員まんざらでもない様子である。

その証拠に、リョーコ以下、女性陣は全員新品の水着を着用していたりなんかする。

「マサヒコ君、見て見て」

アイはマサヒコの前に立つと、まるでグラビアアイドルのようにポーズを決めてみせた。

「どう？ エロカッコイイ？」

「……ええ、凄いです。相変わらず、いくら食っても変わらないその身体が」

アイが身に着けているのは、目にも鮮やかなブルーのビキニ。

マサヒコの言う通り、実に見事なプロポーションだ。

最も、アイにしてみれば、ちゃんと食生活には気を使っているらしいのだが。

275 名前： ピンキリ ◆UsBfe3iKus [sage] 投稿日： 2007/02/05(月) 00:34:21 ID:kp18Lwi1

「……」

マサヒコは何とはなしに周囲を見回してみた。

他にも結構客が来ているが、女性はかなりの割合でビキニが多い。

アイの他、リョーコ、ミサキ、リンコ、そしてアヤナも全員ビキニタイプの水着だ。

ちなみに、本来は屋内プールは競泳用水着以外は不可である。

今日は市政何十周年の記念期間内ということで、特別に解放されているのだ。

「気をつけて泳がないと、危ないかもしれないわね」

マサヒコと同じく、周りにぐるりと目をやったアヤナは呟いた。

「何で？」

のほほんとした口調で、リンコがそれに問いかける。

「人が多くて、体がぶつかると」

「あー、ポロリやお触りがあるもんねー」

「……怪我するかもしれないからよ」

この時、マサヒコとアヤナは気づかなかったが、屋内に入ってきてから、かなりの数の視線がマサヒコ達に降り注いでいた。

特に若い男性のが、だ。

アイやアヤナ、リョーコの見事な身体を鑑賞している者もいれば、

スレンダーなミサキやリンコに熱い視線を送る者もいる。  
そして何より、五人もの美しく可愛らしい女性と一緒にいるマサヒコに対する、嫉妬の目。

何だアイツ、背も高くないし顔だってちょっといいって程度じゃねえか、それなのに……  
というわけだ。

「あら、ミサキ」

「何ですか、中村先生？」

「アンタ、またパレオを巻いてるのね」

「水着とセットになってたんです」

「そう、私はまた手入れをしてこなかったのかと思ったわ。下の」

「……ファッションですから」

かつて交わした会話とほぼ同じ内容。

ここで途切れていれば、それこそ全く前回と違いはなかったのだが。

「えー、ミサキちゃん、お手入れしてこなかったの？」

「リンちゃんまで……だから違うってば」

横合いから繰り出される、空気が読めないと言うより、  
端から空気が存在していることさえ知らないのではないかといった感じの天然丸出しなリ  
ンコの問いかけ。

そして、ここから果てしなく脱線していくのは、お約束と言うより最早鉄板なわけで。

「的山さん、いくら何でも失礼過ぎるわよ」

「えー、でも私、お手入れしたことがないから、どんなのかなーって」

「……」

「アヤナちゃんはしたことあるの？」

「な、わ、私は、その、あの」

「んー、でもアヤナちゃんの水着、特別際どいってわけじゃないから、必要なかった？」

「リンちゃん、そろそろやめて」

「このメンバーの中だと、ミサキちゃんとアイ先生が濃そうだよねー」

「え、わ、私？ 私はその、ちゃんと手入れしてきたから」

「わ、私は濃くない！」

「ちょっとアンタら、何をしゃべってんの」

「そ、そうよ的山さん、こんな公衆の面前で」

「いいこと、濃い薄いの問題じゃないのよ。剃るところは剃る、剃らないところは剃らな  
い。それだけ」

「な、お姉様、そういう話じゃ」

「ツルツルだとヤル時に擦れて痛いよねー、逆にモジャモジャだと絡まるし」

「ああああああ」

「ま、私は定期的に剃ってるけどね。プレイで」

「いい加減にして下さい！」

まったくもって、年頃の娘が表でするような会話ではない。

ここが小久保邸なり天野邸なりであれば、マサヒコもビシバシと突っ込んでいたところだ  
が、

さすがに衆目のあるところでは、勇気と行動力の問題で不可能。

明後日の方向を見て、我は無関係也という態度を示すに留まる。

276 名前： ピンキリ ◆UsBfe3iKus [sage] 投稿日： 2007/02/05(月) 00:35:41 ID:kp18Lwi1

「ちょっとマサ！」

だが残念、リョーコはこういうところは極端に目ざとい。

ジリジリと輪から離れつつあるマサヒコを見咎め、呼びかける。

「集団行動を乱すんじゃないわよ、もういい歳なんだから」

破廉恥な会話をするののどこが集団行動なんだ、とマサヒコは思ったが、やはり突っ込まない。

「ま、アンタは男だしそんなに毛深いほうじゃなさそうだから、気にしないかもしれないけどさ」

「はあ」

「で、どうなの？ ミサキは濃くない、あくまでファッションだって言ってるけど」

「ミサキは別に濃くありませんよ」

「……ふーん。そういうことだつてさ、皆」

リョーコはギラリと瞳を妖しく輝かせ、悪女の顔でニタニタと笑った。

「え？」

マサヒコは一瞬、リョーコという言葉の意味がわからなかった。

しかし、固まって石になったミサキを見て、今の質問の真意を理解した。

「あ、あっ！」

「んふふふ、そうよねえ。ミサキ以外に濃いか薄いかを知ってるのは、ここだとマサしかないもんねえ」

「な、なななな」

リョーコは考えて罨を張る策士タイプではない。

その時その時、瞬間的に行き当たりばつたりの、相手にボロを出すように仕向けるヤマ師タイプ。

その事をよく知っているはずなのに、またこうしてマサヒコは迂闊にもひっかかってしまった。

「あー、そっか。小久保君はミサキちゃんにつきあってるんだもんね」

「ふ、ふ、風紀が乱れてるわ！」

「マサヒコ君、もう大人なんだ……」

マサヒコがミサキと恋人同士なのは、アイ達も当然知っていた。

だが、どこまで進んでいるかまでは知っていなかった。

そして今、それを知った。

「う、うわああああん！」

「な、このメガネーッ！」

「わははは、別にいいじゃん。知られて減るもんじゃなし」

泣き出すミサキ、怒るマサヒコ、そして高笑いするリョーコ。

周囲の男どもから彼らに注がれる視線が、鑑賞と嫉妬から別のものへと変化した。

あいつら何を騒いどるんじゃ、と。

季節を問わずところ構わず。

楽しく騒々しくいやらしく。

春夏秋冬、四季にあふれた日本のとある町で、年を通して美しい花々が咲く。

その鮮やかさは決して色あせることはなく。

そう、彼らの関係は常に変わらず――

F I N

以上です。

次はエロ方面強化で「ハッピー（セックス）ライフ」の続きか、  
微エロであかほんのカルナと濱中世界のクロスかのどちらかになると思います。

278 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/05(月) 02:22:07 ID:cb1ChyT3

濱中ワールド満載の展開が(・▽・)イ

やっぱり濱中はこうでなくては(\*^A`)

279 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/05(月) 04:04:37 ID:7e139h8j

寝る前にちょっとチェックするだけのつもりが、色々と起きちまったぜ！

職人の方々、GJ！

280 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/05(月) 17:50:21 ID:mcmxW6wN

郭氏GJ！

アヤナエロカワイイよアヤナ

281 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/06(火) 08:12:28 ID:xSolYCir

プリンセスプリンセスはプリプリ

ジュディアンドマリーはジュディマリ

モーニング娘。はモームス

やっぱトリプルブッキングも「トリブー」と略されてんだらうか

それかTBで「ティービー」？

282 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/06(火) 09:09:07 ID:R/eAWPlid

トリキン

283 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/07(水) 00:15:35 ID:vccOQE/V

リップキンとかプルキンあたりはどうだろう

284 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/07(水) 02:40:25 ID:ZSZ3xxhF

ナプキン

285 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/07(水) 19:13:07 ID:Fo3Mcp7U

オナ禁

286 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/07(水) 21:38:38 ID:cAYKdLbb

ピンキリ氏。卑猥、卑猥よー、マサちゃんたら「別に濃くない」なんて一体何と

比較してるのー！！

287 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/08(木) 17:09:38 ID:RGpwIsDi

お風呂に浮くんだよな

288 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/08(木) 19:50:00 ID:fvasleu3

ティッシュの先が？

289 名前： ミサキ [sage] 投稿日： 2007/02/08(木) 23:14:20 ID:LilSayhB

>>286

Σ(°Δ°)!?

(°Δ°)

290 名前： マサヒコ [sage] 投稿日： 2007/02/09(金) 00:07:57 ID:RGpwIsDi

違う！

濃くないと思いますよ、ってことだ！

何考えてんだ、違うってば！

コラメガネ、笑うなあ！

291 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/09(金) 08:24:24 ID:Tgwj8Lxz  
ママンと比較したんだよ

292 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/09(金) 18:03:08 ID:a8zpCL5+  
それはそれで色々と問題ありそうなk

ああ、幼い頃一緒にお風呂入った時の記憶とかか？

293 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/09(金) 20:42:40 ID:I9JyxO0r  
ママンが風呂に閉じこめられたとき見ただろう。

294 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/09(金) 23:00:51 ID:wFEpAtem  
アイセンスが便座にはまった時も見ただず

295 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/10(土) 00:43:24 ID:M8jbPY3N  
つまり、ママンとアイセンスはミサキチより濃い、と

296 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/10(土) 11:15:38 ID:1PFk3cuA  
どうせそのうち全員のをみるよ。

297 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/10(土) 14:16:05 ID:zc9My2pA  
>>296 リョーコはそんな女じゃない！と思う。

298 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/11(日) 13:22:16 ID:/Q+jpqJf  
さて、もうすぐバレンタイン監督の日なわけだが

299 名前： 名無しさん@ピンキー [age] 投稿日： 2007/02/11(日) 22:15:31 ID:JalEdPKs  
マサとシンジは何個もらえるだろうか

カズヤは…その、頑張れよ

郭氏の作品続きが楽しみだあ

300 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/12(月) 01:13:40 ID:DxjdFbcP  
この静けさは性バレンタイン祭の前兆か

301 名前： 72 ◆jQvWLkj232 [sage] 投稿日： 2007/02/13(火) 00:12:51 ID:70RqD3r1  
ちょっと寂しいので、今5分で思いついたネタを投下します。

タイトルは「運命の日まであと二日」で。

302 名前： 72 ◆jQvWLkj232 [sage] 投稿日： 2007/02/13(火) 00:14:37 ID:70RqD3r1  
—それは2月12日の午後、休日の小笠原高校の一室にて—

「さて、小宮山先生！」

「ん…なに、ミホ？」

「バレンタインまであと少しですね！」

「ああ、そう言えばそうね。

…で、今年(?)はどうするの？今回も(?)城島君にチョコあげるの？」

「え、えと…今年?…っていうか…今回こそは?…っていうか…

と、とにかく先輩に私の気持ちを伝えます！！」

「ん…ま、細かいことはいいわ。

で、どんなチョコあげるかは決まった？」

「い、いえ…それがまだ…決まってないんですが」

「ふーん…じゃあこんなチョコはどう？」

そう言うと小宮山は、自分の机の引き出しから謎の黒い物体を取り出す。

その手に握られているのは—



「！？それって…男の人の…」

「ふふ…チョコそっくりよね？」

昨年(?)のバレンタインで、私の知り合いのコが作ったんだけど。

今年もちよっと遊びで作って貰ってね。なかなかよくできてるでしょ？」

「は…はあ。で、これを私にどうしろと？」

頭にハテナマークが浮かぶミホに、小宮山がニヤリと笑う。

「どうするって…決まってるじゃない。

渡す直前にコレを股間に挟むのよ！！」

「は あ ？」

「んで、城島君の前でスカートをたくし上げながら、

『実はワタシふたなりなんです』って言って渡せ「イ ヤ で す」

「…渡せ「だ か ら イ ヤ で す ! !」

—そんなこんなで、時間だけは無駄に過ぎていくのであった。

(おしまい)

303 名前： 72 ◆jQvWLkj232 [sage] 投稿日： 2007/02/13(火) 00:17:01 ID:70RqD3r1

以上です。お目汚し失礼しました。

チョコチョコの詳細が分からない方は

去年のバレンタインに書いた拙作「シンジのバレンタインデー」をご覧ください。

それではまた。

304 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/13(火) 00:19:26 ID:AZQkHWpI  
G J !

305 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/13(火) 00:56:42 ID:wcrPQDdX  
乙です！

しかし実際のところそんなところに挟まれた

チョコが欲しいかといわれればそりゃほし ( r y

306 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/13(火) 03:50:49 ID:9uMU3Brp  
折れは酢又より杯図利の邦画………

307 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/13(火) 12:16:07 ID:iPOkCOLg  
だがミサキチやリンコ、カナミ、マナカ、シホ、ユーリでは牌刷李ができない…

308 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/13(火) 13:51:27 ID:JH2Q0xqD  
しかし敗豆裡がそんなにいいものとは思えない織れとしてはまだ酸俣の萌芽……

309 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/13(火) 23:31:41 ID:AZQkHWpI  
宮本先生のパイズリ最高だよ

310 名前： ピンキリ ◆UsBfe3iKus [sage] 投稿日： 2007/02/14(水) 00:59:36 ID:V59TrOjR  
職人の皆さん、古田氏、お疲れ様です。

妹でバレンタインデーネタです。

スルー対象ワードは「マナカの官能小説ネタ」「猥談」です。

題は『バレンタインデーのバカーッ！』でお願いします。

では投下↓

311 名前： ピンキリ ◆UsBfe3iKus [sage] 投稿日： 2007/02/14(水) 01:01:01 ID:V59TrOjR

2月14日、それはバレンタインデー。

暖冬に拍車をかけるアツアツな日である。

しかし、同時にモロに勝ち組と負け組が分かれる日でもある。

ふざけんじゃねーと製菓会社や聖バレンティヌスに文句を言っても、それはまったくの無意味にして虚しい行為だ。

さて、贈るチョコレートだが、これは別に本命のみが相手とは限らない。

俗に言う、義理チョコなる風習が日本にはある。

一説に寄れば、昭和60年前後から始まった習慣であるという。

大好きな女の子から貰えない、そもそも女の子から貰える気配がない男子にとっては、アリガタイことではあるが、

これにより、ぶっちゃけ勝ち組と負け組の差がさらに開いてしまったのも事実だったりする。

イケメン男子のもとに続々と集まってくる本命と思しきチョコ、

そして、それを横目で見つつ、油性マジックペンで『クラス女子全員より』と包みに書かれたチョコの封を切り、

ポソポソと義理チョコを惜しみながら食うその悲しさは、言葉ではとても表現出来ない。

六本木ヒルズに居を構えた青年実業家も、世界で成功したスポーツマンもどうでもいい。

この格差をどうにかしろ、神様アンタは不公平だ、

母ちゃん父ちゃん、何で俺をこんな顔に産んだんだ……。

モテる奴はモテる、モテない奴はモテない。

これぞまさに格差社会、恐るべきバレンタインデーの実態なのだ。

さあ叫べ、「バレンタインデーのバカヤロー」と。

「ねー、こんなもんでいいかな」

「あ、いいんじゃない？」

「アキさんにしては上出来ですね」

「途中で一回ミスって、ヘラを宙に飛ばしちゃったけれどね」

時は2月の12日、振り替え休日。

場所とはある市とある街の城島邸。

そこでは四人の女子高生が、まさにバレンタインチョコの手作り真っ最中だった。

すわ、意中の男子がいるのか、と言えば、実はそうではない。

クラスの女子全員の決議により、バレンタインデーにはクラスメイトの男子に義理チョコをあげることになったのだ。

純粋な博愛精神から、では、残念ながらない。

当然この機会に彼氏ゲットを狙っている女子もいるわけで、言ってみれば本命チョコのカモフラージュだ。

その証拠に、クラス内でも料理の上手な子に義理チョコ作りを全て押し付け、

ハンター組は早々に本命チョコ購入に走ってしまった。

そして、押し付けられたのがこの家の住人、城島カナミだったりするわけだ。

312 名前： ピンキリ ◆UsBfe3iKus [sage] 投稿日： 2007/02/14(水) 01:02:54 ID:V59TrOjR

「ショーコちゃん、ラップと麺棒を用意して」

「りょーかい」

「棒、というところか卑猥ですね」

「食べるモノを作っているときにその発言はおかしい」

カナミの他、本命不在のアキ、マナカ、そして現在色んな意味で熱烈恋愛中のショーコ

の四人が集まり、  
こうして義理チョコをせっせと作っている。

なお、彼女らが作ろうとしているのはココア味のスノーボールだ。  
材料はバター、薄力粉、ココア、アーモンドパウダー、グラニュー糖、そして白い粉砂糖。

まず、ココアと薄力粉を混ぜる。

次に、バターを柔らかくなる程度に温め、ヘラで崩し、泡だて器でクリーム状になるまでかき混ぜる

そこにグラニュー糖を加えてまたひと混ぜ、

さらにココアと薄力粉を練ったものを放り込んで、しっとりするまでもうひと混ぜ。

出来上がったものをラップにくるみ、麺棒で厚さ1cmくらいに薄く伸ばし、冷蔵庫に入れて30分冷やす。

30分後、冷えた生地を適当な大きさに切り分け、一つひとつ掌で丸める。

このボールを、オーブンシートを敷いた天板に乗せてオーブンに突っ込み、170度前後の温度で約20～25分焼く。

焼きあがったものを室内で自然に覚まし、熱さがとれたら粉砂糖を雪のように振り掛ける。

はい、これで出来上がり。

「それじゃこれを冷蔵庫に入れて」

「そして、先に冷やしておいた方を出すのね？」

「そうそう」

「じゃ、それを切り分けましょう。あ、アキさんはいいです。指を切るといけないので」

「そこまで信用ならんか、わたしゃ」

ところどころで料理下手をネタにマナカがアキをイジクが、  
特に陰悪な空気になることなく、義理チョコ作りは着々として進んでいく。

「切れた？ じゃ、丸めようか」

「オッケー」

「……アキちゃんアキちゃん」

「ん？ 何、カナミ？」

「はい、でっかい黒乳首」

「……やると思ったよ」

「アキさんアキさん」

「今度はマナカか」

「はい、でっかい黒クリトリス」

「やめろ」

「ねえアキ、アキ」

「ショーコまで……待て、アンタはやめとけ」

「はい、大きな鹿のフン」

「……よかった、まだ理解出来るネタで。いや、食べ物にそのネタはもっとヒドイか」  
とまあ、料理下手以外にもアキをイジクする三人なのだった。

313 名前： ピンキリ ◆UsBfe3iKus [sage] 投稿日： 2007/02/14(水) 01:04:20 ID:V59TrOjR

「は一、これであとは順次オーブンで焼いて、包装紙にくるむだけだね」

「うん、ありがとう三人とも。手伝ってくれて」

「いいよ、今日は特にすることもなかったし」

「しかし、ある意味悲しいものですね。バレンタインを前にして本命ならぬ義理チョコ作りとは」

「あら、私はちゃんと本命チョコを用意してるわよ？」

「へー、どんなの？」

「ここじゃ見せられないわね」

「……想像ついた、もういいよ」

「肌にチョコレートを塗って、私を食べて、って」

「やっぱりか」

義理チョコ作りも一段落し、四人は居間でちょっと遅めのティータイムを取った。ここでファッションなりアイドルなりの話になれば、年頃の女の子らしくてかわいいのだが、

そうはならないのがこの面子であるからして。

「奇遇ですねショーコさん」

「え？ どういう意味、マナカ？」

「実は、今書きかけの官能小説にも、そのシーンが出てくるのです」

「そのシーンって、つまり身体にチョコを塗って……」

「そうです。題は『蕩ける褐色の肌・女子高生編』」

「へー、おもしろそう」

「いや、おもしろくないと思う」

「今、その書きかけの原稿を持ってきているんです」

「あ、読みたい！ 聞かせて！」

「読みたくない聞きたくない、てか、何で持ってきてるんだ」

「作家を目指すもの、常にネタノートと筆記具は要携帯なのです」

女子同士の猥談は、時として男子以上にエゲツなく生々しい。

しかも、アキを除く三人は、レベル的に同世代をブッチぎってしまっているわけで。

「まだ途中なんですけど、焼きあがるまで時間がありますし、披露させていただきます」

「わーい」

「マナカ、文章上手いもんね」

「……おかしいよ、アンタら」

オーブンの中では丸いココアボールがジリジリと焼かれている。

冷蔵庫の中では、次に焼かれるココア生地が冷やされている。

そして、居間の中では、マナカの官能小説が花開く――

314 名前： ピンキリ ◆UsBfe3iKus [sage] 投稿日： 2007/02/14(水) 01:05:43 ID:V59TrOjR

……私はチョコレートクリームをすくうように手に取ると、それをべったりと掌に塗りたくった。

みるみるうちに、私の両腕が茶褐色のどろりとした液体に覆われていく。

「これで……シゴいてあげるね」

雄々しくそそりたった彼の太くて長いペニス、それに、チョコレート塗れになった手を添える。

ちゆく、という、ローションにも似た音が、掌を動かす度に耳に届いてくる。

「うふふ……なんか、ポッキーみたい」

私の両腕と同じく、チョコレートに包まれた彼のペニスを、優しくシゴく。

そう、料理をするかのように優しく、そして細やかに。

「うう……」

彼の気持ち良さそうな声。

「あは、玉までチョコ塗れになっちゃった……チョコボールだね」

ペニスから玉へ、そして太股へと零れ落ちるチョコレートクリーム。

それを、私は顔を近づけて、舌で舐め取っていく。

「ううん……おい、し」

ぺろ、ぺろ。

太股の次は玉、玉の次は竿。

「はむ、ふむ……ちゆく、ぷちゅ」

シゴいてあげるつもりが、何時の間にかフェラチオになってしまった。

まあ、この辺りの適当さは毎度のことだ。

「れろ……みゅ、はむう……はふ」

普段とは違う彼の『味』、それは、私を悦楽の世界へと誘う導入剤。

一心不乱に彼のペニスを舐め、吸い、啜える。

「ふふ……キレイになった」

自分で塗っておいて、キレイになったも何もないのだが、

とにもかくにも、彼のペニスはチョコレートクリームに覆われる前の状態に戻った。

いや、正確に言えば、微妙に違う。

より大きく、硬くなっている。

「このまま出ちゃうまでシテあげてもいいけど、それじゃおもしろくないよね」

そう、今日はバレンタインデーなのだ。

普通にやっていたのではつまらない。

チョコレートプレイをすると決めたからには、とことんまでシテみないと。

「じゃあ、こういうのはどうかな？」

またチョコレートクリームを掌に乗せると、今度は自分の乳房の上にトロトロとかけ落とす。

おっぱいのふくらみにそって、ツーツとゆっくり、チョコレートが流れていき、乳首に当たって二つに分かれる。

「あはあ……」

チョコレートの甘い匂いと、乳房を温く濡らす感触に、私は陶然となってしまう。

「……ほら」

自慢ではないが、私はおっぱいが同じ年頃の女の子に比べて、大きい。

そのおっぱいを左右から手で挟み、ぐいっと中に寄せるようにする。

「谷間に、チョコレートの池」

形は不正確だし、池という程大きくもないが、確かにそこには、茶褐色の三角形が出来上がっている。

「これでさ、胸で、してみない？」

パイズリに誘う。

彼に、否やのあろうはずがない。

315 名前： ピンキリ ◆UsBfe3iKus [sage] 投稿日： 2007/02/14(水) 01:07:19 ID:V59TrOjR

「うふ、いくよ……」

おっぱいを持ち上げると、彼のペニスの真上に来るようにセットする。

そして、そのまま手の力をゆっくりと抜いていく。

「あは……！」

チョコレートの溜まりの中から、ヌルツという感じに飛び出てくる、カチンカチンのペニス。

その愛おしさったらない。

「ねえ、キモチいい？」

彼に言葉はない。

瞳を上に向けて見てみると、目を瞑って、いかにも「すっげえキモチいい」といった表情だ。

「じゃあ、たっぷりしてあげる」

両の腕に力を入れ、キツくペニスを挟み込む。

上下に動かし、ぐいぐいとシゴく。

ヌチャ、ネチャ、ヌルッ。

音を文字にすると、そんな感じだと思う。

「すごい、まだ、大きくなるう……」

私のおっぱいを押しのけるかのように、彼のペニスは、まだまだどんどん逞しくなっていく。

「イク？ イク？ イッて、イッていいよ？ かけて、私に、顔に、おっぱいにかけて、イクッ？」

もう自分でも何を言っているのかわからない。

ただ、彼に思い切りイッてほしい、びゅくっと射精してほしい、白いザーメンをかけてほしい。

それだけが頭の中にある。

「ううっ！」

彼が短く呻く。

同時に、チョコレートに染まったおっぱいの中からペニスがにゆるりと突き出て、ぴゅっぴゅっと勢いよく、精液が飛び散る。

「あ、あ、ああ……」

マグマのように熱い、性欲の証。

それが、私の鼻先まで吹き上がる。

「す……ご、い」

どろり、びゅっ、どろり、びゅびゅっ。

「ほら、見て……チョコレートの中に……」

茶褐色のおっぱいに、どろどろっと零れる白い精液。

「ホワイトチョコレートが、混ざっちゃったみたいだね……うふふ」

「ああ……すっげーキモチよかったよ、アキちゃん」

「嬉しい、もっと、もっとキモチよくしてあげるね、シンジさん」

316 名前： ピンキリ ◆UsBfe3iKus [sage] 投稿日： 2007/02/14(水) 01:08:46 ID:V59TrOjR

「ちょっと待てーい！」

アキは突っ込んだ。

今の今まで適当に聞き流していたが、こればかりはスルー出来ない。

「……何ですか、いいところなのに」

「いいところ、じゃねー！ 何で私の名前とお兄さんが出てくるんだ！」

「え、常々言ってるじゃないですか。モデルは身近な人から取っている、って」

「却下！ 全力で却下！」

マナカの小説の中の人物と、実際の自分が別人扱いであるということは分かっている。しかし、だからと言って軽々しく名前を使われて、良い気がするわけがない。

しかも、チョコレートを使った変態プレイをしているとあっては。

「まあまあアキちゃん、落ち着いて」

「落ち着いてられるかー！ てか、アンタも怒りなさいよ！ お兄さんの名前が使われてるんだから！」

「えー、でもお兄ちゃんだったら喜ぶと思うけどなー」

「何でそうなる！」

「そうそう、落ち着きなさいよ、アキ」

「ショーコ？」

「私、彼氏ともっとすごいプレイをしたことがあるんだから」

「慰めのつもりかーっ！」

ぎゃあぎゃあとかしましい四人娘。

アキが一際大きく吠えた時、丁度タイミング良く、キッチンでもオーブンが鳴った。ご愁傷様というふうに、チーン、と。

2月14日、それはバレンタインデー。

暖冬に拍車をかけるアツアツな日である。

しかし、同時にモロに勝ち組と負け組が分かれる日でもある。

ふざけんじゃねーと製菓会社や聖バレンティヌスに文句を言っても始まらない。

この場の問題はそーいうところにありやしない。

六本木ヒルズに居を構えた青年実業家だろうが、世界で成功したスポーツマンだろうがどうでもいい。

このエロの格差をどうにかしろ、神様アンタは不公平だ、母さん父さん、何で私をこんな巨乳とイジラレ属性に産んだんだ……。

胸を持つてる奴が持ってない奴にイジラれる。

これぞまさに逆格差社会、恐るべきバレンタインデーの実態なのだ。

……あくまで、実態のひとつ、の。

「じゃ、残りのスノーボールを作ったら、話の続きを」

「もういい！ バレンタインデーのバカーッ！」

F I N

317 名前： ピンキリ ◆UsBfe3iKus [sage] 投稿日： 2007/02/14(水) 01:10:26 ID:V59TrOjR  
以上です。

ではまた。

318 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/14(水) 04:03:08 ID:HzHFiktc  
ピンキリ氏、G Jです！！

319 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/14(水) 12:36:42 ID:q2EHjDYa  
祭りの始まりですか？

320 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/14(水) 12:53:31 ID:6je7kgab  
バレンタイン企画一発目キ…(-\_-)キ(\_\_\_\_)キ!(-\_\_\_\_)キ!!(\_\_\_\_)キタ(\_\_\_\_)キタ!(\_\_\_\_)キタ!!(\_\_\_\_)キタ——!!!

321 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/14(水) 17:01:20 ID:PO33PplE

>>316 えろいw w w

322 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/15(木) 00:30:12 ID:fyXkFfrC  
とりあえず今週いっぱいバレンタインデー祭？

323 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/16(金) 00:06:19 ID:UMEsfHXA  
カーニバルはならずか……

324 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/16(金) 16:32:05 ID:X2yAMxR8  
祭りといえば、全盛期の頃は職人の投下順を整理しなければならないほどだったんだけどなあ

まあ、盛者必衰エーコ聖水、昔の花は今の花ならずだねえ

325 名前： ペピトーン [sage] 投稿日： 2007/02/16(金) 20:30:05 ID:nWQR4uuw

お久しぶりです。ふと思いついたので投下させていただきます。

タイトルは「空気の読めない奴」で。

326 名前： ペピトーン [sage] 投稿日： 2007/02/16(金) 20:33:29 ID:nWQR4uuw

一年生の教室ー

カナミ、アキ、マナカ、ショーコがいつものように集まって話をしていると、ショーコが、

「私、毎晩ラジオのクラシック番組聴いているんだけど、昨日はアラベスクがかかったのよ。

ところが三日前に、セビリアとスペイン狂詩曲を放送しているのよ。だったら続けてアラベスクを

おととい放送するべきでしょ？全く空気の読めないプロデューサーよねえ」

と不満そうに言ったのであった。しかし、他の三人はポカンとしている。

「ショーコちゃん、何言ってるの？」

「すみません、私クラシックには詳しくないもので…」

「アンタの事だから、大方エロい事話しているんだろうけど…」

誰一人ショーコの話についていけなかった。

「えーっ、分からない？じゃあ説明してあげるわよ」

ショーコが説明すると、

「あー、なるほどねー」

「さすが吹奏楽部員ですね」

「…つか、よくそんな事考えるよな…」

感心する者あり、呆れる者ありだった。

セビリア：アルペニス…もといアルベニス

スペイン狂詩曲：シャブリエ

アラベスク：ドビュッシー



327 名前： ペピトーン [sage] 投稿日： 2007/02/16(金) 20:40:12 ID:nWQR4uuw  
以上です。クラシックの知識が無いとちょっと分かりにくいと思いますが…  
ちなみに、NHKの名曲スケッチのHPを調べると、ここかな、というのが  
分かると思います。

なお、スペイン狂詩曲は今月24日に14時50分からNHK第二でかかるので  
興味のある方は是非聴いてみてください。クラシック初心者にも入りやすい曲  
だと思います。

最後に、おかしな二人の続編ですが、今まとめている最中です。完成次第、  
投下したいと思います。では、これで失礼します。

328 名前： 名無しさん@ピンキー [age] 投稿日： 2007/02/16(金) 22:14:00 ID:JnFoqCAx  
乙です！

氏家スレよ、蘇れ！

329 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/17(土) 00:21:06 ID:qsFqHNf6  
ペピトーン氏に乙&GJ！

330 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/17(土) 13:28:02 ID:uDNC8wAh  
乙！

331 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/17(土) 20:35:31 ID:WUBTC+be  
そう言えばショーコがクラシックに関しては至って真面目なキャラって設定  
すっかり忘れられてるよなあ…ってか、エロ以外に関しては基本的に  
どのキャラも普通なはずなんだがな…カナミにしろシンジにしろ…

あ、でもマリアあたりは授業中でも無茶苦茶な引用してるかw

332 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/18(日) 00:52:32 ID:fCgWMwR2  
シンジはかなり良識的な人間でしょ。

リアル世界にエロを持ち込まないし。

333 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/18(日) 11:38:33 ID:Uj4ActBx  
設定は氏家漫画にとってイツアバウトオーライ

334 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/18(日) 17:29:02 ID:ru+8e2L7  
カナミのエロボケに付き合うために、ベッドまで行ってしまおうシンジ(・▽・)ｲ!!

335 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/18(日) 20:46:44 ID:o/FIXD8e

「いやいやながらもちゃんとかまってくれる寛大なお兄ちゃんとか欲しくない？」

「あーいいねえ。誰のこと？」

「彼の包容力たるや並大抵じゃないわけ」

「誰だ？」

「忍耐力じゃない？」

336 名前： 名無しさん@ピンキー [age] 投稿日： 2007/02/18(日) 22:19:52 ID:KUHaN/Vj  
投下待ち

337 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/18(日) 23:05:19 ID:07xn46yo  
包容力を包莖力と読んでしまった。

338 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/19(月) 17:34:35 ID:V56FhJ9g  
やな力だなあ

339 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/19(月) 23:15:48 ID:oEORgJZ5  
>>337

(´・ω・) つ【目医者】

340 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/20(火) 00:34:51 ID:rPKvXN9n  
包"ケイ"カ

ケイちゃんを包む力ですよ

341 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/20(火) 16:05:10 ID:6UYnRLiW  
ケイと今岡を食うシンジ

342 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/21(水) 16:17:32 ID:u/2HGUE2  
氏家キャラの素エロ偏差値が知りたい

343 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/21(水) 22:30:36 ID:C3HrOHo8  
誰を偏差値 50.0 にする？

344 名前： 名無しさん@ピンキー 投稿日： 2007/02/22(木) 00:53:15 ID:Poy3FJF8

途中までですが一旦投下します。

あかほんラストからの設定で濱中 SS です。

345 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/22(木) 00:59:37 ID:Poy3FJF8

「私もライブいったよー」

「誰と行ったの？彼氏？」

「え、ええ～・・・ち、違うよ～そんなんじゃないんだから！」

「うふふ、冗談よ冗談」

「あはは、リンちゃん顔真っ赤だよ」

アヤナの言葉に顔を真っ赤にするリンコ、その様子を見ておかしそうに微笑むミサキ  
いわずもがな、元東丘中学での仲良し三人組である。

彼女らが東が丘中学を卒業して早一年の春休み、アヤナの帰国をきっかけに彼女らは再会  
を果たした。

父の海外赴任についていく形となったアヤナだったが、その父が早々にアメリカでのプロ  
ジェクトを終了させてしまう。

そうなるとう海外赴任の意味も特になくなってしまい、

アヤナ自身もアメリカでの暮らしに慣れた頃ではあったが、やはり故郷は恋しいものでこ  
れといった反論もなく

そして一年と経たない内に帰国と相成ったわけである。

346 名前： 名無しさん@ピンキー 投稿日： 2007/02/22(木) 01:02:16 ID:Poy3FJF8

そんな理由で帰国する趣旨を、アメリカに渡ってから連絡を取り続けていたミサキとリ  
ンコの二人に伝えると

「じゃあひさしぶりに集まろうよ！！」

というリンコの流れ一直線の意見により、日本の懐かしさを味わう暇もない再会となつた  
のだ。

そして話は冒頭に戻り

「もーからかわないでよ！」

頬を赤く怒ったように手をパタパタと動かすリンコ  
そんなリンコを見てアヤナとミサキの二人はクスクスと笑う。

「ごめんなさい、あんまりにも嬉しそうに言うからてっきり」  
「うん、でもそんなに慌てるって事はやっぱり男の子と行ったの？」

口上では謝りつつも追い討ちをかける二人  
何というか辺りに華やかな空気が漂い始める。

347 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/22(木) 01:04:34 ID:Poy3FJF8

「う、う～ん・・・男の子と言えば男の子だけど・・・」

「やっぱり的山さんもお年頃なのねえ、中学の時は本当に心配になるくらいポヤーっとしてたのに・・・」

「ひどいよアヤナちゃん、あたしだってもう立派な大人だよ？もうちゃんと生えてるもん！」

「いや・・・正直リンコちゃんは・・・」

「・・・変わってないみたいね」

春からは高校二年生となるが中身は相変わらずのリンコ  
だがアヤナとミサキは呆れた様子ながらもこの懐かしい空気に居心地の良さを感じていた。

「やっぱその子って同じ高校の子だったりするの？」

「うん、そうだよー」

「へえー・・・二人っきりで？」

「う、うん・・・ていっても別にデートとかじゃなくて・・・」

再び話が戻され慣れない話に顔を紅潮させるリンコ

それぞれタイプは違えど年頃の女の子、恋愛話ならどんぶり三杯は余裕であり  
なんだかんだ浮いた話の少ない彼女らはリンコの話に食いついてしまう。

348 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/22(木) 01:06:52 ID:Poy3FJF8

「えー男の子と二人っきりで遊びにいったらもうデートじゃないの？」

「どう考えてもデートよね、相手の男も男で気がなきゃ行かないだろうし」

「え、そ、そうかなあ・・・？」

「絶対そうだよ！リンコちゃんはその男の子の事どう思ってるの？」

「う～ん・・・仲の良い友達？」

「的 Mountain さんの方は恋愛感情とかないの？」

「え、そんなこと、わ、わかんないよう・・・///」

アヤナの直接的な言い方に、もともと赤い顔をさらに紅潮させるリンコ

「でも私は男の子の方は少なくとも意識してると思うわよ」

「ねー、そうじゃなきゃ二人でなんて遊び行かないもんね」

「そ、そうなのかなあ・・・えへ、えへへへへへ///」

今度は頬を両手挟むように抑えながらイヤンイヤンといった感じで顔を左右に降り始める

「ねえねえリンコちゃんが誘ったの？それとも向こうに誘われたの？」

「えっと、ペアチケットを友達からもらったからいるか？って、それで流れで一緒に行く事になって・・・」

「そんな子供みたいな口実で・・・これはもう確実なんじゃないかしら？」

「そ、そっかあなあ・・・もう小久保くんったら・・・えへへ」

「「・・・え？」」

349 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/22(木) 01:09:15 ID:Poy3FJF8

一旦ここまで、ブラウザの調子が悪いみたいで sage 忘れ多くて申し訳ありません。

続きは早ければ明日にでも投下します、誤字脱字等おかしな点あったらごめんなさい。

350 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/22(木) 01:11:29 ID:JRd1gZKi

超期待!!!

351 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/22(木) 01:27:27 ID:upUmJMqj

これはいいハーレムになりそうな予感

352 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/22(木) 03:10:46 ID:RBftcVg8

できればコテトリをお願いしまうたよ風に乗る

353 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/22(木) 04:41:52 ID:XsuPxsT8

なんという焦らし!!

続き wtkk

354 名前： 名無しさん@ピンキー [age] 投稿日： 2007/02/22(木) 08:52:02 ID:KMny7EfU

修羅場の悪寒 w

355 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/22(木) 11:05:41 ID:iEn8rL7W

これは w k t k

356 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/22(木) 15:23:16 ID:OIAMRrf3

焦らされるのは慣れてるぜ

続き w k t k

357 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/22(木) 17:09:58 ID:3OIOu0e5

特に理由もなく痴女はイ!

358 名前： アカボシ ◆Tev54wvvsyE [sage] 投稿日： 2007/02/22(木) 20:01:59 ID:NM6hi8L+

トリのテスト

359 名前： アカボシ ◆Tev54wvvsyE [sage] 投稿日： 2007/02/22(木) 20:03:21 ID:NM6hi8L+

古田氏、職人の皆様、住人の方々、お久しぶりです。あけましておめでとうございます  
同人描くとか言っておいて遅々としてすすまないへタレが帰ってきちゃいました。

ともかく、エロありの短編投下します。

タイトルは、

「城島カナミの憂鬱」

ではどうぞ。

360 名前： アカボシ ◆Tev54wvvsyE [sage] 投稿日： 2007/02/22(木) 20:04:17 ID:NM6hi8L+

～カナミからのお願い～

18禁SSを使…読む時は、部屋を暗くして家族の足音に気をつけてね！カナミとの約束だよ？

放課後。校舎の3階の、一番端っこの教室。行き当たりにある図書室は今日は休みなので、ここは誰も通ることがない。だから、学校でのプレイには丁度よかったのだ。

カナミを窓枠によりかからせて、腰を後ろに突き出させた。スカートをめくって裏返し、ノーパンの局部を覗き込むと、そこにはバイブが深々と埋まっていた。名残惜しむかのように絡みつくのを、力任せに引き抜く。

ぽっかりと空いた空洞はすぐに閉じ、今朝学校のトイレでやった時の精液が隙間からとろりと零れ落ちた。

「ねえ、ちゃんといいつけ通りにしてたから…」

ねだるように足をもじもじさせるカナミ。

「ああ、ご褒美だ。」

おあずけをくらって窮屈そうにしていた息子を、ジッパーから取り出す。カウパーで濡れた先っぽを、くちゅくちゅと音をたててカナミの入り口に擦り付ける。

「早くう…」

「焦るなよ…っと。」

後ろから一気に突きこむと、股間がカナミの温もりに包まれた。

「んっ…」

余程待ちわびていたのか、歓迎するように息子をぎゅうっと締め付けてきた。カナミの腰を掴んで隙間なく押し込んで、じっくりと膣内の感触を味わった。熱くて、柔らかくて、潤っていて、いつも優しく俺を受け入れてくれるここ。俺しか味わったことのないカナミの中を、たっぷりと愉しむ。

「焦らさないで、早くおちんちん動かしてよ…」

腰をゆすっておねだりするカナミ。アナルがひくついでる。

「やらしいな、カナミは。そんなにしてほしいのか？」

「欲しい…朝からずっと我慢してたんだから…激しく犯してほしいの…」

「こうか？」

あんまり焦らしても可哀想だから、ゆっくりとピストン運動を開始した。ぱちゅん、ぱちゅん、ぱちゅん…と、結合部から汁が飛び散る。

「うん、こうして、んっ、欲しかったの…ああんっ」

歓喜の声をあげ、快楽に浸るカナミ。益々熱を帯び複雑に絡みついてくる膣内と、カナミの喘ぎ声に理性を持っていかれる。声や音が誰かに聞かれやしないかとか、悶えるカナミの顔が外から

見られてるんじゃないかとか、どうでもよくなってきた。

メスを蹂躪することの喜びに身を任せ、狂ったように腰を打ちつける。

パンパンパンパンパンパンパンパンパンパンパンパンパンパンパンパンパンパンパンパンパン

ンパン…

「ふぁ、あつ、激しい、おまんこころけちゃうよお…♡」

爪先立ちのカナミの膝ががくがく揺れ、愛液が内股を伝って靴下まで濡らす。上半身を外に

出して窓枠に体重を預け、夕風になびいた髪が汗ばんだ頬に張り付いている。

「はっ、あんっ！凄いい、奥に当たる、ずんずん響いてるのっ！」

子宮の位置が降りてきたのか、先っぽが当たるようになってきた。カナミは最近、奥まで突いても

痛がらなくなったので、遠慮なくやれる。

カナミの左足を抱えて持ち上げ、窓際と俺で押しつぶすようにななめ上に腰を突き上げた。

「カナミ、俺そろそろ…」

「待って、まだいかないで、もう少しだから…一緒にいきたいの…」

鼻にぬける甘い声で、俺に我慢してと懇願する。上半身を起こしてひねり、俺に唇を重ねてきた。

目を開けたままそらさずにディープキス。何だか決闘でもしてるみたいだ。お互いにもっと強い快楽を

求めて一步も退かない。

てか、却って射精感を煽られた。今の俺は、放水サイレンが鳴り出しそうな決壊寸前のダム。

本当に余裕がないので、右手をカナミのクリトリスに伸ばす。なんとしてもカナミに早くイって貰わない

と困る。一緒にいこうって言われてるのに一人で先に暴発したら男が廢る。

脱力しそうな手足を踏ん張らせ、しかし繊細に愛撫する。カナミがくすぐったそうに身をよじって

息を漏らすと、唾液がこぼれた。

「あつ、いきそう…」

「中に出すぞ。」

「うん…おまんこにいっぱい飲ませて…」

許可を貰うと同時にカナミを力いっぱい抱きしめ、もう一度ディープキス。

「ん…ん～～～ッ…♡」

安らぎすら感じさせる、カナミの絶頂の声を喉に感じながら、思い切り射精した。

361 名前： アカボシ ◆Tev54wvsyE [sage] 投稿日： 2007/02/22(木) 20:06:50 ID:NM6hi8L+  
朝から預かっていたパンツを返すと、顔を真っ赤にしながらかそれを受け取った。

「…履かないのか？」

「見られてると恥ずかしい…」

何を今更と思ったが、後ろを向いてやることにした。まだふらふらするのか、一度転ぶ音が聞こえた。

「次は、お兄ちゃんの席でしたいな。」

「あそこの教室は人通り多いから難しいな…」

「そっか…」

しょうがないよね、と呟いたカナミはそのまま立ちつくした。とっくにパンツは履いたのだろうが、

カナミは動かない。長く伸びたカナミの影が、俺の影を飲み込んで一つになっている。

そして俺も、後ろを振り向けずにいた。この沈黙が何を意味するのか、俺だってわかっ

ている。

…いつまでもこのままにしておけないことがある。

悪いことをしているわけじゃないのだが、俺たちがこういう関係だということを、俺は周囲に知られたく

なかった。ごたごたするのは間違いないからな。

カナミもそれを承知してくれたが、本心ではきちんと彼女として周囲に紹介して欲しいはずなんだ。

僅かに首を傾けて後ろを見た。俯いて立ちすくむカナミ。その表情は沈みかけた陽のせい

いでよく

見えない。

だけど、見えなくてもわかる。あいつが笑っていないことくらい。

もともと、二人の関係を秘密にしようといったのは俺なんだ。俺が、カナミの笑顔を曇ら

せているんだ。

「なあ、カナミ。」

「…何？」

「いい加減、大っぴらに付き合おうか。いつまでも隠しておけないし。多少厄介な事になるかも

しれないけどさ…」

俺の言葉を遮るように、カナミが後ろから抱きしめて…飛びついてきた。

「大丈夫だって！そのくらい乗り切れるよ！！」

満面の笑みで、ほっぺたをぐりぐりと押し付けてくる。こいつのこんな笑顔を見るのも久しぶりだ。

「そうだな。俺達、その程度で駄目になるようなヤワな関係じゃないもんな。」

「それじゃあさ、明日のお昼にお弁当持ってそっちに行くね。あーん♡、とかやってバカップル認定

されよう！」

「お、お手柔らかにお願いします…」

明日、平穏な一日になればいいけどな…

翌日。

「お弁当持ってきたよー♡」

翌日の昼休み。クラスメイト達が弁当を広げだした頃、カナミが元気よく俺の教室にやってきた。

「一緒に食べよう、カズヤさん♪」

「おう。」

俺が返事すると同時に、クラスメイト達は一人残らず驚愕の叫びをあげた。

362 名前： アカボシ ◆Tev54wvsyE [sage] 投稿日： 2007/02/22(木) 20:09:07 ID:NM6hi8L+  
というわけで、シンジ×カナミと見せかけてカズヤ×カナミでした。騙されてくれたでしょう

か？  
カズヤが交際してることを秘密にしてたのは、親友の妹に手出しちゃったってのと、ク

ラス内での  
自分の立場を鑑みて、大勢から別れろとか言われるんじゃないかなーって心配してたから

です。

氏家ト全関連ファイルう p ろだに、マナカのエロ画像あげとききました。  
同人作業が遅れてるお詫びと、私の画力はこんなもんですよ、  
という意味もこめて。

ではいずれまた。

363 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/22(木) 21:15:40 ID:RBftcVg8  
おかえり&乙！

364 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/22(木) 23:37:02 ID:zvXGViG5  
>>348

手のひら返したように逆のことを二人が言い出すのか、修羅場になるのか……  
設定的に、マサヒコはフリーなんだよな。

365 名前： 344 投稿日： 2007/02/22(木) 23:53:43 ID:Poy3FJF8

>>348 の続きです。

思ったよりも書き進められませんでしたごめんなさい、まだ途中ですが投下します。

366 名前： 344 [sage] 投稿日： 2007/02/22(木) 23:58:11 ID:Poy3FJF8

それまで流れていた和やかな空気がリンコの一言によって固まった。

その発言をしたリンコ自身は今だ顔を紅潮させ自分の世界から戻ってはいないが。

「…ちょっとまってリンコちゃん」

「その一緒にライブに行った男の子ってもしかして…」

「えへへ…うん、小久保だよ」

「で、でもさっき同じ高校の子って！」

「あたしと小久保くん、同じ高校だよ？」

そうなのである

中学時代から天然天然と頭の弱い子扱いされていた的山リンコ

そしてその彼女に対してツッコミをいれていた小久保マサヒコ

相反する役割のこの二人はなんだかんだ成績のレベルが近かったため進学先が同じであった。

367 名前： 344 [sage] 投稿日： 2007/02/23(金) 00:00:31 ID:Gm9Td1er

「そういえばそうだったわね…っていうか天野さんあなた告白したんじゃないの！？」

「え、し、してないけど…」

「で、でも！小久保君の受験日に二人で手を繋いでたってお姉様が…」

「あれは…単純に手袋失敗した慰めだったっていう…」

「？よくわからないけど…そこで終わっちゃうあなたもあなたただけど、どんだけ馬鹿鈍いのあの男は…」

「そっかあ…小久保くんあたしのこと…」

「ちょ、ちょっとまってリンコちゃん！」

「そ、そうよ！やっぱり一緒に遊び行くくらいそんな珍しい事じゃ…」

二人の前半の押しによってすっかりその気になってしまったリンコを慌てて二人が止めに入る。



「でもさっき二人ともさっきは・・・」  
「いや、まあ、でも、そんな珍しい事でもないかなあって！」  
「そ、そうそう！それに小久保くんでしょ？中学校から仲良かったじゃない？」  
「それに！若田部さんなんかアメリカにいたんだからもっとすごい事とかあったんじゃないのかな！？」  
「え！？あ、あたし！？」

予想外の流れで話を振られて焦るアヤナ  
だが話を逸らそうと必死なミサキはそんなアヤナを気にする事なくその話題に突っ込む  
リンコも話が逸れてきた事とアヤナのアメリカでの生活に興味を沸き好奇心溢れる眼差し  
をアヤナに向ける。

368 名前： 344 [sage] 投稿日： 2007/02/23(金) 00:02:33 ID:Gm9Td1er

「あ・・・あたしは・・・そんなの別に・・・」  
「でもアヤナちゃん綺麗だしモテそう～」  
「向こうでアタックとかされたりしなかったの？」  
「・・・まあないわけじゃないけど、どうも積極的すぎて肌に合わないっていうか」  
「わーやっぱりあるんだーアヤナちゃんすごーい！」  
「べ、別にすごくなんかないわよ、それにどいつもこいつも軽いというかナンパという  
か・・・」  
「ふーん、そうなんだ？じゃあ彼氏とかはつくらなかつたんだ？」  
「まあ、そういうのは特にいなかったわ」

へえー、とリンコとミサキは相槌をうつ。  
なんだかんだ貞操観念は強く持っているとは思ったが、  
頭脳明晰で容姿端麗、そして家事全般をこなせる才女である若田部アヤナにそういった話  
がないのがやや意外であった。

「アヤナちゃんってどんな人がタイプなの??」  
「え、そうねえ・・・特にこれとってそういうのはないけど軽い人は嫌かしら、頭も性格  
も」  
「へえ、やっぱり誠実な人ってこと？」  
「そうね、しいていえばあんまり男過ぎないのがいいわ、あたし暑苦しいの苦手だし」  
「そっかあ、小久保くんみたいな人がいいの？」  
「そうね、なんだかんだ彼が一番あたしの好みにちか・・・って何を言わせるの的  
山さん！！」  
「・・・若田部さん？」

リンコの（無意識による）誘導尋問に乗ってしまったアヤナの言葉でミサキの背後から炎  
のような闘気が放出される。

369 名前： 344 [sage] 投稿日： 2007/02/23(金) 00:06:21 ID:Gm9Td1er

「な、何よ・・・そもそもあなたが中学の頃からちゃんとしてないから！」  
「ち、中学からじゃないもん！もっとちっちゃい頃からだもん！！」  
「なお悪いわよ！！」  
「うう・・・」  
「アヤナちゃんも小久保くんの事好きなの？」  
「正直ちょっと気になってたっていうか・・・って的山さん！」

「やっぱり・・・」

「な、なによやっぱりって！」

アヤナは照れなのか先程のリンコに勝るとも劣らない程に顔を真っ赤にし、リンコはわざとなのか無意識なのか・・・間違いなく後者だろうが場の空気を読まない誘導尋問を繰り返す。

それによってミサキはミサキで想い人に対するアヤナの隠された気持ちを知ってしまい、罪作りの想い人に対してジェラシーの炎を燃え上がらせる

結果的に話を逸らす前よりも場は収集のつかない状況となってしまったのだった。

370 名前： 344 [sage] 投稿日： 2007/02/23(金) 00:08:28 ID:Gm9Td1er

とりあえずここまで、書き上がり次第投下します。

371 名前： 名無しさん@ピンキー 投稿日： 2007/02/23(金) 00:16:35 ID:3t6Tq9en  
G.J!!

急いで続きを書く作業にもどるんだ！！

372 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/23(金) 00:53:03 ID:0qN2n6VK

しかし、定期的に参入してくる新人&異様に残留率の高いベテランなスレだなあ  
ほんと、ありがたいことだね

373 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/23(金) 07:48:11 ID:zwLBMeI3

そら氏どうしてるんだろ

374 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/24(土) 01:00:45 ID:UUUDPywG

待てば海路の日和あり、さ

375 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/24(土) 01:58:46 ID:jPOBvXZg

マサヒコは果報者だなあ・・・。まあここまでくると、とも言いたいけどシンジは羨ましく思っているだろう、イチモツ取り合って欲しいらしいから。まあ、魅力の無い私ですら思春期にはそういう妄想してたなあ。

376 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/25(日) 01:21:52 ID:DRmJBFC+

そりゃ男の子は皆そう思うわな

ウホッな趣味の持ち主以外は

377 名前： ピンキリ ◆UsBfe3iKus [sage] 投稿日： 2007/02/25(日) 19:47:02 ID:FMSaLnq2

職人の皆さん、古田氏、お疲れ様です。

濱中ハーレムものとカルナ話がなかなかまとまらず、今回は別の話です。

スルー対象ワードは「ミサキ妄想」「リョーコ悪乗り」でお願いします。

題は『二人の反省会』でお願いします。

378 名前： ピンキリ ◆UsBfe3iKus [sage] 投稿日： 2007/02/25(日) 19:48:02 ID:FMSaLnq2

バレンタインデーの喧騒も過ぎ去った二月の下旬、

天野ミサキは中村リョーコのマンションへと来ていた。

「まだ他の面子が来るまで、少し時間がありそうね」

「そうですね」

この訪問には、当然理由がある。

リョーコが「久しぶりに一緒に飯でも食いにいかない」と皆を誘ったのだが、

寒空の下で集まることもあるまいと、集合場所をリョーコの家指定しただけのことである。

それで、たまたまミサキが皆より早めにやってきてしまったのだ。

「じゃ、バレンタインデーの反省会でもするか」

中村リョーコは、いかにも教師然とした態度で口を開いた。  
この辺り、家庭教師としての経験が反映されているのか、いかにもそれらしく見えたりなんかする。

「え、バレンタインデーの、ですか？」

「そうよ」

「何ですか？」

「そりゃー……」

皆が集まるまで暇だから、などとはリョーコは口に出さない。  
いくらでも嘘八百をつける舌を回転させて、もっともらしい理屈をつむぎ出す。

「……ミサキだけが、ちゃんとした彼氏を持ってるからよ。マサっていう」

本来、このように問いただす権利などリョーコにはない。

しかし、そんなことは関係なく仕切るのが、中村リョーコという人間だ。  
彼女の興味や嗜好で物事が進むのは、このようなプライベートな集まりにおいては日常茶飯事なことである。

「当然アンタはマサにあげたんでしょ？」

「え……は、はい」

リョーコが「当然」という言葉を使うのには、もちろん意味がある。  
中学を卒業して以降、天野ミサキとマサ、つまり小久保マサヒコは周囲公認のカップルになっているからだ。

「で？ 反応はどうだった？」

「その、『ありがとう』って、喜んでくれました」

「そんだけ？」

「それだけですけど」

男が恋人からチョコレートを貰って、ありがとうと言う。  
そのどこにも、おかしなところはない。

だが、そこにいらん茶々を入れるのもまた、中村リョーコなのである。

「ふーん……そっからラブホへ直行とか、急に押し倒したりとかは無かったわけ？」

「そ、そんな！ あるわけないじゃないですか」

顔を真っ赤にして恥ずかしがるミサキに、リョーコは意味深な薄笑いを送ってみせた。

「アンタ……愛されてないわね」

「え、えーっ!？」

「バレンタインデー、それはクリスマスと並ぶ一大イベントよ？」

「は、はあ」

「つまり、恋人同士が一番セックスする日なのよ？」

「はあ？」

リョーコの言葉は半分本当で半分嘘である。  
某週刊誌がつきあっている男女を対象に、独自にアンケートを取って調べたところ、  
クリスマスとバレンタインデーは、『セックスする日』としてかなり割合が多かったのだ。

無論、アンケート上での回答がそうだったというだけで、  
恋人同士ならイベントに関係なくヤル時はヤッているわけだから、  
リョーコが強調する程のことは実際のところ、ない。

まあ、リョーコはそこいらも充分承知の上でミサキに話しているわけだが。

「その日に誘われなかったってことは、つまりはマサの愛情もその程度のモンってことよ」

元がキラキラした恋愛に対して懐疑的な彼女のこと、

ミサキのような純愛街道一直線少女には、ひねくれた悪戯を仕掛けたいくなるのである。  
これはもう、中村リョーコという女の救いがたい性としか言いようがない。

「そ、それはあんまりだと思います！」

「てかさ、アンタの方から誘わなかったワケ？」

「え！」

「普通誘うわよねえ、普通」

これももちろん誇張である。

ヤル時はヤル、ヤリタイ時にヤリタイ。

別にバレンタインをダシにしなければならない理由などどこにもない。

379 名前： ピンキリ ◆UsBfe3iKus [sage] 投稿日： 2007/02/25(日) 19:49:08 ID:FMSaLnq2

「あーあ、そこでヤッチゃえば、もう関係としては万全だったのにねえ」

「……」

「それで、マサは他に何か言ってた？」

「他に、ですか」

「そう、学校で別の女の子から貰った、とか」

「そ、そ、そんな！」

「ふんふん、ふふふ」

ますます悪い笑顔になるリョーコ。

もうこうなると、完全に彼女のペースである。

「マサは顔は充分に男前じゃない？」

「うう」

「で、高校が別ってことで、アンタの存在を知らない女の子も当然いると思うのよねえ」

「……」

「義理も含めて、かなり貰ってると私は踏んだわね」

「で、で、でも」

「でも？」

「マサちゃんは、べ、別にそんなことは一言も」

「ふんふん、ふっふっふ」

中村ワールド全開。

停まらない列車がびゅんびゅん突き進んでいく。

「そりゃー、言うわけないじゃん。男の立場としてさ」

はい、ハッターです。

マサヒコの一種あっけらかんとした性格からすれば、そんな隠し事は絶対にしないわけだが、

それをアヤシゲな他の理論で覆い潰し、話を飛躍させるなど、リョーコにとってはお茶の子さいさい。

「え……」

「狙ってるわよ、他の女がね。間違いないわ」

実際、マサヒコは高校生になって、背も伸びたし顔もぐっと男らしさを増した。

同世代の女の子が胸をときめかせるのに充分なだけの要素を持っている。

「そうねえ、最低でも十個以上は貰ってるはずよ」

「じゅ、じゅ、じゅっこ」

と、ここでリョーコの瞳に、さらに悪女のギラリとした光が灯った。

ミサキをからかうに、もっとおもしろい展開を思いついたのだ。

「もしかしたら、リンもあげてるかも」

すなわち、ミサキと仲が良い親友の名前を出すこと。

「えっ、リンちゃんが!？」

「そうそう、それにアヤナもアイも」

「わ、わ、若田部さんと濱中先生!？」

確証がまったくない言葉を、リョーコはぺらぺらりと舌に乗せる。

だが、ミサキにはそれがカマシだと見抜けない。

疑心の迷路に突入だ。

「で、でも、ふ、三人ともそんなことは、ひ、ひ、一言も」

「だから、言うわけないじゃない」

「うう……」

「略奪愛を狙っているなら、尚更ね」

「ふあっ！」

ミサキは仰け反った。

380 名前： ピンキリ ◆UsBfe3iKus [sage] 投稿日： 2007/02/25(日) 19:50:07 ID:FMSaLnq2

「ま、そういうこともあるかもってことよ」

「ううう」

ミサキの打ちひしがれっぷりに、さすがにリョーコもヤリすぎだと感じたのか、フォローっぽい台詞を口にした。

自分で煽っておいてフォローも何もないものだが、こういうのは確かに行き過ぎてはマズイ。

友情にヒビが入りかねないからだ。

「だからね、そういう心配をしないですむためにも、セックスしろって言ってんのよ」

「……」

「マサのことが大好きで、誰にも奪われたくないってんなら、絶対そうしなさい」

クレイ過ぎる純愛が大嫌いなリョーコらしくない発言だが、実際、事実の一面についている。

身体で繋ぎとめると言うところかドロドロした印象を受けるが、

恋の進行においてはセックスは別に邪魔でも何でもない。

遅いか速いかの違いがあるだけで、恋人同士なら必ず一度は通る道なのだ。

そして確かに、愛はそれで深まっていく。

「そうねえ、そこでいっそ孕んじゃうってのも手かも」

「はあ!？」

「デキちゃえば完全にアンタのものよ、マサは？」

「そんな、乱暴な」

「あら、アンタは欲しくないわけ？ マサの子種を」

「あ、あ、赤ちゃんは、その、きちんとした手順としかるべき時期をもって、その、あの」

「手順？ 時期？ それって結婚してからってこと？ はん、甘い甘い」

「うええ」

「アンタ今 16 歳だったっけ？ 問題ナシ、立派にこどもを産めるじゃん」

「そ、そんなあ！」

「アンタとマサの母さん、結構早く孫の顔を見たそうだけど？」

マサヒコの母とミサキの母、ともにまだまだお祖母ちゃんと呼ばれるような歳ではないし、呼ばれたくもないに違いない。

だが、マサヒコとミサキがつきあいだしたことで周りで一番喜んでいたのはこの二人であっ

たし、  
特にマサヒコの母は、マサヒコとミサキをくつつけるために色々と画策したこともあった。

もし結婚前にミサキが妊娠してしまっても、二人は驚きはするだろうが、同時に嬉しがりもするだろう。

「わ、私もマサちゃんも学生です！」

「いーじゃん、別に」

「ふぎゃあ」

ミサキの必死な反論も、リョーコの壁の前では無力。

と言うか、ミサキは真剣に話しているが、リョーコは半ば適当に喋っているので、噛みあうも噛みあわないもないわけだが。

「ほら、想像してごらんなさい」

「え？」

「マサのこどもがデキちゃった時のことを、さ」

「……」

「そうしたら、マサは完全にアンタのもんよ？」

「わたしが、マサちゃん、の……」



381 名前： ピンキリ ◆UsBfe3iKus [sage] 投稿日： 2007/02/25(日) 19:51:18 ID:FMSaLnq2

マサちゃん、どうしたのかなあ。

今日はなんだかすっごく真面目な顔して。

いや、普段が不真面目だとは言わないけど。

キリッとした顔で、ずっと私を見てる。

「ミサキ……」

マサちゃんは私の名前を呟くと、不意に肩を掴んで押し倒してきた。

ど、どうしたんだろう。

セ、セ、セックスしたいのかな。

そ、そんなの、イキナリじゃなくても、言ってくればちゃんと……。

「ミサキ……」

「マ、マサちゃ……んんっ！」

物凄い力。

唇を押し付けられ、吸われ、舌を捻じ込まれる。

あ、ダメだ。

何か、強引にされるのもいいかもって、ちょっと思っちゃった。

そっちのケは無いつもりだったのに、もしかしたら私、乱暴にされる方が、その、いいのかも。

「あ、あっ！」

え、そんな、いきなり下を、アソコを、ゆ、指で。

ダメ、ダメ、触られたら、やだ、やだ。

「ミサキ、もう、濡れてきた……」

マサちゃんに言われなくても、自分でわかっちゃう。

ほんの数回、クリトリスを突付かれただけで、じわってきちゃってる。

やっぱり私、その、無理矢理ってのに感じちゃってるのかな。

「すごいな、ミサキは」

そんな、淫らな女の子みたいに言わないで。  
マサちゃんだから、マサちゃんだからこうなるの。  
ホントなんだから、ホントにホントなんだから。

「あ、あ……マサちゃあん……っ！」

女の方は誰しも、好きな男性に支配されたいって思ってるってよく言うけど、あれって本当なのかもしれない。  
マサちゃんに強引に抱かれて、だって私、こんなにもボウツとしちゃってるもの。お腹の中と頭の奥が、ジンジンって痺れてきてるもの。

「もう、いくよ」

え、そ、そんな。

まだ服だって脱いでないのに、ゴムだって付けてないのに、ホ、ホントに強引に。

「ゴメン、ミサキ……！」

「う、あああう！」

マサちゃんのおっきなアレが、私の中にぐいぐいっと入ってくる。  
ああ、すごい、ダメだ。

頭のとっぺんまで貫かれたみたい。

キモチ良すぎる。

良すぎて、すぐイッちゃう。

「ミサキ、ミサキ！」

「マサちゃん、や、あ、わ、私、ああん！」

マサちゃんが腰を動かす強さと速さが、いつもと違う。  
いつもの、私を気遣ってくれるような優しい動きじゃない。  
友達の家で見たアダルトビデオみたいに、激しい動き。  
これじゃ、ホントにすぐイッちゃう。

「ミサキ、俺、もうっ！」

「マサちゃん、はっ、あっ、ああ！ ダメ、中は、今日は！」

今日はアブナイ日なの、ヤメてマサちゃん。  
中に出されたら、デキちゃう、妊娠しちゃう。  
まだ心の準備が、その、出来てない。

「ミサキッ……！」

「あ、あ……あうう、っ！」

真っ白になっちゃった、頭の中が。  
子宮にどくどくとマサちゃんの精液がぶつかるのが、わかる。  
イッちゃってるのに、感覚が飛んじちゃってるのに、そこだけがハッキリとわかる。

382 名前： ピンキリ ◆UsBfe3iKus [sage] 投稿日： 2007/02/25(日) 19:52:57 ID:FMSaLnq2

「ミサキ……」

「ああ、マサちゃん……に、妊娠しちゃうよお……」

非難のつもりはなかったけど、どうしてもそんな感じでしか言葉を出せない。  
いずれはマサちゃんと結婚して、幸せな家庭を築くのが夢だった。  
もちろん、たくさん子どもがいたらいいなって思った。  
だけど、まだ結婚どころか、婚約だってしてないのに。  
ちゃんと段階を踏んでから、その、作るって互いに理解しあってから、中で思い切り出して欲しかった。

「……ミサキ、あのな」

「え……？」

「結婚、しよう」

何、それ。

ま、まさか、プ、プロポーズ！？

「俺、不器用だから、どう言ってもいいかわからないけど」

「マサ、ちゃん」

「もう、一秒も離れてたくないんだ」

「……」

もしかして、それを言うために、強引に私を抱いて、中に出したの？

わ、わ、私とすぐにでも結婚したかったから、デキちゃうのを覚悟で、中に？

「無理矢理中に出してゴメン、でも、俺……ミサキの顔みたら、止まらなくなっちゃって……」

「……マサちゃん」

「ミサキのキモチを無視した形になってるのは、ホント悪いと思ってる。だけど、あの、その」

「ヒドイ」

「え？」

うん、ヒドイよ。

やっぱり、先に抱くんじゃなくて、中に出すんじゃなくて、口でちゃんと言ってからにして欲しかった。

でも……。

「マサちゃん、私のこと、好き？」

「え、あ、当たり前だろ」

「それで、止まらなくなっちゃったの？ 強引に中に出して、デキちゃうかもしれないのに？」

「べ、別に既成事実を作ろうとか、そんな下種なこと考えてないっ。ただ、俺は……」

ああ、わかる、わかるよマサちゃん。

嬉しい、そこまで私のことを好きでいてくれて。

私もマサちゃんが大好き、心の底から大好き。

明日にだって一緒になりたい、結婚したい。

マサちゃんのこどもを妊娠したい。

マサちゃんに支配されたい。

マサちゃんを私だけのものにしたたい。

「ね、マサちゃん」

「え？ あいた！」

えい、デコピン一発。

「いてて、ミ、ミサキ……」

「いいよ」

「えっ！？」

「私もマサちゃんが大好き、だから、結婚しよ」

「ミ、ミ、ミサキ！？」

「んー、でも、やっぱりイキナリじゃなくて、まずプロポーズしてから抱いて欲しかったなあ」

「……ゴメン」

顔を真っ赤にして下を向くマサちゃん。

うふふ、可愛い。



「ね、マサちゃん……」

「ん？」

「私を、本当にマサちゃんだけのモノにして」

「……へ？」

「もう一回、ううん、これからは何回でも、その、な、中に出して、い、いいよ…  
…？」

うわ、自分でもすごいことを言ってるってわかる。

わかるけど、私ももう、止められない、止まらない。

「結婚しよ、そして……赤ちゃん、つくろ？」



383 名前： ピンキリ ◆UsBfe3iKus [sage] 投稿日： 2007/02/25(日) 19:54:02 ID:FMSaLnq2

「……ミサキ、ちょっと、アンタ、おーい！」

「マサちゃんの、子を、私が、にんしん……」

「おーい！ 帰ってこーい！」

「……はっ！」

ミサキは頬をペシペシとはたかれ、正気に戻った。

リョーコに「想像してみろ」と言われて、一分足らず。

その間、ミサキは遙か妄想の世界へとトリップしていたのだ。

「な、中村先生……」

「ふいー、かなり怖かったわよ、この一分間のアンタ」

焦点の定まらない瞳で宙を見つめ、

恋人の名前をポソポソと呟きつつ、妄想にドップリと浸る少女。

成る程、確かに側から見れば恐ろしいものがある。

「アンタ、かなり思い込み激しいからねー」

「……す、すみません」

「私も悪かったわよ。ちょっと言い過ぎた」

ミサキのいい旅夢気分な状態を目の当たりにして、さすがにリョーコも口が過ぎたと思っ  
たのだらう。

彼女にしては珍しく、素直に自身の非を認めた。

「はい……」

「ま、今のところは心配ないでしょ。マサの性格からして、隠し事が出来るとは思えない  
しね」

「……そうですよね、そうです」

リョーコの言葉に頷き、ミサキ、ちょっと反省。

「マサちゃんは、そんな人じゃないですもんね」

ミサキは幼い頃からよく知っているはずだった。

マサヒコは、信じるに足り、ひよひよいと嘘をついたり裏切ったりするような真似はし  
ないと。

何かあったら、絶対に理由を説明してくれる人間だ、と。

それをよくわかっていながらもリョーコの出任せにノってしまったのは、

ミサキが恋する女として正常な心を持っていたからだろう。

人間、恋をすると小さなこともヤケに気になるようになる。

疑り深くもなるし、我俣にもなる。

それらの感情は恋愛に絶対の付き物だが、それが理由で、好きなのに破局するという例も

あるのだ。

今回の件は、明らかにリョーコの悪乗りが過ぎたわけではあるが。

384 名前： ピンキリ ◆UsBfe3iKus [sage] 投稿日： 2007/02/25(日) 19:55:29 ID:FMSaLnq2

「すいませーん、遅くなりました」

「こんにちは」

「おじゃましまーすう」

「先輩、あがりますよー？」

反省会(?)が一段落ついたその時、ナイスタイミングで残りの面子がやってきた。ドヤドヤと玄関から、リョーコとミサキの耳に皆の声が聞こえてくる。

「下のエレベーターで偶然皆と会って……あれ、ミサキは先に来てたのか。携帯に出ないからどうしたのかと思ってたけど」

一同の先頭をきって部屋に上がってきたのは、マサヒコだった。

「マ、マサちゃん！」

「な、何だ？」

いらっしゃいの言葉より早く、ミサキは立ち上がると、マサヒコに近寄り、その胸の中へと飛び込んだ。

「わ！ ミ、ミサキ!？」

突然のミサキの行動に、抱きつかれたマサヒコを含む全員が驚いた。

「マサちゃん、信じてるから」

「はあ？」

「私、こどもは男の子が二人、女の子が一人がいいな」

「ひい？」

一同沈黙。

事の経過を知るリョーコですらも、啞然としている。

「若田部さん、リンちゃん、濱中先生」

マサヒコにしがみついたまま、顔だけをミサキは三人の方へと向けた。

「絶対、あげないんだから、マサちゃんは！」

「ふう！」

「へえ！」

「ほー！」

リョーコにデマカセをかまされた時のミサキ以上に、仰け反るアヤナ、リンコ、アイ。そして、わけがわからず固まってしまうマサヒコ。

「ありやりや……」

リョーコは自失から回復すると、そんなミサキと他の皆を見て、額の辺りをポリポリと人差し指でかいた。

そして思った。ミサキの爆裂純愛の炎に水をかけてやるつもりが、逆に油を注いでしまったようだ、と。

「反省会の結論、炊き付けは程ほどに……か」

自分で勝手に始めたバレンタインデーの反省会を、同様に勝手に締めくくるリョーコなのだった。

385 名前： ピンキリ ◆UsBfe3iKus [sage] 投稿日： 2007/02/25(日) 19:56:44 ID:FMSaLnq2  
以上です。  
ではまた。

386 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/25(日) 20:23:41 ID:sPJ4gK8Z  
ピンキリ氏G J！  
妄想ミサキがステキです

387 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/25(日) 21:29:57 ID:obZurLGA  
>>385 G J！！

388 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/26(月) 01:59:27 ID:VruQhb7A  
あっちの世界へトリップするミサキワス（°▽°）  
ピンキリ氏(o^-')bグッジョブ

389 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/26(月) 19:29:13 ID:EySQI+jZ  
ピンキリ氏、グジョーブ！

390 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/27(火) 13:08:15 ID:pZCR+E5M  
マサハーレム

391 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/27(火) 19:16:01 ID:muJT2vDu  
・・・郭氏マダー？

392 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/28(水) 10:30:16 ID:FtftRrX/  
ハーレムマダー？

393 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/02/28(水) 11:53:53 ID:C15CSVXD  
ハーレムハーレム

394 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/03/01(木) 04:32:20 ID:3zGBhmcI  
ハークルハークル

395 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/03/01(木) 08:47:13 ID:zC5uHzv0  
シッコクシッコク

396 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/03/02(金) 07:07:36 ID:3MYTyxwH  
また変な流れに...

397 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/03/02(金) 09:23:32 ID:lP4BJg+M  
ニッケルニッケル

398 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/03/03(土) 02:23:35 ID:2O2iwM1d  
ニフラムニフラム

399 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/03/03(土) 08:43:11 ID:C0pfoMTt  
パワフルパワフルパワフル全開なあみサキ  
マサは凄いぞ天才的だぞ将来楽しみだー

400 名前： 名無しさん@ピンキー [sage] 投稿日： 2007/03/03(土) 08:48:45 ID:+qS0upWd  
マサが勇者でドクエ3だったら～